

575

237



0034937000

0034937-000

575-237

マルクス主義と独逸軍隊

フオルクマン・著

不二書院

昭和3

AGC

3.8.21

マルクス主義と獨逸軍隊



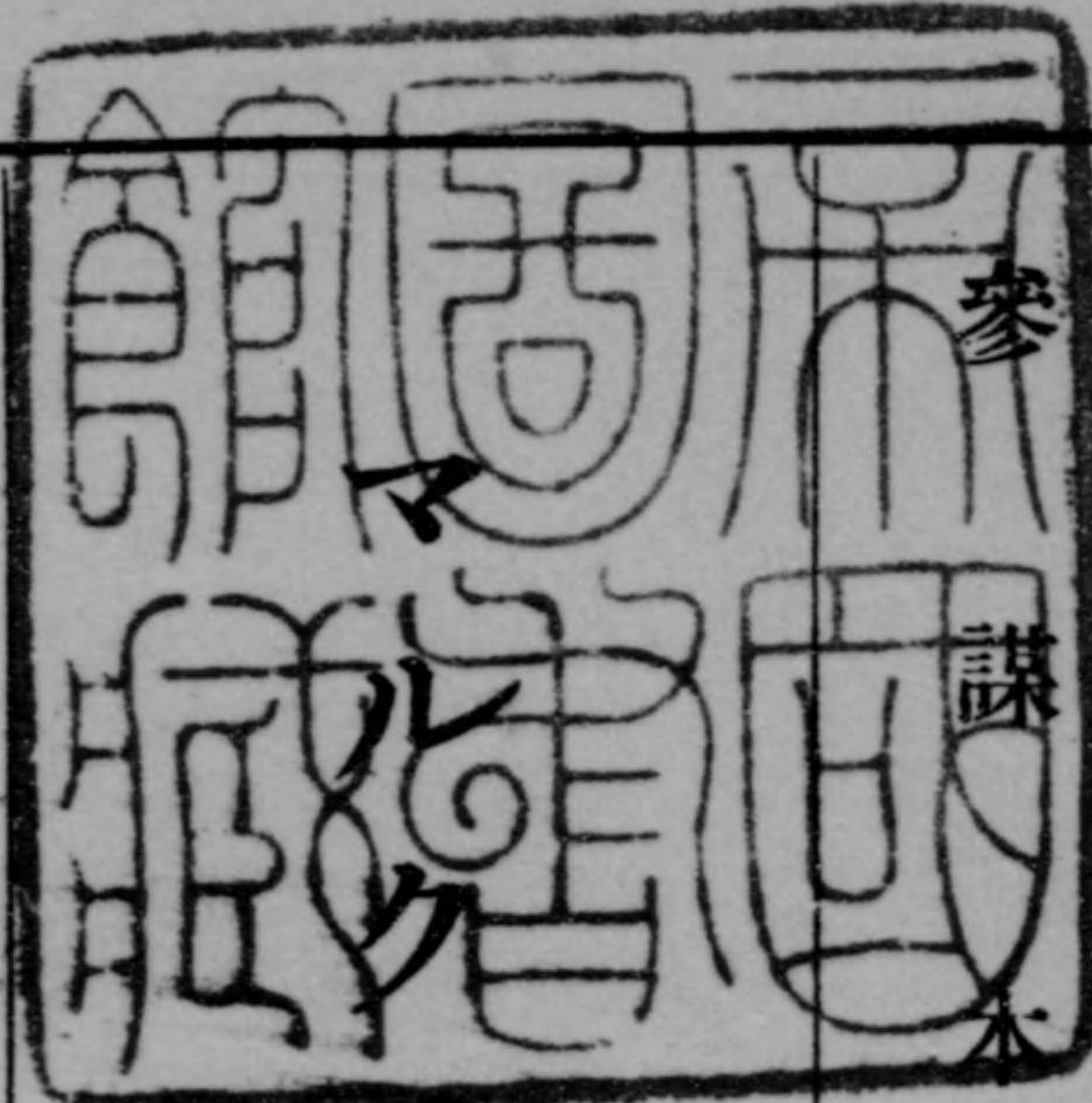
著者 井中 長石
編輯 井中 長石
出版 井中 長石

主義と獨逸軍隊



不二書院

獨逸陸軍少佐フオルクマン著
參謀本部第二部長松井中將序
部 譯



主義と獨逸軍隊



東京

不二書院

序

世界大戦は寔に人類の歴史ありて以來、未曾有の大惨劇であつた。巨億の財帛と千萬の生靈とは、此惨劇の犠牲であつた。而して此貴い犠牲は、果して何物を購ひ得たであらうか。恒久の平和！ 永遠の平和！ 總べてが求めんと欲した所は之であつたらうが、さて吾人は此目的に向て、幾何の歩を進め得たであらうか。

遮莫、夫の世界大戦が、我人類史に印した足跡は、決して輕微なものでなかつた。即ち大戦前と、後とを比較する時、何人も現世界の世相に、恐るべき大なる變革を認めぬ者はあるまい。然らば何をか其大變革とは云ふ。吾人は所謂ヴェルサイユ會議と云ふものの遺した、かの世界地圖の塗り換へといふが如きを指すものではない。即ち今更聲高く呼號するまでもなく、人類思潮の大變革がそれである。

共產露國の出現 大獨逸帝國の共和化！ 誰か之を一時の變調として看過し得や

う。之こそ實に永き期間を通じて、醗酵せられた氣運が、此世界大戰を動機として、勃然擡頭したのであつて、此の趨勢は、單に露國と獨國との、歴史ある團體を崩壊したのみに止まらず、今や全世界を通じて、到る處に何等かの形式に依つて、此風潮の交感を受けて居ないものはないと云つて差支あるまい。此事實は餘りに明瞭で、何人も之を否定することは出來まいと思ふ。

此氣運が、其噴出口を見出した、露國及獨逸國が、如何なる事情の下に置かれたが故に、斯の如き結果を生み出すに至つたかといふことは、凡そ此風潮に注意を拂つて居る者の、其各々の立場如何は別としても、誰しも知らんと欲する所たるを疑はない。

本書の原著者は大戰當時責任ある地位に在り、戦後信憑すべき資料を基礎とし、獨逸を中心として、世界大戰とマルクス主義との關係を叙述したのが即ち本書なのである。即ち大戰前より其末期に亘つて、プロシヤ思想を中心とする獨逸の帝國主

義と、此マルクス主義とが、如何に執拗なる鬭争を續けて來たか、兩者の陣容は果して如何であつたか、而して遂に如何なる結果に終つたか。此等の経緯は本書の取扱つた主なる題材であつて、専門の研究家にも、亦興味中心の讀者にも、共に有益にして且つ趣味の饒かなることを、發見されるに相違ないと信するのである。

即今マルクスに關する研究は、各方面に亘りて頗る熾烈なる勢を示して居る。此際此思想の實際的効果の如何を觀察することは、決して徒事であるまいと思ふ。

昭和三年五月

參謀本部に於て

松井石根識

本書は、歴史傳統の上から見ても、亦教育上から見ても、全く帝國主義的性質を帯びて居た、獨逸陸軍及び海軍と、一方マルクス主義を奉じ、インターナショナルを背景にして居る獨逸社會主義との、戰爭中に於ける關係を取扱つたものである。本書は更に今述べた範圍を越えて、一層廣い意味に於て、獨逸國內に於ける國家思想と、國際思想との争闘を明かにしようとして居る。即ち、國家主義者中、平和主義を提唱して居た、ブルジョア階級の事は、此處には全く考慮されない。此方面の平和主義と、社會民主主義との間には、世界大戰中、何等直接の關係がなかつた。この二つのものは、言論上にも實際上にも、亦別な道を進んだのである。

本書の記述を、インターナショナルの最も極端なる捧持者である、左翼社會主義者の、過激的諸團體に關することに限る事は、當を得たものでないと思はれる。何

恐 共 不 畏 編

緒 言

本書は、歴史傳統の上から見ても、亦教育上から見ても、全く帝國主義的性質を帯びて居た、獨逸陸軍及び海軍と、一方マルクス主義を奉じ、インターナショナルを背景にして居る獨逸社會主義との、戰爭中に於ける關係を取扱つたものである。本書は更に今述べた範圍を越えて、一層廣い意味に於て、獨逸國內に於ける國家思想と、國際思想との争闘を明かにしようとして居る。即ち、國家主義者中、平和主義を提唱して居た、ブルジョア階級の事は、此處には全く考慮されない。此方面の平和主義と、社會民主主義との間には、世界大戰中、何等直接の關係がなかつた。この二つのものは、言論上にも實際上にも、亦別な道を進んだのである。

本書の記述を、インターナショナルの最も極端なる捧持者である、左翼社會主義者の、過激的諸團體に關することに限る事は、當を得たものでないと思はれる。何

故といふに、千九百十四年八月四日と、千九百十八年十一月九日の間に於ける、獨逸社會民主黨の發展は、分つ事の出来ない一體を形成して居るものであるからである。而して材料過多のため、此處には唯問題たる國家的思想問題に就きて多くを集中し、この問題と密接に結ばれた社會主義及びその他の問題でも、餘り必要でないと思ふものは、出来るだけ除外する事にして居る。國家的思想方面にありては、主として軍隊の事のみが考察されて居るのは、然しこの方面丈りで、争闘の主要な根本的諸相は、十分に認める事が出来るのである。軍隊は又戦争中インターナショナルを撃退する爲に、第一線に立つて居たのである。結局凡ゆる國家的精力は、軍隊を焦點として集つた。先づ第一に、軍隊の指導者中には、特に戦争の後半期に於て、世界を風靡する様な、多數の内外の敵に對して、絶對絶命の戦闘を繼續する力が流れ出たのである。

本書は、この方面の事件に關して、完全なものであるとも、亦絶對に正確なもの

であるとも、主張するものではない。政府並に諸黨派の證據文書が悉く公にされな
い間は、誤謬は避け難い事である。従つて事實に關しての讀者の高教は、私の感謝
して受けるところである。

國民全體の、最も痛い傷痕に觸れる問題を取扱ふに當つて、公平無私の描寫を爲
す事の困難は、餘りに明瞭な事であつて、此處に特に高調する必要はないと思ふ。
且つ今日はまだ、これらの問題に對して、歴史的最後の判断を下す時でない事も亦
疑のない時である。私共は一般にまだ餘りに強く、事件の壓迫を受けて居るのであ
つて、我等の思考、我等の感情は、まだこれに支配されて居るのである。さりなが
ら故らに偏頗な黨派政策的な、宣傳の目的を有する描寫に委して、社會にとり極め
て必要な而も明瞭な真相を發表するに對し之を隠蔽せんとするは、良くない事であ
ると思ふ。かるが故に様々の憂慮はあるにしても、此處に取扱はれる重大なる問題
の解決の爲に、歴史的資料を提供し、混亂した様々な意見の繁みを通じて、道を開

拓する事を援助し、片寄らない而も事實に直面した判断を下す基礎を造る事は、蓋し刻下の急務であり、又祖國に對する義務である。

表現の形式に關して、私は尙此處に一言を加へたい。即ち實際今日無數になされて居る様に、狂熱的な非難攻撃を持ち出す事は、何等の役にも立たないといふ事である。實際の事實を根據とし、手に入るだけの文書的材料を利用しての表現のみが、吾が國家の不幸に對する罪責は何處にあるか、又如何なる人々によつて分たるべきものであるかといふ、判断となる事を得せしめるものである。私は出來事を出來るだけ客觀的に描寫し、兩方の側に口を開かしめる様に努力したつもりである。私はかくする事が、國家に對する最善の奉仕であると信ずる者である。世間の喝采は私の問ふ處ではない。

千九百二十四年十月

ポツダムに於て

フオルクマン

マルクス主義と獨逸軍隊

目次

序

プロシヤ思想と社會主義……………一

歐洲戦争前のインターナショナルの思想……………六

マルクス及エンゲルス……………六

第一、第二インターナショナル……………一〇

獨逸社會民主黨……………一六

労働組合……………二三

フランスの社會主義……………二六

英國の社會主義……………二六

ロシアの社會主義……………三〇

戦前の獨逸軍隊と社會民主黨……………三三

一九一四年八月四日……………三九

危機に立つた社會主義……………三九

國家主義の勝利……………四二

リッダーの更迭……………四五

戦時費に對する賛成……………四八

フランスの社會主義……………五四

イギリスの社會主義……………六〇

ロシアの社會主義……………六三

新政策の樹立……………六七

八月四日から分裂までの獨逸社會民主黨……………七四

獨逸社會主義に於ける諸潮流……………七四

インターナショナルの挑戦……………八五

黨の對政府態度及その経緯……………九一

自由産業組合の諸運動……………一〇〇

社會黨の紛争が軍隊に與へた影響……………一〇四

獨逸社會民主黨の分裂……………一〇七

はしがき……………一〇七

黨代議士會の分裂……………一〇九

一九一六年から一七年まで…………… 一〇〇

黨の分裂…………… 一〇七

一九一七年夏の獨逸社會民主黨の結黨…………… 一二七

獨逸國外のインターナショナルの發展…………… 一二四

 労働者國際社會主義黨…………… 一三四

 ストツクホルム大會…………… 一三六

 チンメルワルド、キーンタール大會…………… 一三九

 ロシヤの革命…………… 一三一

八の一九一七年夏、佛軍内の暴動…………… 一三八

 イギリスのインターナショナル…………… 一四二

↓

インターナショナルの思想に對する獨逸政府の防禦…………… 一四六

國民、軍隊の愛國精神…………… 一四六

政府當局と軍隊當局との間の不調和…………… 一五一

獨逸國內の争亂…………… 一五九

 ストライキ…………… 一五九

 兵役並に勞働義務の擴張…………… 一七六

獨逸軍隊内の階級闘争…………… 一八二

 軍隊組織の弱點…………… 一八四

 軍法會議の運用…………… 一九一

 勳章の授與…………… 一九四

 將校、下士卒への食糧給與…………… 一九五

 軍事幹部の周章…………… 一九七

ロシア革命の影響……………101

國家主義の宣傳……………108

海軍に於ける階級闘争……………119

一九一七年夏の水兵ストライキ……………124

一九一八年の戦線の激變……………136

春季大攻勢の決心……………136

大攻撃の経過……………144

士氣の衰退と兵員補充……………150

六月下旬の攻撃繼續決定……………159

軍事上の敗北……………161

一九一八年革命前の獨逸社會主義……………171

革命の準備……………171

十一月革命……………185

海軍ストライキ……………187

海軍ストライキの波及……………191

ミュンヘンの革命……………199

ベルリンの革命……………203

軍事幹部の態度……………213

革命に對する野戦軍の影響……………241

總統帥部の態度……………241

兵士の委員會……………244

西方戦線の撤退……………253

西方軍の離散……………三五六

東方軍の影響……………三五八

結 末……………三六五

マルクス主義と獨逸軍隊



プロシヤ思想と社會主義

1

世界大戰に於ては、第一重の決戦が試みられた。戦場にあつては各國民の國家的利害、並に帝國主義的目的の爲に戦はれ、戦地の後方、本國內部にあつてはマルクスのコミュニニスト・マニフェストが労働者の中に投ぜられてより此の方、國家を忘れた社會主義の世界征服の戦闘が開始されてゐた。交戦諸國は多少の差こそあれ、悉くこの社會主義に浸潤され、就中最大の打撃を被つた舊ツァーイル露西亞帝國は、遂に之が爲に姿を變へて、戦勝國の仲間から除かれるに至つた。然し、全體から見て、この二つの思想の闘争はいづれにも勝敗の決を見ずして終つてしまつた。大戰前にこの社

會主義的國際主義の最期を豫言した人々の言葉も當らなかつたし、革命からマルクシズムの勝利を期待した他の人々の希望も事實とはならなかつた。西部歐羅巴にあつては、依然として國家主義と帝國主義とが、武力の優劣といふ事を以て、表面上至極簡単に勝利を占めてゐた。

この二種の世界觀の戦闘によつて最も手強く振盪されたのは、ロシアに次いで獨逸國であつた。その大きい鬭争の影は、まだ未來までも掩ふてゐる有様である。

世界大戰中、一九一四年八月四日と一九一八年十一月九日とは、獨逸の内政上、極端な發展を劃する二大時期であつた。八月四日には、國民全體が自發的に國家主義に對する信仰を告白した。この日、社會民主黨も亦一時その教説の國際的持論を差控へて、無條件に國家主義の戦列に加はり、是迄あれ程激烈に攻撃してきた敵に、國民の指導を任せてしまつた。官吏團と將校團とによつて最も鮮明に體現されてゐたプロシヤ思想と完全に同盟したのである。この爲、今迄充分協調出來なかつた各聯邦の間にも一時に融和が出來て、稀に見る一致團結が生れた。

然し、この團結がやがて弛緩して、マルクスの感化の極めて強かつたペーベル式の社會主義が再び勢力を増してきた。あの、凡ゆる階級の人々にも浸透した國民的感激が、恐ろしい戦時の出來事死、餓え、言語を絶した困苦、失望、國民から絶えず絶大な犠牲を要求するのみで勝利から遠ざか

るに従ひ、層一層消滅霧散するものも己むを得なかつた。殊に過激分子の感化によつて、國民の大多數は、心身共に疲れ切つて、戦争に對する極度の倦怠、敗戦に對する深酷な怨嗟から、斷然、戦争の繼續に反抗した。政體がかうして容易に顛覆されたのである。

一九一八年後半期に於ける、此プロシヤ精神の破滅してゆく姿は、殆ど未曾有といつてよかつた。外に向ては全世界とも云ひ得べき多數の敵に對して、毅然として一步も譲らずにゐ乍ら、内部にあつては僅か數千の水兵一揆に對して、武器をすて、降つたのである。

政治當局者がこの時の國民一般の精神状態を余りにも知らなかつた事が、一層この危期を早めた。内外の益々紛糾を極める問題に對して當局者の救済策は如何にも不完全な上に、中々に實行されなかつた。唯之とは別に、將校團の不撓不屈の士氣のみは益々緊張して、あらゆる危険を冒して前進、又前進、タンネルベルグの勝利、マルヌの破綻、その他無數の戰場を経て、一九一八年の春から夏へかけての大蹉跌に至り、同年秋の大敗に終つた。この間、兩三回、プロシヤ精神の權化たるこの巨人的意志が、殆ど優勢な運命へ轉回させるかとさへ思はれた。が、かうして結局彼等は、一九一八年十一月。過去の誇りある傳統精神を愧しめず、勇取に外敵と戦ひつゝ、舊政體の廢趾の下に自分自身を埋めてしまふ事になつた。

一つには偉大な政治家がゐなかつた。大戦の晩年には將帥自ら政治家の役目を引受けたが、文武の道は等しくゆかなかつた。事毎に裏をかく國內の敵、數に於て遙かに優る外敵に對して、ルーデンドルフさへ敗れただのである。

將校團の相手となつて獨逸の未來を支配しようとする社會民主主義の人々は、將校團の行つたやうな殆ど硬直不自由なやり方はとらなかつた。一時は外交問題の爲に、祖國防禦の義務を嚴然と固持したものの、漸く一九一五年頃から昔の内政上の理想から自派獨立の色彩を發揮し始めた。

社會民主主義者の内にも極左翼の人々は、初めから國家主義的思想よりも社會主義的目的の爲の鬭争心が強烈であつた。國家の特殊利益に反對して、全世界のプロレタリアの階級的利害を眞向にかざして國民の注意をうながした。殊に民衆の絶望的氣分を政府顛覆の方向に導いて世界革命の一端を誘致する準備をしてゐたのである。

十一月九日には、彼等の希望の唯一部分だけが達せられた。

この日、溫和派社會民主黨は、時勢の推移に余儀なくせられて、八月四日の政策の後始末をせざるを得なくなり、國家統治の任についた。暫らくの間は、獨逸社會主義が全プロシヤを掩ふた廢趾の中の勝利者として立ち上り、その大經綸を字内に布くかとさへ思はれた。が、現に一方ではヴェ

ルサイユの強壓的平和條約によつてその初期に壓迫され、他方、初めから分離反目してゐた社會主義内の兄弟、極左翼から猛烈に戦を挑まれ、彼等がモスコイと聯盟して世界的革命運動に加はらうとするにあせり、此方は將校團の援助によつて之に對抗した。この内訌の爲に、獨逸軍隊に次ぐ第一の偉業といつていゝペーベルの大業も遂に破壊されるに至つた。爾來、獨逸は新しい、まだ正體の知れない一新發展の入口にある。

この、とも角大きい役割を演じた社會民主黨の經路と運命とを辿るには、先づその深い歴史的根據を尋ねねばならない。遠きは、マルクス、ラッサールから、小リーブクネヒト、更にダウイット、コルプにも至らねばならぬ。従つて、この序幕を、極めて大綱みながらマルクスから始めよう。

歐洲戰爭以前のインターナショナルの思想

マルクス及びエンゲルス

國際的社會主義の極致は、資本主義的國家を無階級の社會主義的社會に變革するといふ思想である。この目的を實現する爲の先決條件は、プロレタリアの大衆によつて政治的權力を獲得することである。アナキストを除いては、所謂社會主義の各派いづれもこの點に就ては一致してゐた。唯その手段、及び時期に關しては各派様々に分裂してゐた。が、この争闘を擔當したのは社會主義諸政黨であつた。

他方には、労働組合の運動が熾烈になつて、資本家に對し、労働條件、賃金、労働時間等に關する日々當面の争議を通じて労働階級の勢力を發展させてゐた。その手段としては主に職業別の労働組合總聯合と罷業、ひいてはゼネラル・ストライクであつた。従つて政治的争闘は、その所屬の社

會主義政黨に一任されてゐた。

社會主義諸政黨内にあつては、二つの政治的傾向が認められてゐた。適當な言葉ではないが、一般には、ナショナル、エボルト、インタナショナル、ボルト、ネエ國家的進化主義派と國際的革命主義派といふ名で呼び慣されてゐる。

ラツセルサの名と親しい前者の方では、政治的勢力は自然に獲得されてゆくものと信じてゐた。國ひは主として精神的武力と選舉權とによつて決定され得る、『頭腦の征服』によつて漸次議會に多數を占め、やがてデモクラシーが行はれるであらうといふ、多分に樂天的なものであつた。従つて、國家といふものを強ち排撃しなくとも、自ら社會の推移に應じて社會主義運動にまじはり、ある程度まではかうして漸次に、未來の社會主義的社會に發展してゆくといふのである。

マルクス及びエンゲルスの代表する國際的革命主義では、政治的支配權を獲得するには革命的行為を必要とし、未來の社會主義的社會には先づプロレタリアの獨裁政治が先行し、それによつて革命から出發した強壓的な革新をしなければならぬと唱へた。所謂『無能、滅亡するに十分な程爛熟したブルジョア社會』に對しては、生死を賭しての戦闘を要求し、平和的手段を卑さげすみ、現在の國家權力と協調する事は全然之を却けた。この戦闘では、國家組織の範圍内では決勝點まで至り得ない、確かな國際的根柢に立脚して初めて最後の勝利を得る、と確信してゐた。勿論、各國民の特殊事情

に應じて戦術を立てなければならぬが、プロレタリアの超國家的利益は常に一國の國家的運命よりも重んじられてゐた。

次の言葉は、マルクスの『コンミュニスト・マニフェスト』の有名な一節である。

『共産主義者は祖國、國籍を廢絶しようとする、と言つて非難される。しかし、プロレタリアは祖國を有してゐないのである。何人も、彼等が有してゐないものを彼等から取り上げる事は出来ない。……プロレタリアは、その束縛の鎖以外に失ふべき……何物をも有してゐない。……彼等の獲得すべきものは一大世界である』

世界大戦中、獨逸多數派社會主義黨に屬する人々は、このマルクス主義の絶對的な超國家主義を弱める爲に、マルクスとは別に、エンゲルスの國家觀をたて、見ようとした。然し、事實に於て、二人は同じ結論を持つてゐたのであつた。

また二人とも、帝國主義の時代は、資本主義の最後の段階として、社會主義の支配以外に十分成熟しなければならぬと考へた。更にこの成熟を一層促進しなければならぬと考へてゐた。而して、プロレタリア階級は常に警戒して、何時か特殊の出來事が資本主義社會の破壊の導因となる、その時、直ちに支配權を引受ける準備をして居なければならぬ、この視點から種々の社會現象が觀察さ

れた。

戦争といふ現象も、資本主義、帝國主義的社會組織のごく自然的一表現であつて、社會主義社會にならない限り存在する、社會主義者も亦その目的の爲の武器として利用しなければならない、と考へられた。殊に『世界戦争』といふものは避け得られないものとして研究の主要題材となつてゐた。エンゲルスは特に晩年、この問題に歿頭して、素人に稀に見る軍事上の専門知識と判斷力とを持つてゐた。

軍隊なるものも、マルクス、エンゲルスにとつては、資本主義國家の一制度として、プロレタリア彈壓の一威力であつた。で一旦プロレタリアの勝利が齎らされるや、軍隊は完全なる民兵とされなければならない。如何なる階級をも残すことなき完全なる國民皆兵、兵役期間の短縮、義務的軍事教育を實施しなければならない。かうした、軍隊の支配者が同時に國家の支配者である故に、民兵に於て社會民主主義者が多數を占める事によつて、資本主義の手にある武器を取り返して民主主義の信賴すべき武器としなければならぬと考へられてゐた。

遂にこのマルクス、エンゲルスの理想に副ふ^{アルバイター、インターナショナル}労働者國際主義黨が一八六四年に組織された。所謂第一インターナショナルが之である。世界プロレタリア階級の、獨立した實際政治の勢力機關たると同時に、主義宣傳の中央機關として、多大の期待を受けて八方に擴大した。その第一の旗印は、『國家主義』『帝國主義』及び『軍國主義』に對する宣戰であつた。更に一八六七年、ロザン^ズに於ける大會に於ては、常備軍の解散、戰爭の廢止、諸國民の自由聯盟を要求した。越て翌年ブラッセルの大會の決議では、プロレタリアに對して、將來の戰爭の際にはゼネラル・ストライクを以て戰爭開始を不可能にするやう慫慂してゐた。

然し、既に一八七〇年代の初期に、この第一インターナショナルは様々の難境に陥り、一八七四年には解散せざるを得なくなつた。獨逸、ラテン、スラブの諸民族間の、自民族を忘れた融合といふものが、完全に出來なかつたからであつた。また、種々の點で、世界プロレタリア階級の戰線を統一的に統率指導する事の出來るやうな、多くの前提といふものが缺けてゐた。各國個々の社會黨は、他國のその特殊事情をよく了解する迄に行つてゐないので、自然、自國に對しては獨立の意

見を作らざるを得なかつた。従つて理論的には立派な指導者達も、細かな點にまで指導し得る程にはなれなかつたし、インターナショナルの意氣昂然たる決議も、是を悉く實行に移さしめる力がなかつた。

一八八九年、マルクスの死後、然しエンゲルスはまだ生きてゐた時、この力によつて第二インターナショナルが組織された。このインターナショナルも、第一インターナショナルの傳統を殆ど繼承して、從來の弱點をも脱却出來なかつた。その上結束の點では一層薄弱となり、エンゲルスの死後は全く中心人物を失つてその缺陷が殊に著しくなつた。また、マルクスが第一インターナショナルを中央機關として、その指令によつて、社會主義的目的の達せられる迄は現存の資本主義的世界の凡ゆる暴力手段を利用しようとしてゐた事に比し、第二インターナショナルは常に消極的な平和的劃策が重んぜられた。

その間、この種の運動は、外面的には如何にもすばらしい發展をしてゐる。一九〇〇年パリーの大會に於て、英國の労働者の指導者達は、南阿戰爭に對して抗議した。一九〇四年滿洲にあつて日露兩軍が、天下分け目の戰鬪をつゞけてゐる時、アムステルダムに於てはロシアの社會主義者と日本（ツハイ）のそれ、片山潜とが壇上に握手交はして、プロレタリアの利害は國家の利害とは別にある事を示

した。更にロシアの労働者は、その本國に革命の旗を擧げて中央政府の力を弱め、自國にとつては不利益な平和條約を結ばしめた。一九〇四年以後一九一四年に至る迄の政治的混亂バルカン諸戦争の間は、インターナショナルの指導者達も共に一致共同の行動をとつた。一九一二年十二月、最も危期に瀕した政治的緊張時代にそのバーゼル大會が開かれ、教會の鐘の彼方此方に鳴り響く時、瑞西政府に歓迎されつつ、幾百萬の萬國労働者を代表する議員が堂々ミユンスター教會に入つて、將に現はれんとする恐るべき歐洲戦争の妖魔に對して、一齊に反對の聲を擧げた。この時こそインターナショナルが勝利の途にあり、新時代は之によつて幕を落されたかとさへ思はれたのだつた。

然し、事實は却つてみじめな内部の分裂を示した。「プロレタリアは祖國を有せず」と言はれ乍ら、至る所に變節があつた。「國家の獨立を外國に對しては保護し」或ひは「國民の防衛の爲に技術的設備をする」のは、各國民から奪ふ事の出来ない國民的權利であると叫ばれた。此意見の衝突が端なくも「軍隊ストライキ」を中心に爆發した。勿論この問題は一九〇〇年代初頭から年を重ねるに従つて具體的な形をとつてきたもので、ストウツトガルトに於けるインターナショナル大會に於て偶々その頂天に達した。

その席上、フランスの社會主義者は、穩健なジョレスより激烈な反軍國、反祖國主義者のエルヴ

エに至る迄、擧つて英國の代表者と提携して全力を傾けて軍隊ストライキを主張した。之に對して獨逸及びオーストリーの代表者は決然と抗議の聲を擧げた。この衝突が國民對國民の形で現はれたのは面白いではないか。

老ペーベルは峻嚴たる態度で、先づこのストライキ論者を反駁した。而して却つてプロレタリアに祖國はないと言つて、此ストライキを唱へる人々の國內に、國家主義の思想が益々強烈になつてきた事を指摘した。その槍玉には、政府の豫算に賛成した英國の社會主義者、フランスでは社會黨員がブルジョア内閣の大臣の椅子について「賜暇中の社會主義者」といふ姿で、反獨逸的陸軍政策並に同盟政策を實際に援助した事などを擧げた。殊に彼は、反國法的方法を適用する危険を恐れた。「かうまで我々は、獨逸の軍國主義に對して、出来る限りの反抗に努めてきた。之以上に出て政黨生活、場合によつては政黨の存在をも危ふくするやうな戦闘方法を強ひられたくない」かう唱へた。

エルヴェは之を皮肉つて、

「吾に我黨のみならず、否全社會主義界は、獨逸社會民主黨現在の態度を、驚愕と悲歎とを以て見る……。今私は、彼等獨逸プロレタリアを此處に、ストウツトガルトの街上看た。と脆くも私の

子供らしい夢は破壊されたのである。彼等は悉く善良な、満足した、飽き足つたブテイ・ブルジョアではないか。フランスの参謀本部は、戦争を始めればプロレタリアの一揆の起る事をよく知つてゐたから、遂に我々の爲に武装を解除する。獨逸にあつては、社會民主主義者がベーベル皇帝に捧げる死屍にも等しい無抵抗な従順さを以て、戦争となると無抵抗に皇帝に従ひ、フランスのプロレタリアが革命の赤旗を以て土壘を防禦するその胸先へ彼等の銃剣を擬する事は、私の確かに信じて已まない事である』處が一九一四年には、このエルヴェは反旗を翻して極端な國家主義の陣營に走せ参じてゐた。

この論争の結末は、遂に非常に曖昧な決議の採用で了つた。その決議に曰く、

『開戦の危険ある場合には、その開戦に參與すべき國々の労働者階級並に議會に於けるその代表者は、國際主義黨の活動によつて援助され、最も有効と思はれる手段を以て、戦争突發を防ぐ爲、全力を盡す義務を有す。但しこの手段は階級争闘の切迫の度、並に一般政治的事態の緩急に應じて自ら變化するものである』

かうして表面的には平和なもの、既に會員の間には二派に分れて、軍隊のストライキに對する同意及び反對の旗印が殊に鮮明になつた。而かも、一方の側は殆ど獨逸及びオーストリアの社會主義

者で、之を壓側する事は不可能であつた。

『マルクス教神殿の門衛』と呼ばれたカウツキーすら、軍隊のストライキを拒んだ。理由としては、かうした軍隊ストライキに同意する労働者は極めて少数であるといふのだ。

『かうしたストライキの參與者は死刑に處せられるべき者である。その上、その死刑といふのも、戦友の多數に取り巻かれて戦闘の熱狂裡に受ける死ではなく、家族の者に取り巻かれた一人の男子が、冷靜に選ばねばならぬ死である。何れかの國で、全國に涉り一萬の人がこの英雄的行爲を執行する事が出来るなど、考へるのは、途方もない樂觀主義ではないか。一方近代の軍隊にとつて一萬は擧げていふ程の數ではないのである。……して見ると、軍隊ストライキの考へは、目的は、誠に結構なものであり、極めて高尚勇敢なものであるが、勇敢なる愚策であるに過ぎぬ。かのブルジョアの平和の醉狂者が、仲裁々判によつて戦争を世の中から斷絶しようとする企てよりも、勇敢ではあるがそれに劣らぬ愚策である。……我々が戦争に至らしめる政治を止める實力を有しない限り、我々はまた戦争を阻止する實力をも有しないのである』

軍隊ストライキ問題は、偶々第二インターナショナルの弱點を明らかに示した。嚴肅なる宣言及び決議があつたにも拘らず、一旦緩急ある場合に各自の進退を決するものは、結局各國の國家的黨

派(Landes Partei)にあつたのである。従つて、實行に移される點ではインタナショナルそのものの理想は影の如く消えてしまつてゐた。

獨逸社會民主黨

獨逸の社會民主主義黨にあつては、國家進化主義の人々と國際的革命論者との二系統が殆ど黨の出生以來相對峙して戦つてゐた。而してその初期には國家進化主義の人々が優秀な地位を占めてゐた。その代表的人物ラツサールは、一八六三年、同時に建設された獨逸労働者總同盟(ADU)の首領となつて、自己の論理から國家こそ労働運動の指導に任じなければならぬと考へて、ビスマルク、プロシヤ王家などとも關係をつけてゐた。一八六四年、その死後、黨の指導を引繼いだフォン・シユワイツァーも國家の内敵、外敵に當る時、時には戦闘手段を國家に供給しなければならぬと唱へて、種々利害の相反する處あるにも拘らず、總同盟とプロシヤ政府との一種の協同戦線が張られてゐた。

リーブクネヒトとベーベルは、之に反對して、眞にマルクス及びエンゲルスの原則を守るべき反プロシヤ的、反ビスマルク的社會黨を建設しようとした。この思想は、ラツサールを頭とする獨逸労働者總同盟内に一少數の團體を作つたが一八六九年には、獨立にアイゼナハ派を召集するに至つた。こゝにラツサール派と完全に分離してアイゼナハ派が獨立する事となつた。アイゼナハ派は社會民主主義労働黨を建設し、ベーベルを黨首に仰いだ。爾後一八七〇、七一年の普佛戦争に於て、二派の態度は益々明瞭になつた。フォン・シユワイツァーは先づ自分の立場を宣言して、開戦の場合、今や全盛時代のプロシヤ王とその政府を、全力を擧げて援助すると主張し、ラツサール派議員三名は開戦となるや直ちに戦費案に賛成した。アイゼナハ派では、フリツチエが之に應じ、後にアイゼナハ派の黨委員會も之を是認したが、唯二人、リーブクネヒトとベーベルだけは別行動を採つて戦費案の採決に棄権し、ホーエンツォルレルン家とボナパルト家間の、所謂「王家戦争」に對して中立を守るものとした。

然し、マルクスは却つてリーブクネヒト、ベーベルの態度を批難して「原則騎手」と言ひ、インタナショナルの總評議會も同様の聲明をした。それによれば、ナポレオン主義はツァール主義と並んで、プロレタリア階級の最も性の悪い敵である、之に對抗してもし獨逸が勝てば、國內諸聯邦の

統一ともなり、獨逸社會民主黨が統一集權される爲には最も都合のいい條件であると考へられたのである。エンゲルスも、マルクスからこの意見を送られて、獨逸が敗北すれば獨立な獨逸労働者運動は最早や問題となるまい、と述べてゐる。

然し獨逸が勝利に勝利を重ねてゆくを見て、マルクスの態度はまた變つた。もしこの獨逸二大強國が猶怨恨をつゞけて憎み合つてゐれば、却つてツァール主義のロシアがこの兩國の不和によつて漁夫の利を占め、その反動勢力を益々發展させるのではなからうか、と恐れた。所が事實、セダンの會戰、ナポレオン三世殞落の後、ビスマルクに併合計畫のある事を知つて、マルクス、エンゲルス及びインタナショナルは一變、新フランス共和國の味方となつた。ビスマルクの併合計畫は、獨佛の間に永久の敵意を植えつけるもので、この上フランスはこの爲反動的にロシアに助けを乞ふ事にならうし、さうすれば益々プロレタリアに不利益であると主張した。

果して露佛の提携が一八八〇年代に實現した。と、彼等は再び獨逸の味方となつた。獨逸に強大となつた社會民主黨の發達が、國際的プロレタリア階級の勝利を齎らすべき最も確かな保證だと考へられたからである。一八九一年、エンゲルスは「若しロシアが我が國と戦争を始めるなら、獨逸社會民主黨員は進んで、ロシア人並にその味方を

ば打ちこらさねばならぬ、といふ點はべーベルと同じ意見だ。若し獨逸が壓迫されるなら吾等（社會民主主義者）も亦壓迫されるのである」と書いてゐる。

エルザス、ロートリンゲンの合併出來る迄は飽く迄戦をつゞけるといふビスマルクの政策に對しては、マルクスの考へ通り、獨逸社會主義の各派が猛烈に反對して、戦争繼續の爲の戦費は十一月、社會主義の代議士全部によつて否決された。

この間、ラツサール派は一步譲つてべーベル、リーブクネヒト、同時にまた國際的革命主義派に指導を委ねた譯で、兩派の和解の可能性が現れてきたのである。

戦後の、社會主義者取締法時代ともいふべき數年間は、社會主義の左翼化への發展に非常に都合がよかつた。當時の激烈な戦闘氣分の中にあつて、國際的革命思想は確實に根を下ろした。一八九一年、黨の決議したエルフルト綱領は、この時代の黨の精神をよく表はしてゐる。

然しマルクシズムも全勝を得るには至らなかつた。ラツサールの精神はねばり強く、自由労働組合の偉大なる勢力を根據とし、新世紀の初に至つても、尙一大勢力を保有して居た。黨の激越する決議も、過激な表現形式も、亦一九〇三年ドレスデンの黨總會に於て、所謂改革派と呼ばれたる隱和派の大敗北も、到底この事實を否定することは出來なかつた。夫にも拘らず、この統一派が世界

大戦に至るまで存続して来たのは、恐らくこの統一を一生の事業とし、且つ之を指導したベーベルの卓越した權威、並に其の政治的才能に歸すべきであろう。

この十ヶ年に黨員は幾百萬を數ふるに至つた。假にも社會主義の叫ばれる限り、悉く政治的また經濟的闘争團體の社會民主黨といふものに掃き集めた。がこの爲に勿論内部の完全な統一は犠牲にされ、他方には凡ゆる宣言、決議に拘らず種々の妥協が至る處に行はれた。

黨に勢力を占める思想も、時には左翼、時には右翼、時には國防の必要を説き、時には軍備案の不賛成が唱へられる。兵營内の煽動はしないといひつゝ社會主義的青年運動を起してゐる。かうした矛盾の一つの理由は、エンゲルスの死後、殆ど外交問題といふものと接濁する事なく、それだけ世界的な視野を持った人物がなくなつた事であらう。ベーベルやリーブクネヒトの狭い眼界には國內の政治問題のみが映つた。老リーブクネヒトの有名な言葉、

『社會民主黨によつて最善の外交政策は、外交政策皆無といふ事である』
はよくこの時代の社會民主黨の生活を示すものである。

戦争に關しての意見も、老ベーベルは、ブルジョアの愛國心とは別な、プロレタリアの愛國心といふものを考へて、祖國が外部から攻撃される時には、武器を手にして之を防ぐと主張した。勿論

カウツキーなども、防禦戦と攻撃戦との區別は見定められるものでない、寧ろ武器を取るか否かは國際的プロレタリアの利害を標準としてのみきまると反駁した。

また、實際戦争に對して抗議しなければならぬ時に如何なる方法をとるべきか、といふ非常な重大な實際問題も、曖昧なまゝに残されてゐた。

軍隊に對しても徒らに嫌惡、敵意を告白するばかりであつた。一九〇〇年マインツの黨總會の決議に曰く、

『ミリタリズムは、主としてブルジョア階級に奉仕する、ブルジョア社會の一制度である。然るにミリタリズムが國民に要求する重荷は、主として勞働階級によつて負擔せねばならないのである。社會民主主義者は、この現在の軍隊組織に反對する……。』

その著『常備軍否定、民兵軍採用』に於て、ベーベルは一八九八年、軍隊問題に對する獨逸社會民主黨の立場を綱領的に明示した。青年の軍事教育、服役期間の短縮、將校團の民主化、國際的軍備縮少、民兵等に關する議論、殆ど大體エンゲルスの思想を引繼いでゐた。然しエンゲルスの持つてゐた外交上の廣い知識、現在の政局に對する理解のない爲にエンゲルスが明瞭に指摘した獨逸の特殊事情も忘れて、漠然と軍國主義の全體に對して『反文化的制度』であることを呪詛、罵倒する

有様であつた。

黨の右翼からも、軍事に必要なものの供給杜絶を計るべしといふやうな言葉がごく曖昧な形で發表される始末であつた。

黨の極左翼の人々は、軍事問題に關して、黨内に彼等の勢力を擴張し、黨をして尙一層過激な態度をとらしめようと努めた。小リーブクネヒトは、黨内に於ける反軍國主義團體の領袖として、實際的に反軍隊の宣傳を始めねばならぬと主張した。一九〇七年、ストウツトガルトに於ける社會主義青年運動の國際大會に於て、小リーブクネヒトは、この運動の指導者として宣言してゐる。

『國家主義の有機的破滅を速かならしめる爲に、軍隊精神を軟化、破滅させる事が反軍隊の宣傳の目的である。召集令を受けた兵士を召集に應じさせないやうに煽動する事は、屢々行はれた遺方であるが、却つて大きい誤である。是によつて、充分軍隊壞滅の役に立つべき分子が軍隊から遠ざけられる事になるからである』

黨はある程度迄この思想に動かされて、明らかに反軍隊的傾向の社會主義青年運動を獎勵した。但し、黨はそれ以上の事を欲しなかつた。殊に小リーブクネヒトの奨めた兵營内の煽動は、斷乎たる態度で再三拒絶された。黨は軍規違反を煽動することによつて刑法にふれる事を望まず、法の許

す範圍内で軍國主義に對して戦はうといふ方針であつた。

労働組合

英國では政治的社會主義運動よりも労働組合が先だつて起り、後年にも優越權を主張してゐたのに反し、獨逸では組合運動は政治運動に遅れて起り、それと同等の權威を得る迄には數十年奮闘しなければならなかつた。

獨逸の労働者の政治運動を始めたラツサールは、マルクスと反對に、労働組合組織、争闘手段としてのストライキを認めなかつた。その死後初めてその後繼者フォン・シュワイツァーは、労働者同盟の會長として、一八六八年同志の一部の強硬な反對にも拘らず、労働者大會をベルリンに召集して、諸種の労働組合を組織した。ペーベル派も亦この分離後労働組合を形成して、茲に二派の組合が相並んで存在する事になつたが、一八七五年、政治上の二派の合同から兩派統一方針が叫ばれて、聯合大會が催された。

この若き組合運動にも著しい盛衰があつた。労働組合の主とする経済闘争が、政治闘争を主とする社会民主党に比してどういふ位置にあるか、之がその寒暖計であつた。誕生以後の數年は、やはり経済闘争は黨の支配を受けるべきであり、亦社会民主主義の豫備校であると考へられ勝であつた。

が一八九〇年代の初には、社会主義者取締法の廢止と共に、初めて一變動が起つてきた。この運動が見る間に旺盛を極めて、一八九〇年レギーエンを長と仰ぐ労働組合の強固な中央集権的組織が出来、凡ゆる労働組合的闘争の最高指導者は、この諸組合の中央委員會の手に收められ、かうして全體の運動に強い自覺の精神が生れたのである。

更に一八九〇年代の後半期に於ける、獨逸の經濟と高調な順境が一層この發達を助けた。經濟闘争は次々に成功して、労働者に數々の利益を齎らし、その爲に組合の人々も、この實際的な仕事は黨の政治的闘争方法より遙かにプロレタリアの爲に有益であるとさへ信じてきた。時には政治的革命による政策を『破綻政策』とさへ呼んで拒けた。従つて、黨の右翼、改革派とは相接近する事になり、改革派自身も之を力強い味方として、ベーベルの壓迫、一九〇三年ドレスデンの黨總會に於ける改革派の大敗の後と雖も、自己の存在を主張する事が出来たのであつた。従つて黨の指導者に

とつては、労働組合の中央委員會が黨の指導權力にならうと力めてゐるのではなからうか、と疑つたのも無理はなく、一八九三年ケルンの黨總會には、黨が中央委員會誇大妄想狂呼ばりさへした事もある。かうして兩者間の争闘は十年以上繼續するに至つた。

處が、二十世紀初頭の十年間に、労働組合の旺盛な發達に對して一大鐵槌が下つた。企業者側の自覺、その組織的な對労働者政策、これである。曰く、トラスト、曰く、カルテル、更にリング、此の爲に、賃銀争闘の大部分が失敗に歸した。その上、企業者は自分の手先になる御用組合を作つて備へた。キリスト教組合、ヒルシードウンガー組合も、爾後獨自の道を、時には労働組合のそれと正反對の道を分れ／＼に歩み始める事になつた。

労働組合の人々にも、今迄の戦法を棄て、更に強大な戦術を考へなければならなくなつた。偶々戦争突發の直前社会民主党及び組合に對して政府側のとつた彈壓ぶりが一層之に火をつけた。一九一四年春のミュンヘン労働組合大會では激越な戦闘氣分が燃え上つた。アウグストヴィンニヒのやうな穏和な指導者すら、忍耐の緒を切らなければならぬと言ふに至つた。嘗つては一九〇五年ケルンに於ける組合大會に斷然棄て、顧られなかつたゼネラル・ストライキが、一四年の春には盛に論議されるやうになつた。

かうして一九一四年の夏がきた。労働組合の戦術が今や根本的に改革されようとする時、突如として起つた世界大戦が、いきなり断乎たる態度を要求したのである。

ベーベルの指導の下にあつた時は、獨逸社會民主黨が左翼右翼の兩派をうまく一致させ得たやうな觀があつた。ベーベル自身が黨の統一を安全にし、反軍國主義、共產主義者のリーブクネヒトと、改革派である『國家社會主義者』コルプとの間の間隔をどうにか繋いでおいたと信じてゐた。處が世界大戦以前に死んだ。後繼者は殆ど黨の實行委員として社會主義政策のごく一端だけに通曉した初年兵ばかりであつた。この豫想を許さぬ世界大戦に對しては、決斷實行最も困難なものに違ひなかつたのである。

フランスの社會主義

こゝにも國家問題、戦争に對する態度に就いては、二派に分れてゐた。一方には、反軍國主義、反愛國主義者を自任するエルヴェが、無政府主義的サンディカリストの人達と共に極左翼の人々を

率ゐて、右翼と對立してゐた。多年無数の小黨派に分裂してゐたフランス社會主義者の人々故に、その間隔を繋ぐ事も中々困難であつた。新世紀の當初に當つて、漸くその大多數が一般社會主義黨として結合された。それでも猶、溫和派は別にミルラン、ブリアンを頭にして獨立社會主義黨を建てゐた。

議會に於ては、社會主義者の議員數は、獨逸に比して遙かに劣つてゐた。一八七一年のコンミュン暴動當時、社會黨員の受けた悲痛な經驗が、随分長らく恐怖の念を忘れさせなかつたのである。世界大戦の數年前になつて初めて、獨逸の十數年以前の隆盛を見るに至つた。

一致社會主義黨(USP)はベーベル流の獨逸社會民主黨と、かなり其態度に似通つた處があつた。外交政策を見ると、ジョレスを先頭に明らかに平和主義を持して、復讐觀念、エルサス・ロートリンゲン回收などの考へを棄て、獨逸との提携を主張した。一九一三年フランスに採用された三年兵役期間にも反對する上、一九一四年七月十七日、パリに於ける臨時黨大會には、戦争に際しては労働者の總罷業を決定するといふ決議をしてゐた。

然し、それにも拘らず心持の上では、やはりフランス人固有の愛國心は忘れられなかつた。フランス政府の明瞭な獨逸包圍政策にも反對せず、常備軍を廢して民兵にすれば一層強き國防となるの

だ、などと言ふ人々も少なくなかつた。マルクス思想が血となり肉となつてゐさうには見えなかつた。

英國の社會主義

資本主義の最も早く發達した英國では、社會主義の發達が非常に困難であつた。その先驅と見るべきものは、十九世紀の三十年代の終から四十年代の末まで活躍したチャーティスト(Chartists)であつた。

この運動は屢々労働者一揆となつて現はれたが、悉く官憲の武力によつて鎮壓された。その要求は、主として政治的方面にあつて、經濟狀態の改革には餘り努めなかつた。況んや現社會制度を顛覆しようといふやうな、社會主義の巨大な目標はなかつた。この運動が、指導者の政治的訓練の乏しい爲に失敗するや、労働者には強いあきらめの心持が傳播してしまつた。彼等は、凡ゆる社會主義的の革命思想を斷念して、從來の二大政黨のホイッグ(Whigs)

とトーリー(Tories)との政治的指導に一任して、議員を送らうとさへ努めなかつた。

然し、それと反對に經濟方面の改善には、労働組合が一八五〇年後、すばらしい効果を擧げた。

一八八四年に至つて、新しくフェビアン協會(Fabian Society)が建設された。マルクス思想、殊に階級闘争説と世界革命の宣傳は拒絶したもので、社會主義的労働運動にとつての高等の學校には違ひなかつた。この知識階級を主とした運動が、一八九三年には、ハーデイ(Herbert Hodge)によつて獨立労働黨(ILP)といふ政黨に形づくられた。この政黨も亦、マルクス主義の過激な要求、特に階級闘争、世界革命論にはかなり反對的態度をとつてゐた。また第二インタナショナルに對しても、指導者としてまでは信賴せず、社會主義は各國に於てそれぞれ独自の戰術をとれと主張してゐた。

これも初めは、労働組合に組織された労働者が、政治活動に對して一般に反感を抱いてゐた爲に、隨分惱まされた。ラムゼー・マクドナルド(Ramsay MacDonald)が出て、極めて巧みに黨と組合との連絡を取るに至つて、漸く民衆の間に政治運動の萌芽を作つたのである。マクドナルドは先づ「労働代表委員」(Labour representation committee)を建設した。この委員會には多數の労働組合も屬し、労働者の代表者を議會及び種々の自治團體に選出する事に努めて、漸次發達した擧句に、一九〇六年、労働組合と獨立労働黨とが結合して、労働代表委員會が労働黨となるに至つたのである。一九

○六年に選出された五十四人の労働者の代表者中、廿九人は労働黨に属してゐた爲に、労働黨はこの人達を率ゐるのみならず、對立して互に争つてゐた保守黨、自由黨の間にあつて一躍、キヤステイング・ポートを得る事になつた。かうして忽ちにして英國にも著しい社會主義の發展が見られるかといふ利那、かの世界大戰が突發したのである。

ロシアの社會主義

近世のロシア社會主義は、最も多分にマルクスと獨逸社會黨との感化を受けてゐる。尤も資本主義の發達が遅かつただけに、この運動もごく最近に生れた。そして、^{急進派}と^{温和派}の二派が明瞭な姿で現れたのも、一九〇三年、即ち第一革命の直前であつた。當時、ロンドンに於けるロシア社會主義黨大會に、ボルセヴィキとメンセヴィキの二團體が生れ、前者はレーニンの指導の下に國際的革命派を代表し、後者は平和に改良しようとする一派、之である。この二派が工場労働者を代表するに比して、また一方に、ロシアの農民を味方とする社會革命黨があつた。この運動は、都會より

も農村に重きを置き、資本主義から社會主義へ行かうとせずして、ミルの説に示唆を受けて、直接、土地の社會化及び共產化に至らうとする見解を持つてゐた。この派にも内部は二分されて、マキシマリスと稱する極端派、ミリマリストと稱する穏和派があつた。

一九〇五年、ツアール政治に對して第一回の力強い攻撃があつた。勝敗なくして終つたものゝ、憲法議會を勝ち得た。この頃には社會民主黨が随分優勢であつたが、やがて宰相ストリピンの大仕掛な各方面に渉る大改革、また國家主義の意外な勃興、殊にブルジョア階級に有利な選舉法設定、痛烈なる野黨壓迫、となつて、一九一二年には全く右傾派の横暴を許さざるを得なくなつた。この爲に、メンセヴィキなどは、在來の革命的闘争手段を棄て、獨塊、コンスタンチノーブルに做つて、一變、國家主義に身を任せてしまつた。

然し、社會革命黨員とボルセヴィキは、依然としてツアール主義に對して反抗を續けた。この點では、ロシア社會主義には特別に鞏固な、狂信的な自負心があつた。プロレタリア階級、特にロシアのそれは世界的使命を持つてゐる、といふ言はゞ信仰であつた。彼等の大部分は追放、亡命の中に、國際的に多くの同志と連絡をとつて時機を待つてゐたのである。そこへ政府は、反動思想の成功と共に益々圖に乗つて苛酷な壓迫を加へた。

陰鬱な反抗心、恐ろしい革命的氣分が全ロシアを見舞ふに至つた。世界大戰の直前にモスコ、ペテルスブルグでは暴力的ストライキが爆發した。新しい革命が近づく、とは誰もの頭に浮かんだ。この時に世界大戰が勃發して、全舞台面を一變させてしまつたのである。

然し、社會革命黨員はハルビンで、

獨逸軍隊は、獨逸社會民主黨とは極端に隔離して、國家、國政に根柢を置く舊プロシヤ精神を飽くまで確實に代表してゐた。その主腦者は、鐵の如き克己心を以て、その天職に全身心を捧げた將校團である。王政と祖國とを守り發展せしめる事は、彼等の唯一の使命、信仰、意志であつた。屢々之は過度にまで走つて、その爲の弱點も無いではなかつたが、社會民主黨の如き内的分裂、矛盾、疑惑は毫もなく、凡てが明瞭、透明であつた。世界の歴史に比類なき、この一途の率直な世界觀の一致に、被等の溢るゝばかりの力が生れたのである。將校團の感化は、平時に於ても全國民に徹底してゐた。この二萬人を包含する將校團は、國家に於ける唯一の特殊地位を有するもので、恐らく之を再び他に求める事は困難であらう。

この現役將校と列んで、自ら進んで之を補充し、之と同様の家柄、階級から成り立ち、同様の名

戦前の獨逸軍隊と社會民主黨

譽觀念、同様の職業階級意識によつて、現役の戦友と密接な關係にあつたものに、豫備並に後備の將校がある。彼等は將校團にとつて、國民の知識階級内に於ける確實な後援者であつた。彼等は非職業的軍人の間に充分尙武的精神を傳播させた。時には、將校を採用しようとしても、余りにその志願者の財政状態、社會的地位を顧慮しすぎて偏る事もあつた。が、豫備、後備の將校團が同じ境遇の人々から集められた事、それが現役の將校團と本質に於て似通つてゐる事などから、堅實な軍隊的統率に與へる利益を考へれば僅かな犠牲に違ひなかつた。

また、將校と兵卒との間の連絡をとる下士の人々も、重要な役割を引き受けてゐた。現役下士官は、十年以上も間斷なく嚴格な勤務に従事して、困難な地位にも拘らず、將校にとつて常に信任するに足る機關であつた。舊獨逸軍隊の名譽の少からずは彼等の上にあつた。現役勤務を終へると、彼等の中の多くは、更に政府、地方諸官廳に勞務して、こゝにも國家思想の爲に無限の貢獻をするのであつた。

内政上に分裂が生じて、この軍隊のみは巨大な城砦の如くにその上に聳えてゐた。そして、社會民主黨の非常な勢力にも、驚くべき抵抗力を以て對してゐた。ペーベルの突撃も之には効果がなかつた。

軍隊と社會民主黨との争ひは、王政に對する態度及び國家の利益を主とするか、國際的にプロレタリアの利益を先にするかの二つの問題から起る。將校團はこの二つについて、斷然一致出來ない社會民主黨に對し、公然戰鬥を開く事も辭さなかつた。

一八七〇年軍事當局は、既に國家問題から社會民主黨と反對の態度をとつたばかりか、その指導者達に對して峻嚴な手段を講ずるやう要求してゐる。その爲に、ペーベル、リーブクネヒト、その外六人の領袖達が監禁された事もあつた。社會民主黨が軍隊に對しても猛烈な攻撃を加へ始めるや議會に於て陸軍大臣が露骨にそれと抗戰した。議會の論戰の中心となる事件は、教練、軍法會議の判士、兵士の虐待、將校團の傲慢不遜など、些細な事であつたが、それよりもかうして猛烈に社會民主黨の攻撃してかゝる元奮の方が遙かに宣傳的であつた。

軍事統帥部の代表者達も、屢々防禦から攻撃に移つた。殊に巧みな追撃ぶりが一つあつた。夫は社會民主黨に對して攻撃のみに止らず、夫自身の明瞭端的な態度を示すやう迫る事である。社會民主黨がもし國家主義的調子を示せば、第二インタナショナルによつて優柔無爲とか、假面をかぶつた帝國主義者といふ痛罵を受けなければならなかつた。もし大膽に各國プロレタリアの共通な利害を説くならば、まだ國家を忘れる迄に成熟してゐない選舉民との連絡を失ふ恐れがあつた。この點

軍政當局は高を括つてゐたといへよう。

然し、社會民主黨の選舉民の多数が入營するのを阻む事は出来なかつた。それに對しては、絶えざる彼等の監視と、彼等を都合よく各部隊に分離する事、更に手を盡した手段は、警察並に行政官廳による適齡者の秘密監視簿の調製である。こゝには、社會民主黨に屬する者は、主義運動の指導者である、或ひは確信した主義者であるか、または單なる雷同者であるかなどが一々記入されて、この新入營者は指揮官の地位に進級させられなかつた。

勿論之に對して、社會民主黨の幹部は酷しく反抗した。然し軍事當局は、一層態度を峻嚴にするのみならず、軍隊所屬の者が社會民主主義の結社に加はる事を禁じたばかりか、社會民主主義者に對しては一年志願兵たる権利さへ剝奪するに至つた。之に應じて諸種の軍人會も、社會民主主義者の入會を禁じた。かうして豫備、後備の人々にも彈壓が加はつたが、唯一つ、壯丁に對しては擧げていふ程の何事もされてゐなかつた。社會民主黨は秘かにこの點に努力を倍加してゐた。

軍事當局者は、將校團内に於ける社會主義的感化の跡を、最も酷しく穿鑿して根絶しようとなつた。一九一一年には、陸軍省令によつて、全豫備、後備の將校に對し、社會民主黨の爲に選舉勸誘をした者は全然軍籍から除かれる事を通告してゐる。議會に於ても公然之が宣言さへされた。

その上、何時かは議會戰の限界を越えて、公然武力に訴へらるべき日を、軍政當局は考へてゐた。尤も、内亂とか一揆をそれ程切迫したものとは考へなかつたのであるが、一部の準備はしてゐた。ベルリン並にブランデンブルグ州の爲には、一つの特別の司令部、即ち『近畿總司令部』が設けられ、内亂一揆の場合には近衛及び第三師團が之に當るといふやうな手筈、工業の中心たる諸都市、聯邦の王侯居住の首府などに時々備へられる警戒の類がそれである。

また戒嚴令の運用條件が、この頃盛に問題とされるやうになつた。戒嚴状態は軍事當局者に對して廣汎な獨裁的權利を與へるもので、殊に『緊急』戒嚴令が非常な特權を許す事になつてゐた。この種の法令は今迄殆ど顧られなかつた處が、一九一一年から細かな研究の項目となり、戰時戒嚴令の適用解釋も改めて論議されるに至つた。

然し、是等の防衛策も、何等決定的の意味は持つてゐなかつた。二つの世界觀の鬭争は、また別種の武器を以て勝負を決しなければならなかつた。將校團も之をよく感じてゐた。それで彼等は、かうした政治的防禦法を輕んじて、寧ろ軍隊内に、國民精神、國家主義的尙武の精神を振興させ、規律、權威を尊敬せしめる積極的な仕事に力を注いだ。之は將校團の武器であり、この武器は過去數百年間に發達し來つた秩序に深い根柢を置いてゐるのである。之に對して社會主義の武器は、そ

の力を未来から、また下層民衆の容易く受け入れられる人道的理想の宣傳から得てゐる。何れの武器が優つてゐたか、この間に對しては何より世界大戦の突發が第一の答を提供してくれた。

一九一四年八月四日

危機に立つた社會主義

一九一四年七月下旬、戦争が始まりさうになつた時、第二インターナショナルの社會主義者は、『プロレタリア階級の意思』擡頭して、危くなつた平和を救うとした。七月二十九日ブラツセルの事務局で、會議は開かれた。會議では、戦争にまきこまれさうな、あらゆる國々のプロレタリア階級に、オーストリー、セルビア間の紛争を仲裁々判に附する様、努力する事を勧めた。獨逸はオーストリーに對して、フランスはロシアに對して其の主張を緩やかにするやう、各國のプロレタリア階級は努力しなければならないと要求された。又有力な示威運動でプロレタリアの共同意志が明確に表はされて、第二インターナショナルの社會主義者大會が直ちにパリに召集される手筈になつ

た。

然しこの事務局の布告は、格別必要でなかつた。各國では、プロレタリア階級の諸黨が、みな單獨な戰爭反對の宣傳を力強くし始めたから。特にロシアのプロレタリア階級の態度は威嚇的であつた。政治の危機が絶頂に達した頃、ロシアでは激しい國內の政争があらわれた。ペテルスブルグその他の工業都市では、ゼネラル・ストライキが行はれた。千九〇五年の革命以來、殘灰の下で尙ほ燃えて居た憎悪が、そこ此處で燃えだした。警察力はこれらの反動を抑壓する事が出来たが、既に新しい革命を望んで、戰爭の勃發を好機會と思つて居る者も少くなかつた。獨逸の國內政治も矢張り緊張してゐた。古くから政争の問題になつて居たプロレタリアの選舉法問題は、これまでになく激しく人心を刺戟した。社會民主黨は今度こそ此れをものにしようと思つた。これまで温和的であつた労働組合でも、微温の範圍を脱して漸く闘争に行かうとして、組合内では急進分子の方が多數を占めつゝあつた。オーストリーのセルビヤに對する最後の通牒を、獨逸の社會黨の首領たちはプロレタリア階級に對する新しい挑戰狀と考へた。七月二十五日、躊躇なく黨の幹部は、『オーストリー、ハンガリー政府の輕卒な戰爭挑發』に對して抗議の聲をあげた。その激烈な宣言書には、『オーストリーの要求は、歴史上未曾有の非道である、自覺した獨逸プロレタリア階級は、こ

の戰爭挑發者の行動に對して、激しい抗議書を呈出する……同胞の一滴の血と雖も、オーストリーの権力者の満足のために、帝國主義的侵略のために、犠牲にしてはならない。……平時は、プロレタリアを壓迫し、輕蔑し、利用する支配階級は、いまプロレタリア階級を大砲の餌食にしようとして居る。……我等は戰爭を欲しない、戰ふことを廢せよ、諸國の兄弟よ、同胞よ、融和せよ、いたる處で権力者の耳には、斯く響かなければならない。』とあつた。イギリスの社會主義者も、激越な言葉を發した。第二インターナショナルの英國に於ける宣傳書には、『汝等にロシアの專制主義の提灯をもと煽動する支配階級のあるもの、及びその御用新聞を冷靜に導け。又この不名譽に耳を傾けたくない大多數の國民の決定を尊重するやう要求せよ。……グレエイト・ブリテンの紳士淑女よ、君たちは今や人類のために、世界のため立派な奉仕をやるべき好機會に恵まれて居る。』とあつた。いくらかその調子が冷やかであつたのは、フランス社會主義者の抗議であつた。第二インターナショナルのフランスに於ける社會主義者は、七月二十七日、獨逸の社會主義者と一緒に平和確保のために我々は戰ふのであると、抗議書を公表した。労働組合同盟は、その會員に、『團體的にそして意識的に、一國と云はず、諸國を通じて一致した行動に依つて、この最大の危険を未然に防ぐるは、労働者の義務である。』と云つた。フランス社會主義者の議會に席を有する者は、『四

十年來のエルサス、ロートリンゲンに對する我々の要求よりも、平和を先づ第一にしたフランスはセルビヤを賭け物とする様な戦争に關係してはならない。フランスは決して、秘密條約や一般未知の義務を自己の利益に使用して、この恐ろしい争鬭の渦中に投じてはならない。」と附加して、「政府は全國にみちて居る力強い平和の聲を考慮すべきである」と求めた。

是等の抗議は、これまで過去拾年間に、何度も類似の機會に、或はいくらか温和な云ひ方であつたかも知れないが、到る處で屢々聞かされたものである。最近では一九一二年のバーゼルの平和會議でも聞いた事である。これらの抗議や宣言は、みな明瞭にインターナショナルの調子を帯びて居た。然し平和保全に對する第二インターナショナルの活動も、在來のやり方以外には何も新しいものは無く、一八〇七年ストウツトガルトの決議で曖昧な言葉で暗示された、是等の方法以外の、「有効な手段」と云ふものは、一向實現されなかつた。

國家主義の勝利

斯んな方法で、支配權に影響を與へ得ると信じてゐた者たちは、失望に當面した。抗議の叫聲は

轟々のうちに消えた。運命の糸を紡いでる政府は、かゝる抗議の叫聲には耳をかさなかつた。當局は社會民主黨の労働者たちの間にあつても、祖國を愛する感情が、優位を占めることを確信して居た。萬一豫期に反して、眞剣な反抗が現るとしても、その場合はリーダーを拘束する事が出來ると考へてゐた。これが、獨逸の政府内の氣持であつた。他の國々でも、それは余り相違はなかつた。又この考へは、到る處で正當であつたことが實證された。七月二十五日から二十九日の向背の定まる時に、萬を以て數へるプロレタリアが、習慣の力に引きづられてリーダーの指呼に従ひ、「戦争を除け」と叫びながら、街上を進んだが、然しその日以後は、急に靜かになり、或る異つたものが深みから現はれた。彼等が、政治的に醒めだしてから、たゞ憎惡の念を以て國家の事を語り、祖國に對しては冷淡、輕視、卑下の言葉ばかり知つて居た我が百萬のプロレタリアは、突然愛國精神に燃え始めた。これはプロレタリア運動は、國際的であると云ふマルクスの説が、いかに薄弱な根を民衆の間に下して居たかを示すものであるも、プロレタリア階級は、表面上マルクスの説に興味をもつて居たのであるが、祖國の困難に遭逢すると、忽ちこれらのものは消失した。そこには、本來の聲が現はれて、あらゆる縁遠い問題を無視させた。別に深い考慮もなく、民衆は直ちに名狀する事の出來ない、止み難い熱心の衝動に驅られながら、國際的な性質を却けて國家の味方となつ

た。マルクスが共産黨宣言によつて世界に投げた炬火は、將に消えやうとして地上に横はつて居り熱烈な愛國的感情に燃えて、軍旗の下に集つて来る、無数のプロレタリアの強い足踏みによつて、それは悉く踏みにじられた。獨逸でもフランスでもさうであつた。結局ロシアでもさうであつた。

世界のプロレタリア運動は、第二インターナショナルの手から離れた。黨の首領たちは、この轉換の瞬間に自らも同じやうな運命の見舞を受けやうとした。彼等はたゞ驚愕して、民衆の愛國精神に酔つて居るのを眺めた。彼等の一部はその捕虜となつた。これは、彼等にとつて大きい違算であつた。平時のあらゆる理論や豫想は、みな打壞されて、すぐに方針を立直す必要が迫つた。

若しマルクスほどの人物が、……或は少くともペーベルほどの人物が居たならば、此轉換に際して機先を制して、新しい思想と目的を宣傳したであらう。然しかゝる人と比肩し得るほどの後繼者を持たなかつた。平和の友であつたフランス人ジョーレは、諸國の人たちから尊敬されて居たが、八月一日フランスの國家主義者のために暗殺された。

七月廿五日獨逸の社會民主黨の幹部に依り、大なる希望を以て始められた戦争反對の主張は、それは直ぐに不名譽な最後をとげた。七月卅一日ブラツセルの第二インターナショナルの事務局は八月九日バリーで開かれる筈であつた大會を、無期延期する旨を通達した。すべての努力が失敗に

終つたので、獨逸の黨幹部たちは憤慨しながら、プロレタリア階級は戦争を不可能ならしめるために、其なすべき事を盡したと云ふことを、くどくどしく言ひ立て、今後は無益に戦争を繼續してはならないと主張した。『戦時法規は峻厳に労働運動を取扱ふ。輕舉妄動、無益な見當違の犠牲は、この際その本人を謬まらさばかりでなく、我々全體を謬まらせる。』

右は、空虚乾燥の言葉で、公然戦争反對の主張を抛棄したものである。七月三十一日の戦争の避け難き宣言、及戒嚴令の布告は、それで無くてさへ駄目であつた労働運動の宣傳、活動を、全く封じて了つた。今は公然の反抗、暴力の適用ばかりが可能であつた。然し何人も之れに手をつけるものはなかつた。これ迄あれ程熱心に軍隊ストライキを主張し、數週前尙ほこれをフランス社會黨の黨議として、遠からず開會される手筈であつた^ウ第二インターナショナル大會に、之を討論の中心問題とまでしやうと欲して居たフランス社會主義者も、今や全く活動をやめた。

リーダーの更迭

戦争は初まつた。そこで社會民主黨の幹部連中は、大破綻を避けるために、勉めてインターナシ

ヨナルの原則に忠實に、インターナショナル大會の決議に従順に、あらゆる手段を講じたが、結局外部からの暴力的壓迫に従はねばならないと、戦争に到つた立場を辯護した。戦争の抗議に極めて微温的に参加した國民は、今や愛國精神に感激して戦争を決意して居たから、先きの辯護は、何等眞實に觸れなかつた。この辯護も、社會民主黨の幹部たちに役立つたのは、ホンの暫くで、間もなく彼等は、國家に味方するかインターナショナルの立場をとるか、戦争に賛成するか反對するか、それを決定する必要にせまられた。彼等にもその意思を告白すべき避け難い時がきた。國家主義とインターナショナルの思想とを以て遊戯をやるのは、平時は可能であつたが、そして其れは社會主義の發展に有効であつたが、然しこの遊戯も遂にやめなければならぬ時がきた。世界大戰はこの遊戯の繼續を拒絶した。

勿論かゝる決定をなす事は、幹部連中にとつて、民衆以上につらい事であつた。彼等は民衆よりも一層重い責任を有して居たし、また感情に依つて我を忘れる事が許されて居なかつた。この決定如何は、世界プロレタリア運動の運命に係るものである。社會主義の將來は何れの方面から豫想しても、首領たちの態度如何に懸つて居た。

この重大な決定も、當時リーダーたちの間には十分準備がされてなかつた。勿論今日になつては

明瞭に實證されてゐるが、其當時はインターナショナル諸大會で、或は研究雜誌で、如何にして戦争を阻止すべきか、幾度となく度々議論された。然し若し戦争が來れば、インターナショナル社會民主黨はどんな態度をとるか、それに就ては議論される所が極めて少なかつた。この問題は連中にとつて未定のまゝであつたか、それとも至極簡単な言葉で片付けられて居たかどちらかである。

ペーベルは、早晚來るに相違ない非常な時に、吾々は如何なる態度をとるべきか、其事に就ては何時かは判明するだらうと考へて居た。また彼の意見では、斯かる場合には道徳的は非難のない國の味方をすべきであり、あらゆる帝國主義的侵略には反對をし、不法に戰禍をうけた國の味方をすべきであるとされて居た。社會主義者は、彼の意見に依ると、その場合に應じて處置を謬らないだけの聰明を有して居るとされた。

然し今や國民一般は、愛國精神に亢奮し、數限りのない報導は互に矛盾をして居る。その上に各國政府の宣言は支離滅裂である。かゝる事状の下で正義が何れの側にあるか、それを確實に判断する事が出來ると想像するほど大膽なリーダーが、何處にあるだらうか。崩壊してきた大破綻を、一體斯うした道徳的な正義、不正義と云ふ概念で計れるものだらうか。

「黨第一の理論家」と云はれて居たカウツキーはこの難點を透見した。だから彼はこの問題を、道

徳上の立場からせず、プロレタリア階級の功利の立場から説かうとした。然しこの場合プロレタリア階級團體の私益は何處にあつたのであらうか。昨日までは歐洲各國の社會主義者の共同の敵であつたロシアが、今日はフランスと親密な同盟者となり、一方ではプロレタリアの世界的運動の支柱とされてゐた獨逸とフランスとが戦端を開いた。

第二インターナショナルは、祖國防備のために、少くともプロレタリアの共通利益が破滅されるはならない、又社會主義者は、戦争勃發後は直ちに此の國際的殺人行爲を、速かに終止せしめるやう努力すべきだと要求し、『あらゆる有効な手段に依つて』かゝる努力をしなければならぬとされた。然し問題は如何にして斯る努力が、なされるかと云ふ事が残つて居る。べーベルは手を振つてこの問題に答へる事を避けて、『それはその時にどうかなるだらう』と云つた。第二インターナショナルは、この點に於てべーベルに倣つたのである。この曖昧な態度は、遂に取り返しのない後悔の的となつた。

戦時費に對する賛成

然し何時までも曖昧な態度をとつて居る事は、黨の幹部連中に許されなかつた。彼等は八月四日戦時費に賛成するか否かの問題に逢着した。勿論どの國の議會でも、ブルジョアの決議権は、社會黨の決議権より遙かに優つてゐたから、社會主義者の賛否に依つて左右される所はなかつたが、然しそれだけに彼等の賛否は、精神的何倍も強い影響となつた。黨の人々が、理論家として殆ど絶對的に信頼して居たカウツキーさへも甚しく動搖した。在來の原則を棄て、戦時費に賛成するか、それとも反對して祖國の滅亡を眼前に見るか、敵軍の侵入をそのまま放任するか。カウツキーは一八七〇年、べーベル及びリーブクネヒトの採つた態度を考へて、投票権を棄権する事を勧告した。これに對して黨の人々は、『今日の黨は百拾一人もの多數を擁する黨で、昔の小數黨と異なるから同様に行動する事は出来ない』と反駁した。その翌日カウツキーは改めて意見を提出した。それは政府が何等侵略的の意思がないならば賛成するが、それを確言しないならば拒否すると云ふのである。僅か五日間の出來事であるが、……七月三拾一日の社會黨が、非戦論を抛棄した日から、戦時費に賛成を與へた八月四日までの……この五日間は、社會黨の去就に狂ふ様な苦しみを經驗した。

戦前は最左傾、戦時は最右傾になつたコンラッド・ヘニツシュは、その著『戦時及戦後の社會民

主黨一で、斯う云つて居る。「……一方では、平和を望む宣言をかいた紙とペンとが、まだ乾いて居ない。非戦を叫ぶリーダーの演説はまだ空気を動かして居る。それなのに、忽ち一變して同じペン同じ人に依つて、今度は戦端を開くと叫ばれるのである。東方から獨逸を襲ふツァール主義を撃退せよと要求されるのである。歴史があつてから、これほど短い時間内に、幾百萬と數へる人間の思想、感情が根底から覆へされて了つた、これほどの事があらうか……」

黨は明白に二派に分裂した。國家主義の立場をとつた派の代表はグライツドである。彼は黨が最後の態度を決する會議で——八月四日の黨の代議士會で——次の如く云つた。「現在の急務は在來の考へを棄てる事だ。社會民主黨は目下色々事を考へ直さなければならぬ。僕は、多數の幹部の名によつて、戦時費に賛成する事を動議する。あらゆる議論を棄て、政府と全ブルジョア諸黨の立場と同一になる事を主張する」。此派の意見に依ると、戦時費に賛成するのは、祖國の滅亡を防備する爲であつて、決して政府に信任を表明するためでない。戦時費に賛成する事に依つて、獨逸を全世界を敵として居る立場から救ひだして、國家としての存在を確立し、その政治的現在及び未來を確實にしやうと云ふ所にある。従つてこの派は、國家が危機に面した時は、社會民主黨の利害は無視すべきだと云ふにある。

トゴト・ハーゼ及レーデヴィールの率ゆる他の一派は、軍事的國防を原則上乃至實際的に拒否しなかつたが、然し彼等は此時に際しても、政府並に國家主義の諸黨派と、歩調を共にすることを欲しなかつた。階級闘争並にプロレタリアの國際的他位は、戦争の故を以て動かさるべきものではない、黨は、是迄汎ゆる意味に於て信任を拒絶し來り、今後とも亦拒絶しなければならぬ、政府の戦争政策並に戦争目的に對して、其責任を分擔することは出來ない、我々は兵士として其義務を盡し、必要なる限界内にあつて、外部の強制にも順應するけれども、然し政治家としては、依然在來の如く健闘すべきである、故に戦費案は「帝國主義戦争の責任者である現在の支配階級に對する原則的反對の結論として拒否」しなければならぬといふのが、此派の人々の意見であつた。然し戦時費の賛成者は、初から多數であつた、その上種々の外部の事情がその決定を助成した。

と云ふのは——獨逸は戦争を避けるためにあらゆる手段をつくした、戦端を開いたのは祖國の正當な利益を防備するためだと云ふ考へが、一般に擴がつて居た。それに重視すべき事は、戦争の相手が社會主義の敵であるロシアと云ふこと、及び戦争の動機が、いかなる見方からしてもロシアにあつたこと、既にオトストプロイセンには、コサツクが侵入して居たこと等がそれである。獨逸政府が、社會主義者に穩和に提携をもちこんだ事も大きい影響を與へて居る。戦争が初まる際、必ず

社會民主黨に抑壓の手が加はると豫想されて居たに拘らず、事實はそれに反對した。社會民主黨と宰相フオン・ベートマン・ホルウエヒとの交渉は、八月三日至極圓滿に展開して行つた。其翌日議會で、政府の戦争に對する宣言に對して、何等妨害を加へないと社會民主黨は保證した。彼等は、この時初めて、黨の歴史には未だ會つてない、「皇帝、國民、祖國」を祝福する聲に會する積りであると宣言した。

然しかゝる決定に、最後の動因を與へたものは、右の様な事情の経緯でなく、黨幹部の委任に依つて、パリに派遣されたヘルマン・シュラーの報告であつた。彼は戦時費の問題に就ては、フランス議會も獨逸のそれと同一歩調を以て進めるやう、その素地をつくるために、フランスの同志に會つて、意見を交換した。ところが會つてみて的外れである事が分つた。フランスでは、社會黨員が、獨逸の軍國主義、帝國主義の攻撃から、フランスの國土を、及自由を防備しなければならぬ、勿論そのためには費用もいとほぬと云ふ考へを持つて居たから、戦時費拒否どころか、最上の妥協が、投票棄権位のものであつた。その上フランスの主張では、フランスと獨逸とは國情が違ふからと云ふのであつた。意見の交換から、シュラーは、フランス社會黨は議會で戦時費に賛成するだらうと察した。同一歩調をとらうと云ふ試みは失敗に終つた。そこで獨逸の社會民主黨はフランスの

その態度を顧慮する必要がなくなつた。

かくして、最後の態度をきめるべき八月三日の黨代議士會で、戦時費を拒否したものは、結局全員九十二人のうち僅々極左傾の十四人に過ぎなかつた。ハーゼ、レーデプール、カール・リープクネヒト、レンシユ、リユーレ等が、その主なるもので、これと反對に賛成したものは、カウツキ、ホツホ、シュタットハーゲン、その外今迄左傾と行動を共にして居た多くの者が、多數派の意見に走つた。そこで少數派は多數派の決議に余儀なく服従した。首領ハーゼは反對派側にあつたけれども、黨の規律を尊重して議會では黨を代表すると宣言した。この宣言には、反對派の意見も相當考慮されて居た。ダヴィツドが執筆した最初の宣言文に、二三の文句が附け加へられた。そしてここに社會民主黨の態度が明瞭になつた。即ち戦争を惹き起した政策には、黨は何等の責任をもたない。また國土が完全に保全されて、敵も平和を望む様になれば、すぐに戦争を終結すること、斯う希望を記して置いた。

皮肉にも、悲劇にも見られる、此の宣言文には、かう云ふ文句がある。「……吾々は、動かす事の出来ない事實——戦争に當面して居る。吾々は眼前に敵軍侵入をひかへて居る。最早戦争をするか否かの問題でなくて、國土を防備するための必要な費用を如何にすべきかの問題ばかりがある。」

然も一方では幾百萬の國民が、狂暴な戦争に苦しめられて居る。吾々は、黨派を無視して、軍旗の下に召集された同胞の上に、心から望みをかける。……吾々の國民とその自由の將來を思ふと、目下の急務は祖國の文化と獨立を守るにある。最良の國民から選ばれた人たちの血で染まつて居る、仇敵ロシアの専制主義が若し勝つなければ、吾々は凡てどはなくとも、多くのものを失ふだらう。急は國土の安定にある。吾々は常に主張してきた事を、この際事實に移す。實際にこれを實行するは云ふ迄もない、祖國の存存を見棄てる事はできない。この態度を探る事に依つて、吾々はインターナショナルとも一致する。インターナショナルは、各國民の國家的獨立とその自衛の權利を認めて居る。吾々は、これと同時に、インターナショナルの意見の如く、あらゆる侵略的戦争に反對するこれらの態度から、吾々は必要な戦時費に賛成する。」

社會民主黨の諸新聞は、黨のこの豹變に歩調を合せた。非戦論は一晚のうちに、愛國的戦争の宣傳となつた。この間僅かにフォルエルツ紙と地方の二、三新聞のみが戦争に反對した。

フランスの社會主義

戦争直前、フランスには、三つの社會黨派があつた。エルヴェを中心人物とするサンデイカリズムは、無條件にインターナショナルの思想を信頼して居た。エルヴェは祖國と云ふ觀念を全く否定し、自衛戰、侵略戰の如何を問はず、戦争は暴力を以て阻止すべきだと主張した。ゲードをいたゞいたマルクス派は、獨逸社會主義の左翼の連中の様な、かゝる暴力的解決は、實際上不可能として敵の攻撃に對する祖國防備の戦争に同意して居た。然しこの派は戦時中も尙政府反對と階級闘争を續けなければならぬ、従つてこの闘争を持続する事に依つて、戦争の結果をプロレタリア階級の勝利に導く事ができると云ふのである。これと反對するものは、修正的な思想ながら、優れた人格者であつたジャン・ジョレスの團體であつた。ジャン・ジョレス派は、外部から不可避的に強ひられた戦争に對しては、ブルジョアの民主主義者と一緒に愛國運動の先頭にたつて政治に参加して、責任の分擔をもちながら、戦争の目的を決定しなければならぬとした。そして國內の軍國主義帝國主義の武器をこちらに奪はなければならぬと説いた。ジョレスは、戦の火蓋が切られる日、この主張を實現しやうとした。そこで先づ彼は得意の手腕を振つて、フランス政府に、「ロシア政府が、紛争の解決を仲裁々判に訴へるやう」英國にその勞をとらせるために交渉した。その外、彼は、宣戦はフランスから始めないこと、國境の危険を除くためにフランス側からも適當な方法を講ずること

との聲明を、フランス政府にとらしめた。七月二十九日ブラツセルのインターナショナル事務局の會議で、ジョレスは意氣昂然として、『吾々フランス人の仕事は、實に容易だ。吾々が政府に平和政策を教へるまでもない、政府自身既に實地に行つて居る。……フランス政府は、進んで仲裁の勞をとらうと云ふ、讚嘆すべき英國政府の最善の親密な同盟者である。』と叫んだ。

このジョレスの魅力は、當時フランスの汎ゆる社會主義團體を、その勢力のうちに引き入れた、その時の政局は、この計劃の發展に極めて都合よく、またリーダーたちは時局をよく巧みに利用した。彼等は『フランスは進んで紛擾に参加してゐるのでない、其の意思に反して戦亂の渦中にまき込まれ、敵の侵入に脅威されて居るのだ』と云つて居た。この場合、嚴正なマルクス主義者も、國家を防備する權利と義務とは否定しなかつた。更に彼等に依ると、獨逸はフランスと違つて平和の擾亂者とされて居た。獨逸の軍國主義、帝國主義の徒が、戦争を惹起したのである。戦争の發生を十分に防がなかつた、努力の足らない罪は、獨逸社會民主黨にある。かく考へて彼等は時局を非常に單純視して居た。彼等には獨逸社會黨が持つた、苦惱を経験する必要がなかつたので、その政策に關する黨派の一致も比較的容易で、右の三つの黨派が、全く一致した。その最中に、ジョレスは突然世を去つた。インターナショナルは、望みあるリーダーを失つた。彼れが生きて居れば、フラン

スにも社會主義者の獨立した戦時政策が行れたに相違ないが其希望も今は失はれた。彼れが息をひきとる瞬間から、フランスの社會民主黨は、國家主義の思潮の流れにあつた。八月二日、獨逸社會民主黨から派遣されて來たヘルマン・ミュラーとフランスは交渉したが、その時早くもフランスはジョレスの様な中和的才能のある人物が居ない事を痛切に感じた。

獨逸のベルギーに對する中立侵害、續いて八月三日の獨逸の宣戰、これらの事情は遂に最後の決定を與へた。最左翼のエルヴェが豹變して、ダール・ナショナル紙で黨員に斯んな事を云つて居る『國家を守れ——偉大であつた吾等のジョレスは去つた。ジョレスの聲は、余を殺したものは彼等である、余の報復を思ひたつたらば、祖國を死地に陥し入れる勿れ、と告げて居る様だ——社會主義を信する友よ、サンデイカリズムを思ふ友よ、無政府主義の友よ、君達は唯に人類の莊嚴なる闘士たるばかりでない。君達はフランス軍隊の中心である。信頼すべき支柱である。祖國は危機に瀕して居る。革命の祖國は危険に曝らされて居る。社會主義者の義務は何であるか、吾々は一致して國境に進軍し、我が國家主義者たちに敢勇と規律の最もよい模範を示さなければならぬ。』

『マルクス及エンゲルスの同志であり、フランスに於けるマルクス主義の健設者、黨の組織者であり、階級争闘の最も峻烈する健闘者であつて……其國際的共同主義の思想、其獨逸の勞働者階級に

對する友誼に就ては、何人も疑惑を挿むを許さない」(一九一四年八月二八日「日フォルカワエルツ紙」)と評されたゲイトも亦無條件に國家主義的立場を取るに至つた。八月四日略々獨逸の議會に於けると同時期に、フランスの議會に於ても亦戰費案が激場一致可決された。然し之はまだフランス社會民主黨の國家主義的發展の頂點ではなかつたのである。八月廿八日獨逸軍がベルギーに侵入し、パリに向つての突貫的進軍が喚び起した驚愕が、一般を支配したその最中、チヨールの最も強き支持者だと呼ばれたゲイトとサンペとが、舉國一致内閣に入閣した。社會黨は此結果を然ゆる如き愛國的言葉を以て宣言した。曰く「フランス國大統領は、如何なる時と雖も、一七九三年及一八七〇年に於ける、國歩艱難の時に當りても、國民が其の全信任を捧げたものは、實にかの社會主義者、革命主義者達であつたことを、心に留めるべきである。先づ國民の意志の發表を待たずして、政府の頭首は社會黨に計り而して社會黨は答へて、我等は之に應すべき十分の覺悟がある、我等の友人が政府部内に在ることは、凡ての人に取りて、共和的民主黨は最後の血の一滴に至るまで、戦ふ覺悟をしてゐるといふことを保證するものである。」と。

一九一四年十月、ゲイトはイタリアの社會主義者と連絡を取つて、戦時政策として彼等を「協商側」の味方たらしめ様と努めた。ロシアと提携して戦ふ事は、從來の社會主義の原則と相容れ難い

と云ふイタリア人の異議に對して、彼はロシアを單に反動分子とばかり見る事が出来ないと主張して、これを抑制しやうと試みた。「ロシアの政治は、戦争に依つて全く自然に近代的影响をうけるに到るだらう。過激主義を化石的に理解してはならない。國土を防備すると云ふ危急な今日、この主義は國土防衛のために働く事を確信する。」とゲイトは彼の立場を辯護した。これが戦前にはあらゆる手段に依つて戦争を避け、戦争的行為を速かに終熄せしめる様に努めるとが、國際的社會民主黨の當然の義務であると主張した、ゲイトその人の豹變した態度である。

十二月二十二日、フランスの總理大臣は議會で次の様な宣言をした。「今日では、ヨーロッパ最後の決定的勝利を得る迄は、徹底的に戦を繼續して行く政策が採用されるばかりである。」この宣言に對して、社會黨はその態度を發表した。「議會に於ける社會黨は、國民が採つた舉國一致の規律を守つて、一言と雖も全フランス人の一致を攪亂するが如き事を云ふを欲しない……社會黨は大多數を以て政府の掲げた標語を可決した。」フランス社會民主黨の此の態度は、中立國と云はず獨逸の社會民主黨にも了解されて讃詞をうけたものである。獨逸の反對黨は、暫くたつてから現はれできた政府への批難に於て、フランスの社會主義者を模範の如く推賞をさへした。獨逸の少數派社會主義者のこの熱心な讃嘆に對して、フランスの社會主義者は極めて冷かな、差し控へた態度を採

つて居た。然し多數黨のうや／＼しき賞讃、並に彼等自身の態度に對して、彼等が同様の理解を繰返し望んだ事に對してフランスの社會主義者は、憎惡と極めて激しい非難の言葉とを以て答へた。その言葉は、獨逸の社會民主黨が、若し戦争なれば革命を執行し、獨逸の國家組織を根本から變革し、又多くの事項中、就中四十四年前その意思を無視して併合した諸州に對し、其の自由意思に従ひ、その選擇する祖國に歸る事を許容せよと云ふ、戰勝諸國の宣言を承諾するならば、彼等の過失は初めて償はれると云ふのであつた。同時にフランスの社會主義者は、ロシアの社會主義者に對して、ツアール政府との争ひを中止して、これと協同して獨逸を克服すべしと勸告した。

イギリスの社會主義

イギリスの社會主義者は、開戦の初め國家的思想が盛んになつたのに對して、フランスの主義者よりもいくらか強硬に反對することが出来た。但し彼等は事件に對して冷淡な態度を採る事も亦フランス人より容易な地位にあつた。即ちイギリスが敵軍侵入の危険を持つて居なかつた事である。イギリスはこの戦争に於てどれ程自家の利益の爲に働くとも、大陸諸國ほどの致命的危険に當面

しては居なかつた。然しこの地理的に與へられた安全の地位、他とは比較にならない自由な地位を使用したのは、極めて僅かな少數派であつた。労働者の代表として内閣の一員であつた大臣ジョン・バーンスは、閣議で戦争と決定された時に、二人の自由黨の閣員と共に辭職の意を發表した。イギリスの労働黨の社會主義傾向の中心を形成して、大陸の社會民主黨に最も近かつた獨立労働黨は、英國政府の政策を激しく批難する一宣言書を公にした。この宣言書には、「我が國を此の恐るべき戦に引入れたものは、セルピヤ問題でもベルギー問題でもない。英國は壓迫されて居る國民のために、或はベルギー國民のために戦ふのではない。たとへ獨逸が非公法的にベルギーの中立を破らなかつたにしても、英國は戦争の渦中にまき込まれたであらう。誰れが、若しフランスが獨逸に達するために、條約上の權利を無視してベルギーへ侵入したとしても、英國が、フランスに砲火を開くと信するだらうか……英國は歐洲に於ける最も反動的な、最も腐敗して居る、最も残忍なロシアを後援して居るのである。……我等社會主義者にとつては、獨逸及びオーストリーの労働者も、フランス及ロシアの労働者と同様に、同志であり兄弟である。……大砲の響きを超へて我等は獨逸の社會主義者に同情を送るものである、彼等は我等の敵ではなく、忠實な友だちである」と。一八一四年八月四日、歴史的意義のある下院會議に於て、労働黨の首領マクドナルドは、宣言した。『私

はグレイが間違つて居ると思ふ、私は彼が入つた政府が間違つて居ると思ふ、私は何時かは歴史が、彼等に間違つて居る事を判決する日が来ると思ふ。」その精細に亘つた議論の後結論として、イギリスは中立を守らなければならぬと主張した。翌日労働黨の幹部は一つの宣言書を發表することを提議した。その宣言書のなかには、「但しヨーロッパの全プロレタリア階級の平和な一致を可能ならしめる條件のもとに」出来るだけ速に平和を回復させることが労働黨の主なる義務であると述べられてある。然し黨の代議士會が此の宣言書を下院で讀み上ることを拒絶したことは、氣分が轉換しつゝあることを示すものであつた。そこで、マクドナルドは黨總理の地位を辭し、ヘンダーソンが代つて總理となつた。これに續いて、労働者仲間に廣く存在して居た政府反對の氣分は、愛國的感情に左右されて、それと同時に獨逸と名のつくあらゆるものに對して惡罵誹毀をなし始めた。ケイ・ハーデイと並んで獨立労働黨の有力な領袖であるラムゼー・マクドナルドでも、如何なる英人も抱く自明な結論、「戦争の原因に關して我々の見解が、何れにあるにしても今や我々は最後まで戦はねばならぬ」と云ふ主張に達した。十月十五日、イギリスの労働運動の指導者の多くは、戦争に對する罪責は獨逸が負ふべきものであり、従つて労働黨は獨逸の攻撃を防止する立場をとらなければならぬと宣言をした。そして諸産業組合と協同して兵員募集を實際的に援助しなければ

ならない、獨逸は征服されなければならない、と云ふ考へを懐くに至つた。この考へに對して二三の幹部たちや、獨立労働黨の一部の者たちが、依然として政府の政策を難じて、ヨーロッパ諸國と和解する事を主張したのは、格別重要視するほどでなかつた。全般から見ると國際的思想は、イギリスでもフランスでも役に立たなかつた。事狀が、斯くの如く進展したのは、少なからずイギリス政府の巧妙な政策に原因してゐるのである。と云ふのはイギリス政府は一方では高壓手段をとつて、労働黨一部の主張を禁止する事に躊躇しなかつたからである。政府は、一九一四年十月労働黨が計劃した集會……直ちに平和回復の交渉をすべしと云ふ宣傳を目的とした二百五十の集會を、眞正面から禁止して、この高壓的意向を表明した。他方では又英國政府は、有名なる産業組合の幹部連や社會黨の指導者の一部分を巧に味方にひきつけ、労働黨内の内訌、不和反目を巧にその目的に利用した。政府が採つた此の政策は、戦争の終り頃になつても極めて有効であつた。

ロシアの社會主義

ロシアの社會主義者は大部分戦争に反對した。然しこの事は、戦争が民衆の間には非常な人氣が

あつたから、ロシアに於ても一層意義あることと觀察しなければならぬ。獨逸の經濟的或は文化的の勢力から解放される事は、ロシアに於ては反動派も、進歩黨も、革命黨も共に懐いて居た共通の目的の一つ、それは僅かながらさうであつた。それにも拘らず、ロシアの社會主義者は、戰爭に當つてその主張する立場を棄てなかつた。彼等の内には、革命の洗禮、政争の渦中にあつて多年鍛へ上げて、露だも動搖、降服を知らないと言ふほどの力強い指導者があつた。あらゆる獨逸と名のつくものを嫌惡する感情よりも、もつとツァール政體に對する憎惡が、彼等の心のうちに熾烈に燃えて居た。ツァール政體を没落させ、新ロシアを確立する事が、彼等の一生の目的であつたので、この目的のためには如何なる手段も辭さなかつた。祖國の敗滅さへも、この目的の前には、高價すぎる犠牲ではなかつた。ロシア政府は、これを如何する事も出来なかつた。尤もロシアの勞働運動の中心であるペテルスブルグで、七月中旬勃發したゼネラル・ストライキは、警吏に社會主義の指導者及社會主義新聞に高壓手段を採る、この上ない機會を與へた。従つてロシアの社會主義者は、殆んど半身不隨のまゝ、將に決裂しやうとする戰爭に對して、抗議を出す事が出来なかつた。然し此は社會主義者に怨恨と鬪志とを募らしたばかりであつた。八月八日議會が社會主義團體にその立場を公表する機會を與へるや、彼等は起つて、戰爭に参加して居る諸強國の唯一の社會主義團體と

して、激烈なる抗議の聲を擧げた。戰費案が採決され様とするや、その前に席を蹴つて議場を退いた。

彼等の挑戰的態度に對して、政府は採決經過の議事録を變更して發表し、言論、集會、出版の自由を恐れる所なく抑壓した。これに續いて、社會主義國會議員の大部分を數ヶ月間のうちに逮捕すべき處置を採つた。然し最も危険視されて居たレーニンとトロツキは外國にあつたから、政府は策の施し様がなかつた。戰爭が勃發したので、メンセビキとボルセビキが、社會主義國會議員の一致を通じて再び合同した。然しこの提携はながく續かなかつた。老革命主義者ブレハノフが指導して、政府と協同するために、國家主義的傾向を帯びた一派が成立した。この派には大部分のメンセビキ及少數の社會主義者、ボルセビキが所屬して居た。これに屬して居た者は、戰爭誘發の主なる責任を獨逸に負はし、内訌を暫く中止して政府の戰時政策を援助する事を主張した。彼等は獨逸を民主主義の主なる敵とし、その敗北をロシアの自由主義の發展のためにも可なる事を主張した。

然し獨逸と異つて、此の派は少數であつた。大多數の社會主義者、ボルセビキ主義者及ロシアの邊境諸邦、即ちポーランド、リタウエン、ユーカサスの社會主義勞働諸黨派並びにユダヤ人勞

働同盟は、少数派に反対して、「いづれの聯合國が勝ち又は敗けるにしても、民主的及社會主義運動の進歩には何等助成する所がない。ロシアが、獨逸に勝つ時は、ロシアの反動主義が強められてヨーロッパの民主運動に對して不斷の壓迫をなすであらう」と云つて居た。また「この立場からロシアニ對して獨逸の勝利を希望して居る少数派もある」と附言できる。

ロシア政府の抑壓及びロシアには幸運に展開しなかつた戦争は、過激派の内的勢力を却つて強めて、過激派をして戦争の第一日から明瞭なる意志を以て、意識的に不斷の努力を擧げて、交戦國社會黨のうちにあつて、唯獨り現在の國家組織を顛覆しやうと圖らしめた。

新政策の樹立

獨逸社會民主黨内に於ける國家思想の勝利は、ブルジョア階級及政府にとつて、非常に意外な事であつた。半世紀を費して骨おり築いた思想的事業が、沸き返る民衆の感情のために殆んど消失すると云ふ事は、誰れも出來ると思はなかつた所である。

如何なる根據から、この愛國運動が出てくるのか、それに就ては意見が、まち／＼であつた。或る者は之を『戦争の酔』であると信じ、亦或る者は『國民的再生』であると信じた。政府は全く新しい状態に當面したのである。社會民主黨に對する従来の對抗的地位は最早維持する事が出來なかつた。社會民主主義を奉ずる労働階級は、この右すべきか左すべきかの危機に當つて、政府と仲直りの握手をした。恐らく世界歴史の上に意義を残したこの出來事は、獨逸の將來の發展に、深い影響を與へた。是等人々の意見に依ると、今や國家と社會民主黨の關係を根本から更へるべき時だと

思はしたのである。

戦前既に、社会民主党と『仲直り』をすること、それを国家主義化して、現在の国家組織にはめ込むことは、ベートマンの政策中に含まれて居た。それに基いた八月四日の宣言に依つて、實際、国際思想の荒野から歸郷して来る國民の息子たちを、再び国家主義的國家に確かり土着させる可能性が、與へられた様に思はれた。この思想は豫言の如く響き、前途の希望を約束したものと考へられるカイゼルの言葉のうちに、よく自發的に表明されて居る。『余は最早や何等の黨派、何等の教派と云ふ如き區別を知らない、余は唯獨逸人のみを知つて居る。』然しこの仕事は、まだ非常な困難を伴ふものであつた。相互の理解ある應諾と讓歩がなければ、解決は全く考へる餘地がなかつた來らうとする激しい内訌と非常な失望は、避け難いものであつた。政府の主なる人々の間でさへも不信用と疑念は大きく支配して居た。政府に慎重の態度を採ることを勸告する者が多かつた。八月四日に經驗した僅かな智識で、政府が改造を行ふと云ふのは、危険であると警告するものが多かつた。是等の人々は政府に指摘した……社会民主党の指導者たちが決議したのは、民衆の國家的運動に引ずられたからで、彼等の自發的な意志からではない事を云つた。是等の人々に依ると、社会民主党の指導者たちは、世界的な危機が明らかに迫つてきた日以来、如何ほど黨の勢力が國民意思の

支配者であると力説しても、彼等は民意の前には無力であつた。社会黨の領袖たちは、民衆の國家的運動を否定する立場を採れば、總てを賭する危険に曝されるが、之れを肯定すれば何物も賭するを要しないと知つて居た。抗議、反對の宣言をしたならば、一部の狂熱家は景氣づけの示威運動位はなしたであらうが、然し黨の將來はこれがために存在を危くされ、戦後には一八七〇年後のそれの如く、小數の過激派團體となつて終つたであらう。大なる國家の運命の岐れ目にあつて、社会民主党思想が到底國家的感情の敵でないと知つた指導者たちは——獨逸の労働階級の心と精神を熟知する、總明にして細心である指導者たちは、平時彼等の政策が根本的に非國家的なるに拘らず、愛國的感情を昂めたのである。この事實は、社会民主党の右翼が、戦時國家主義を黨の綱領、決議或は内政上の計劃に依つて巧みに理屈づけ様と圖つても、何等變らない。又國家思想の未曾有に發展した時に方つて、社会民主党は國家思想の支持者ではなく、單に安んじて引ずられて行つたものに過ぎないと云ふ事を忘れてはならぬ。かやうに是等の人々は考へて居た。

總理大臣は是等の冷靜な判斷に耳を傾けなかつたわけでない。然し彼は、社会民主党の態度が獨逸にとつて内外に對し大なる政治的利益をもたらし、將來の内治上の政策に、新しい先驅をなすものであると考へて居た。彼の考へでは、八月四日の經驗に基いて、社会民主党と永續的に提携する

事は、是非試みなければならぬものであつた。改革は政府の自由意思から發露するに止まり、決して外部から請求するべきものでなく、又黨と妥協の交渉に依つて此れを行ふべきものでない。これは政争の範圍外に置かなければならない、獨立した一個の大なる施政として存するものであるとされた。勿論彼にとつても、改革の可能と手段は制限されて居るやうに思はれた。主なる事は、社會民主黨を直接或は間接に抑壓して居る法律の一部を廢止すればよいのであつた。又新しく立案する社會政策的立法が、社會民主黨の希望を斟酌して立てられねばならないと云ふ事であつた。社會民主思想を抱くものも、將來は公務上同等に取あつかひ、彼等から特別の警察監視の下にあると云ふ感情を取去らなければならぬ。之に對しては戰後實行が必要であり、これは今から豫告してもよい。斯く考へて政府は社會民主黨を信任し、樂觀の態度を以て取扱はうとした。此の伸直り平和が永續するか否かは、主として他の諸黨の和解的態度及社會民主黨自身が、その目的の可能範圍を理解してをつたか否かに依存して居る。

戦争は短期の内に終ると豫定した政府は、右の様な一般的な事に同意するだけで十分であると考へた。斯様にして國內政治の現實的な大問題は、尙未解決のままに放置された。従つて計劃された『新政策』も未だ條項を規定した確實な立案とまで行かなかつた。戦争初期の數ヶ月中に斯る立案

の現はれる事は、社會民主黨も亦殆んど豫期しなかつた事である。この考へは、劇的に狂風の様な迅速を以て展開して行く軍事上の出來事に掛つて居た。國民が擧つて勝利を喜び、戦争が速かに幸運を以て終ることを待ち望み、然る後に國內の新整理が、始められるだらうと考へてゐた。即ちこゝ暫くは政府が、あらゆる表面上の衝突を、生ぜしめない様にして居れば十分であると思はれてゐた。陸軍大臣に宛てた一書簡に、宰相は、相互信任の新精神を持続して行くことが、極めて大切なことを力説し、この平和を攪亂する様な事を一切惹起してはならないと要求した。參謀總長は軍事上の立場から、宰相の此の言葉を裏書きした。

動員令が下つた第一日から全國に布告された戒嚴令は、右の理由で極めて中和的に實施された。従つて特に壓迫は感じられなかつた。社會民主黨の指導者の逮捕、社會主義新聞の抑壓及その他の從來計劃された特例取締法は、悉く實施されなかつた。そして下級官吏が、單獨に干渉手段を採つた場合は、中央上級官吏が速かに之を改めさせた。代議士の不可侵權は、議會の閉會中でも特別の指令に依つて確實に保證された。軍隊内に於ける社會民主主義の定期刊行物の禁止は、若しこれらの黨の機關紙が政府の信任を裏切るやうな態度を示すならば無効にすると云ふ條件付で解除した。これは社會民主黨の代議士シュタットハーゲンの動議に依つて、一九一四年八月三十一日付の陸軍

省令で許可された。然し此の省令はプロシヤの内務省に依つて猛烈に攻撃された。プロシヤ内務省は、『フホルウエルツ』紙上に漸次甚しく現はれてくる傾向を指摘して、社會民主黨に對して大なる信任を置かない様にと警告した。その指摘された傾向と云ふのは、占領地帯での敵國兵士や普通人の暴行に關する報導を軽く解釋したり、これと反對に自國軍事當局の刑罰方法を批難して、『是非止めねばならぬ野蠻行爲』と指摘したり、或は勝利を得た場合の領土擴張に對して反對氣分を煽ふつたりする事であつた。社會民主黨の現在の控へ目な態度は、主として戒嚴令に餘儀なくされたものであつて、間もなく以前の態度に立ち歸ることを豫期してゐなければならぬと云ふのが、プロシヤ内務省の意見であつた。然し宰相は之れに動かされなかつた。既に施行された規定は、そのまま維持されて居たのである。

新しく生れた協同に對する温かな喜びが、『城内の平和』と云ふ誇りある考へを生んだ。戰時中、あらゆる國內の政争は差し控へられ、國民の全力は外敵の防衛に注がれ、何事も之を動かしてはならない。諸黨派は相互にその所有を尊重し、之を擴張する様な努力をしない義務をもち、あらゆる經濟上の鬭争は延期されることを要求され、ストライキは禁物とされた。勞働諸組合はストライキ補助費の支出をやめて、これから浮いた金を戰時救助費に充てた。これと同時に、他の一方では、

「帝國同盟會」が、その反社會民主的運動を中止した。

八月四日より分裂までの獨逸社會民主黨

獨逸社會主義に於ける諸潮流

八月四日の決議は、獨逸社會主義が更に發展をする、大なる精神的奮闘の挫折を意味したのでない。マルクス及ラツサル以來、分裂が黨の上に逼つて居た、その緊張は一九一四年から同一六年にかけて、正に最高點に達した。それはかの國家及國民に對する態度如何、革命か進化か、議員制度かプロレタリア階級の獨裁か等に關する、以前から存在する諸問題であつて、從來ながく社會主義が苦惱して來た所である。然し今や世界大戰の恐ろしい壓迫に逢著して、それは漸次純粹なる理論闘争の範圍を脱して、遂に政黨の形態をも破壊するに至つた。この前の危機であつた改革主義に對して、ベーベルの奮闘は、ベーベルカ、ウツキー等（黨の中堅）の表面的勝利となつて終つたので

ある。その當時主に問題となつたのは、革命的手段をとるか進化的手段をとるか、何れの手段を採れば一層よく一層早く、社會主義の目的を達成する事が、できるかと云ふ事であつた。今度は主として國家問題が争となつた。國際的階級闘争が、この戰爭中繼續されるべきものであるか、若しさうであれば如何やうにして繼續されるべきものであるか、及び如何なる程度まで社會民主黨は國家内の他の階級と共に、國民としての運命を負擔しなければならぬかと云ふ問題が、今や解決されなければならなかつた。この事も結局は、闘争手段に關する問題に過ぎない。この問題の解決を延ばした故に、社會民主黨内の矛盾の中心問題が、重大な影響をうけたと云ふ事はないであらう。然し黨の新しい編成には十分な關係があつた。

三つの集團が、漸次その態度を明らかにした。即ち右翼は國民と活動を共にし、左翼は戰爭中でもこれを否定し、この左右兩派の争協を求めた一集團が、それらである。突然指導的地位を占めた右翼、今となつては『國家主義派』には、先きに反逆者同様に取扱はれた人々、就中ハイネ、ダーピット、コルプが、勝利の保持者となつて、黨の發言者として活躍して居た。唯ベルンシュタインのみは、社會主義世界觀の平和主義國際的傾向を認めて居た故に、左翼に傾いて、此處には缺けて居た。然しこの代りに在來過激派の柱石であつた人々、即ちヘニシュ・クノーや彼に續いて下級の

連中が多数左翼に走つた。レギエンの指導の下に、自由労働組合の巨大なる團體が、豫ねて期待されて居た様に、一致して戦争中、右翼の後援となり、その優秀な地位を確保した。その反対の側にある過激派は、當初は少数であつたが、然しその内には熱情と鐵のやうな意思を持つ卓越した人物が居た。その先頭には、小リーブクネヒト、ポーランド生れのロザ・ルクセンブルグ及ラデツクが起つて居た。

妥協を求めた中間派には、暫く動搖した後、再び舊來の立場を見出したカウツキーが、立ち留つて居た。嘗つてペーベルの偉大な援助の下に、社會民主黨の指導者たちの花形は、カウツキーの膝下に侍つて居たが、今やこの忠實なるものも數少くなつて、唯僅かに最初はベルンシュタインとレーデプー爾及び黨の首領であり代議士會の會長であつたハーゼの三人が、カウツキーと同一立場を採る事を告白した。然しカウツキーは、國際的に聲名ある、オーストリーの黨派中支配的勢力を持つて居る人々、アドラー、レニナー、ヒルフアーディング等のオーストリー人同盟に依つて、強い精神的援助をうけた。

戦争初期の數年即ち一九一七年の終頃までは、國家に對する態度に關して、これらの三派は相互に、及び自派内にありて争ふて居た。論争は一九一六年九月から一九一七年十月の間に開かれた黨

の諸大會に於て、その絶頂に達して、遂に舊社會民衆黨の分裂となつて幕は降りたのである。この激しい思想戦は、唯その一部分のみその態度が綱領の上に具體化された。その最も極端な見解に達したのは、疑もなく過激派であつた。

この過激派の綱領の主なる趣旨は、既に一九一五年の春ロザ・ルクセンブルグが獄中で著した、『ユニウス小冊子』^{パンフレット}に書かれてある。この小冊子には、尙立派な文章で、次の事が書かれてある。『世界大戰は、實にヨーロッパ社會主義の四十年間の努力を、破壊して了つた。革命的労働階級の政治的に持つて居る勢力は、その意義が破壊され、プロレタリアの國際主義派は吹飛ばされ、その各分派は相互に兄弟的殺戮を行つて居る。主なる資本主義國の民衆は、その希望を帝國主義の船に繋いで居る。戦費案に賛成する事に依つて、獨逸、フランス、イギリスの社會黨は帝國主義の配下となり、これに依つて戦争及その結果に對する責任を分擔しやうとして居る。この反逆のために忠實にその義務を盡したロシア、セルビヤ、イタリア、ベルギー諸國の社會黨の指導者たちは、無力に陥し入れられた。』

更にこの小冊子には、『この世界大戰は、世界的支配權を得るために、帝國主義の競争から生れたもので、社會主義及民主主義の敗北を意味して居る。』とあるも『世界大戰を、國際的仲裁、軍備

制限、海洋の自由、ヨーロッパ諸國聯盟及びその他の外交手段に依つて、阻止しやうとする企圖は空中樓閣に過ぎない。世界平和を導く唯一の手段は、世界中のプロレタリア階級の革命的意志である。故に此の意志を強め、目的及實行方法に關して明瞭な統一した見解を立てると云ふ事は、決定的に意義を有して居る。これは、これから新しく生れる國際主義派の仕事である。この國際主義派の勢力、権能は、能ふかぎり維持しなければならぬ。

この國際主義派には、平時、軍國主義、植民地施策、商業政策等の問題に關して、社會主義地方團體の活動方法を決定する権能を附與せねばならぬが、然し戰爭中は全般的の實行方法が、この國際主義派に依つて決定されなければならぬ。然も他方、國際主義の決議を實行する義務は、他のあらゆるものに先んじて考慮しなければならぬものである。』

過激派は、國家防衛に對する態度を、全くプロレタリアの利益の立場から採つた。社會主義の棄て置き難い敵であるツアール……ロシアに對する戰爭は、或る程度まで彼等の喝采の的になつた。彼等は中歐諸國の勝利に多大の興味を置いて居たが、それも一九一七年春のロシアの瓦解、續いて同年秋のボルセビキ主義の勝利の後には、かゝる興味を全く失つて了つた。この時から、世界大戰の様な國家主義的並びに産業的に基礎を置いてる戰爭は、彼等にとつては資本主義組織に於ける壓迫

者の仕組んだものであり、従つて勞働階級に屬して居る國民にとつては明瞭な詐欺なるものと解釋された。プロレタリアにとつて、戰爭に訴へなければならぬやうな紛争は、國家主義的にも産業的にも存在しないものである。獨逸の勞働者と獨逸の貴公子が味方であるのではなくて、獨逸とフランスの勞働者が共に味方なのである。戰場に於ける『塹壕内の共同生活』は、相容れ難い敵同志の不自然な共同生活であつて、頑迷な空想家の頭にばかり存在するものである。國土防衛の義務と云ふ言葉は、プロレタリアにとつて何等の意義を有しない空言である。若し戰爭に唯一の利害的關心を置くなれば、それは戰爭を世界革命の端緒とする事である。斯くこの派の人々は考へた。彼等の軍隊に對する激烈な態度は、斯うした思想議論の裡に能く對應して表はれて居た。即ち外國と現實に行はれて居る戰爭を顧慮しないで、たゞ軍隊を傷けて取除く事を圖るのが、國內の社會主義諸黨派の貴重な義務とされて居た。彼等は軍隊が崩壊して、初めて國際主義の道が開かれると考へた。

カウツキーの思想的指導の下にあつた中間派は、故さら新しい綱領を掲げる事を中止した。カウツキーの立場に依ると、社會民主黨にとつて唯一の正當な綱領は、戦前の綱領であり、又それはマルクス、エンゲルスの教説、並に國際主義派及國內黨會議の決議に準據することを要し、又舊來の戦

法に立ち返へらねばならないといふにあつた。彼の感情及び彼が、平常から多年費やして得た權威の峻烈と論理の限りを盡して、新時代の傾向に反対し、左翼へ或は右翼への戦線變更を蔑視して、自らの立場を防衛した。彼は、何の躊躇もなく、この機会に際して、前代の指導者たちの態度から現在の結論を擲んだのである。黨の多くの同志は、彼に倣つたが、勿論その中には屢々彼と全く正反對の結論を得たものもある。無数の論文及小冊子で、カウツキーは戦後に起つた新しい現象を古い形式にはめこもうとした。若しこの試みが都合よく行かぬ場合は、可能の範圍に於て妥協を圖らうと努力した。あらゆる是等の妥協的解決を伴はざるを得ない弱點を、どうにか蔽ひかくす事が出来たのは、たゞ彼の強い精神的卓越の御蔭である。國土防衛に關しては、彼も心中自ら非常な苦惱をしたが、その努力も遂に無駄で、結局明瞭な單純な態度に達する事ができなかつた。彼は戦争を全く意義のないものであるとした。この世界大戦は、社會主義の發展からも何等期待する所がないばかりでなく、帝國主義の立場からも全ヨーロッパの文化、労働者の生活を威嚇する、そしてヨーロッパ以外の帝國主義を強めるものであるとした。従つてこの戦争は資本主義にとつても必要なものではないと論じた。

社會主義者の多數が、主張した議論——獨逸は防衛戦をして居るので、その國境を敵軍の掠奪、

蠻行から救ふのみと云ふ議論に對して、カウツキーはこれを極めて粗笨な説だとして退けた。初めは婉曲に用心深く、後には露骨に無遠慮に、彼は獨逸政府が少くとも他の諸國より、戦争の責任が少いとは言へないと指摘した。但し彼は責任の問題が、社會民主黨の態度を左右するに就て、重要なものでない事には同意して居た。然し又かゝる時にプロレタリア階級の利害ばかりが、決定的要素として考へられない、と云ふのは今や戦争の最中に、一體何れの點に斯る利害が存するかと云ふ事は確定できないからとした。國際主義が破滅し、國內の社會民主諸黨が國家主義に移つた後には最早公平な判斷者は居ないのである。従つてこの雜多な利害の混亂から、逃れ出る唯一の道は國際仲裁々判である。然し各國政府、特に獨逸政府は、この仲裁々判に對する好意に缺けて居る故に、國際的プロレタリアの義務と仕事は、各國政府に強制しなければならぬ。然し交戦國の労働階級は實際上の理由から従軍義務を免れる事が出来ない。故に労働階級は決然とした態度で政府の政策を監督して講和に導く様に、その權利を要求しなければならぬ。各國の黨派は、この意味でそれ／＼の國內にあつて、先づ活動しなければならぬ。然しこれよりも早く、出来るだけ速かに、以前の國際主義派が、プロレタリアの平和回復のための戦の指導者として、復興されなければならぬ。これがカウツキーの意見であつた。

多数黨社會主義者も亦新しい綱領を掲げなかつた。彼等は主要な點に於て、依然として黨の在來の原則を固守すると宣言した。國家に關する問題に就ても、尙舊黨派の立脚地に立つと主張した。ダービイト及彼の一派は、倦まず疲れず之を立證して、過去と現在の立場の矛盾を消さうと努力した。彼等は獨逸が現代の社會主義運動の、先頭に進んで居るものであり、獨逸がこの戦争で自家の立場を固守して行くことの出来るのは、プロレタリア階級の利益には好都合であると云ふ見解を代表して居た。

従來の思想を繼承して、その傳統を守つて行くこと云ふ黨の試みは、獨逸社會民主黨の國家に關する問題が、遂に大戦中明瞭にされなかつた主なる理由に數へられる。勿論、多数派は現在こそ國家主義の態度を採つたが、之れがために將來も同一態度を採らなければならぬ義務があり、黨から根本的に國際主義を除かうとするものではなかつた。彼等は、戦争中熱心とまでは行かなくても、外部からは十分と認められる方法に依つて、國際主義派と斷絶した絆を再び結びつける義務があると感じた。

多数派を新國家主義に引入れやうと試みた指導者がなかつたわけでない。是等の人々は、斷乎としてカウツキーの『三統派』を拒否して、マルクスの説は永久に固定的な時代を超越したものでは

ない、むしろ有機的な發展が、マルクスの意思であると主張した。彼等は、社會民主黨が一度離れた黨の古い道を、戦争中及戦後に、再び歩んで行けるか、それは出来ないと思つて居た。彼等は、この戦争が必然的に黨の政策を新しい道に導き、そして或る決定を與へるものであると思つた。八月四日、國際主義派の破滅にも拘らず、尙國際的努力が近い將來に勝利を占めると大膽に期待する者は、彼等の考へに依ると、空想家であつた。若し社會民主黨が、國家主義思想に反抗するならば、黨はこの思想のために粉碎されて、少數の分派に衰退するであらう。だからこの危機を利用して、黨の進歩發展を、少くとも國家内だけでも安全に發達するやうに、聰明な策をとらなければならぬ。故に目下は國民から離れずに、むしろ參與しなければならぬ。獨逸が敗れると、黨も亦敗北の深みへ引入られて了ふ。獨逸が勝つならば、黨も、その採つた態度の果實を社會的にも又民主主義の方面に於ても、收獲する事が出来るので彼等は將來の利益のために、國家の味方となつて戦ふ。斯く彼等は考へた。

この方向に最も深入りしたものは、コルプである。彼は公然その過去を捨て、原則的に新しい方針に對する信仰を主張した。今日の國家を否定するは、既に陳腐な『現在社會組織の破滅説』に由來する。在來の、理論と實際の矛盾は、阻止せられなければならぬ。吾々は何物であるか、その

實體を世間にも表示しなければならぬ。即ち吾々は社會主義的改革派である事を示さなければならぬと主張した。

コルプは次の如く考へた。獨逸國內の政策に就ては、社會民主黨と民主主義の左翼とは、非常に優勢なる選舉民を有し、従つて實際上有力であるから、互に連合して實行力のある妥協政策を行ふべきである。この左翼の諸黨派の連合の目的は、資本主義階級國家を、政治的にも亦社會的にも改革政策に依つて改造し、政黨内閣に支持される民主國家を實現するにある。形式上の共和政、王政の是非の問題は……これに比較すると重大性を帯びて居ない、上述の政策は王政と了解を得る事が出来る。コルプは又斯うも考へた。在來の社會黨の軍隊政策も亦捨てられなければならぬ。八月四日の出來事は、この政策の間違つて居る事を示して居る。資本主義階級國家が、必然に社會主義制社會に變移するやうに、常備軍は民軍に變移するであらう。この變移を阻止するものは何物もない。この新しい改革政策を社會民主黨の政治的原則に反すると云ふ者は、最早吾々と一緒に働く事が出来ない。その間の隔たりは大きくなつた。社會民主黨の内部に横はる問題は、今度こそ解決されなければならぬ。これ以上に無理な妥協をすることは、最も大なる禍であると云ふのが、コルプ等の考であつた。

國家主義の、並びに改造的思想の勝利を、將來も確實に多數派社會民主黨の内に維持しやうとするコルプ等の企ては失敗に終つた。ロザ、ルクセンブルグ、ラデツク、リーブクネヒト等の強い力が、その主張を少數過激派のうちに生かした様には、コルプ、ダーピット、ハイネの主張は多數派のうちに貫徹さす事が出来なかつた。彼等はかゝる大膽な企てをやるには、餘りに弱すぎた。又マルクスの偉大な影響が、強く獨逸社會民主黨の上に蔽ふて居たからでもある。多數派の主なる指導者たちは、戦時中一定の方針を示した綱領を掲げない方が、時宜に適して居ると考へた、と云ふのは、社會民主黨の將來は暗黒で、不確實であつたから、彼等はその運命に對して行くべき道を示す事ができなかつたのである。夫れにも拘らず國家問題が兎も角も一度討議され、又國家主義の極端な保持者が、黨の中心人物中に居たと云ふ事は、全く意義のない事ではない。

インターナショナルの挑戦

マルヌの戦で、獨逸の勝利的前進が突如として阻まれ、續いて退却となり、此退却を、非常な努力を拂つて喰ひ止めた數週間後に、愛國と舉國一致とに興奮して居る姿の上に、早くも感激のさめ初

めたことを示せる最初の陰影がかゝつた。なる程軍事通信は、西部戦線の失敗、東部に於てオーストリー・ハンガリー軍が破れ、そのため蒙る危険、それらのものを蔽ひ秘すことが出来た。東プロシヤのヒンデンブルグ軍の勝利は、國民に勝利氣分を與へ、軍事的危機を忘れしめた。然し最初の得意であつた勝利の酔も、斯る状態が幾週間、幾月間と過ぎるうちに、醒めないわけに行かなかつた。國民は最後の勝利を得るためには、尙困難な、そして多分は長く戦争を続けなければならぬことを知つた。單に軍事の方面ばかりでなく、精神の推移の根源が、既にこの悲劇的な九月の週間に萌して居た。勝利の榮光が獨逸國民の上に輝いて居た間は、國家否定の幽霊は暗い影のうちに潜んで居た。だから抗議の聲も、反國家的な言葉も聞えなかつた。當時、國民はまださうした言葉を發する事を許されて居なかつた。然し今やそれが灰色になるに及んで、國際主義思想の不撓不屈の運動家たちは、再び明るみへ出た。國內のこゝ彼處に、極めて用心深く注意して、是等の人々は、相互に連絡はないが、然し未來を敏感に悟りながら表面に出てきた。既に以前から過激主義の本據であつたブレーメン、シュトゥットガルト、ライプチヒ、ベルリン等で、最初反對派の集團が出来上つたのである。

黨の機關諸新聞にも亦怨嗟的、仇敵的な聲が聞えだした。九月二十七日の『フホルウエルツ』

紙は第一回の排撃を試みた。同紙は獨逸を罵つて、社會主義取締法の國、國民平等の權利を唯プロシヤ憲法の紙上で知るばかりの國、意地悪い警察政治を行ふ國であると切言し、更に「外國にある者が、獨逸を帝國主義、軍國主義、警察的壓迫の國と思ふのは、無理のない事である。然し獨逸の労働者が、その祖國を防衛してをつも、彼等と同様その意思に反して戦争に従事する事を強制されたる他の國々のプロレタリアの利害と、獨逸の労働者の利害とは同じである事を、彼等獨逸労働者は決して忘れない。それを外國は確信してよろしい。」と。

同じ意味のことを、『ライプチガー・フホルクス新聞』『ブレーマー・ブユルガー新聞』『シユウエビイシエ・フホルクスワハト』等も、書いた。『シユウエビイシエ・フホルクワアハト』の戦争に對する反對態度は、社會民主黨内に於て、初めて公然の衝突を惹起した。ウエルテンベルグの議會内の社會民主黨は、十一月四日その機關誌として居る過激派の諸記者を、就中クリスピエンを免職して、右翼に屬する人々を以て代へたのである。この處置に關する異議から、反政府派の集團が、ウエストマイヤー、クリスピエン、クララ・ツエトキン等の指導の下に作られ、地方の諸團體のうちにも相當の歸依者を持つに至つた。同時に黨の極左翼の宣傳戦が、リープクネヒト、メーリング、ロザ・ルクセンブルグ、クララ・ツエトキン等の指導に依つて始つた。八月の終りに、あらゆる

る反政府的指導者のうちで、最も大膽であつたリーブクネヒトは「併合反対、平和促進」の標語の下に、示威運動を起さうと努めた。彼は黨の指導者たちの斷然とした反対を眞向から受けた。かくて彼の叫び聲は大衆にまで徹底しなかつた。だからこの方面では、これ以上に見込がつかなくつた。それでなくてさへ戒嚴令は集會、刊行物の反國家的或は反戰爭的意見の發表を、不可能ならしめた。従つてこの場合には異常な手段、一部分は非法的な手段の適用が、必要とされた。そして此れには二つの方法が可能である。一つは中立國及敵國の新聞紙を通じて、他の一つは國內の『地下的文書』を通じてである。既に九月十日、リーブクネヒト、メーリング、ロザ・ルクセンブルグ、クララ・ツェトキン等は、中立國の新聞紙に、社會民主黨の政策に反対する、然し婉曲に反対した宣言書を發表した。『同志ドクトル・ゾイデクム及びリヒャルト・フィッシャーは、瑞典、伊太利、瑞西の中立諸國の社會黨の新聞で、獨逸社會民主黨の戰爭に對する態度を、彼等の考へ通りに示さうと企てた。従つて吾々及び多くの獨逸社會民主主義者は、戰爭、その原因、現在の社會民主黨の役目を、同志フィッシャー及ゾーデクムと異つた立場から考察する、と吾々は同じ紙面で餘儀なく宣言した。』之よりも一層鋭い調子で書かれたものは、英國の獨立労働黨の機關紙『レイヴオア・リーダー』の新年號で、リーブクネヒト、メーリング、ロザ・ルクセンブルグ、クララ・ツェトキン

の全名を掲げて公表された數箇の論文であつた。この論文では殆んどこの上ないまでの鋭い調子で、獨逸の多數派社會民主主義の政策が批難された。メーリングは斯う書て居る、獨逸社會民主黨の指導者たちは、分別を失つて了つて居る。然し民衆は、『若し指導者たちが欲するならば、彼等と共に、若し指導者たちが、無爲に留まるならば、彼等なくして、若し指導者たちが抗するならば、彼等に反抗して……』と云ふ標語の下に再び集るであらう。ロザ・ルクセンブルグは、奮慨した狂熱的な言葉で、國際主義黨があさましく破滅して了つたこと、特に獨逸の黨派が最も慘めに破滅したこと等を痛嘆して、『勞働階級の、數百萬を以て數へる人命が、恐ろしくも殺戮されて居る事を、吾々は目撃して居る。祖國を守る、或は文化のための解放等の虚名に依つて、戰爭を肯定する此の帝國主義的殺人者は、狂躁し或は亂舞して、町にも田舎にも絶望を招來し、諸國の文化を破壊、自由を攪亂して居る……』と。

リーブクネヒトは、『社會主義のあらゆる黨派は、國際主義派と同様に、共通の敵をその國內に持つて居る。解放のための戦は、國內に於て行はなければならぬ、國民を解放する事は、國內黨自身の仕事である……』と云つて居る。

是等の論文で、中絶した國際主義の絆を再び結びつかしめやうと努力したが、その効果は實際の

ところ不確定であつた。たゞ確實に得た結果は、敵國の國家主義的新聞の歡呼の聲であつた。これらの新聞は、獨逸勞働階級が段々自覺してきたこと、或は獨逸國民の一致が亂れだした兆があるといふやうに書いた。然しこの方法は政府反對の氣運を高め、自國を革命に向はしめるには、餘り効果がなかつた。檢閲があつたので、外國からは唯弱い反響のみが聞えて來た。この方法よりも、モット有力なのは、匿名の宣傳ビラ、小冊子、紙片に依る『地下的宣傳』である。この種の文書は初めは甚だ僅かだつたが、後には浩瀚なものとなつた。これらの文書は國民の國家主義思想を阻止しやうとする努力の反映である。この努力に依れる緊張範圍は、ブルジョア階級の平和主義者から、マルクス主義の極左翼に移り、サンチカリストに迄及んだのである。

『地下的宣傳文書』の外には『口頭の宣傳』がある。エルウイン・バルト、リハルド・ミュラー及露西亞人イヨギツセスが、この宣傳の主なる代表者で、又宣傳の組織者であつた。彼等は、國內に於ける階級闘争を説いて、經濟戦争を再び起さうと企てた。彼等の絶間ない攪亂的煽動は、就中ベルリンの金屬職工が深い影響をうけた。

獨逸から流れ出る濁流は、中立諸國にある敵國の宣傳機關、並從前の國際主義派が、今も尙事務を續けて居る事務局から出てくる宣傳と合して、混流をつくつた。スイツツルは外國の宣傳文書の

發祥地である。こゝには單に敵の宣傳部が活動して居たばかりでなく、郷國を追はれた革命家たちが世界革命の來る事を信じて亡命して居た。こゝに居る、追放された露西亞人の内には、レーニンもトロツキーも居た。トロツキーの『戦争と國際主義黨』と云ふパンフレットは、一九一四年十二月國境を越えて獨逸に這入り、左翼過激派の綱領となるほどの意義を持つた。この小冊子で、トロツキーは國際主義黨と社會主義の大敗北を認めた。『戦争から智識を得たプロレタリア階級は國內に眞摯な障害が起るや、暴力に訴へる必要を感じるに至るだらう。……吾々は死神の恐ろしい地獄の音楽の中にも、明瞭な思想、くだらない見解を保持して、將來の創造に對する力を吾々自らの内に感ずる。吾々の同志は今既に多數である。表面に現はれた數より遙かに多い。明日は、吾々は今日よりも又遙かに多數となるだらう。明後日は、吾々の旗の下に奮起する者が、幾百萬を以て數へるに至るだらう。是等の者は、共產黨宣言が公けになされてから六十七年になる今日も尙、束縛の鎖以外には、何物も失ふべきものがない。』斯く云つてトロツキーは、その派の人たちを慰めた。

學國一致して戦ふて居る獨逸戦線の後方には、不規則な諸勢力が衝突して、その百姓一揆的闘争が蔓延して行つた。一方議會では社會主義闘士が、政府反對の巨弾を放つた。一九一五年の夏迄争はれたのは、主として戦費案に賛成するか否かの問題である。この問題は祖國を守備する、即ち結局は國家に對する態度を含んで居た。

一九一四年十月二十二日、社會民主黨はプロシヤ下院で、戦費案賛成の意を表したが、然し黨選出代議士のうちの左翼派の壓迫をうけて、この協賛に次の要求を附帶した。要求と云ふのは、政府は速に内政の改革を行ふこと就中平等の選舉權制度の實施に努力する事であつた。第二次戦費案に際しても議事は同様に進行した。こゝでも、一九一四年十二月二十九日の社會民主黨代議會は、殺氣だつた論争をした後、否決者十八人に對して多數を以て戦費案を可決した。十二月二日の議會で社會民主黨は一の宣言をなした。『社會民主黨は依然として八月四日の立場に依つて居る、何故なれば國家の對外事狀は、それ以來何等本質的に變化をうけて居ない。』然しこの宣言には、反對派のために一つの事項が附帶された。それには國內の事狀、特に戒嚴令布告後の状態に就ての不満を激烈な言葉で表示して居る。『戦時戒嚴令の權能、憲法に依つて保證された權利の制限、殊に定

期刊行物の制限が、今も尙範圍廣く持續されてゐることは、辯護すべき余地のない程明白である。否却つて獨乙國民の發達及びそれに到らうとする國民の決意に、疑念を起させるものである。檢閲の方法は、絶へず行き違や産業上の阻害を起して居る。吾々は一致して國を守備し、獨逸の體面、福利のため速に其對策の講ぜられることを切望する。』

此の調子の低い要求に續いて、同日リーブクネヒトは、議會で反對の鼓をほがらかに打ち鳴らした。彼は、全體の黨議と異つた意見を議會で發表する事を、社會黨内の少數な反對派にも許可される様に要求した。この要求は、大多數に依つて拒否されたが、彼は公然黨の規律を破つて、唯一人の代議士として、戦費案に反對投票をした。此の目的のために、彼は議會で宣言文書を読み上げた。此宣言書は議會の速記録に載らなかつたが、反獨逸派の新聞『ベルリナー・ターグワハト』に載せられて、スイツツルから多く外國に持ち出され廣く撒かれた。社會民主黨代議士は、一九一五年二月二日、リーブクネヒトの此態度に就て相談をした。自由勞働組合の會長レギーンは、彼を除名する事を動議したが、代議士會は峻嚴な譴責の程度にとどめた。

それから數日たつて、リーブクネヒトは補助輸卒として召集された。然し帝國議會及びプロシヤ議會議員としての彼の役目は、そのまゝであつた。一九一四年二月、國事犯として禁錮刑に處せら

れたロザ・ルクセンブルグは、その刑のために逮捕された。彼女は獄中暇な時間を、有名な『社會民主黨の危機』（ユニウス小冊子）の著述に費やした。この書は戦争中に書かれた政府反対の類書中疑もなく最も意義がある。この書は、リーブクネヒト派の『インタナショナル』黨（スバルタクス團）の方針を示すものである。著者の鐵の様な意志は、原稿を人に氣付かれないで書き上げ、秘かに刑務所から持ち出すことに成功した。

第二次戦費案が上程された時、その経過は甚しく諸黨派の耳目を衝動させたが、一九一五年三月第三次戦費案が採決され様とした時、その激動は一層高まつて來た。この第三次戦費案は總豫算に編入されてあつたので、社會民主黨の協賛を得るには適當でなかつた。豫算案を否認する事は、社會民主黨が立黨以來、黨會議に依つて度々神聖なるものとされて居た原則であつたから、政府の遣方は黨の賛成を得るには困難であつた。然し社會民主黨の多數派は、新しい態度をとつたので、黨の原則も無視された。今度の戦費案を可とするものが、反對二十五人に對して七十七人あつた。又全豫算を可とするものは、三十五の反對に對して、六十九人あつた。が何れにしても、反對の投票が増加してきた事は、輕視すべき事ではなかつた。これよりも尙一層憂慮しなければならぬ事は、三月十日から二十日までに行はれた、帝國議會の本會議に於ける會議及採決の形式であつた。

一九一四年十一月の時と異つて、今度は過激派の連中でなく、カウツキー派の人々が、その先鋒に立つた。黨の、及代議士會の首領ヒュゴ・ハーゼは代議士全體を代表して、議案に對する演説をなすべき旨を通じた。その演説はジャーナリストの技巧を強く加味されたもので、十分の峻烈さを含んで居り、これまでの黨と政府の平和的關係に敬意を附加して宣傳したものであつた。戦争を開始して以來、初めて社會民主黨は議會の演壇から政府の方策に對して峻烈な批評を試みた。ハーゼは決然として次の事を要求した。即ち労働者は單に犠牲を捧げるばかりでなく、在來とは異つた方法に依つて、戦争及平和を決定する事にも參與さして貰ひたい。更に附け加へて、併合思想に明瞭な言葉を以て反對であることを示し、社會民主黨は國際的社會主義の代表者として、將來戦争を惹起する恐れある萌芽を含まない、永續的平和の回復を要求すると述べた。國內の平和を攪亂しない様にと云ふ政府及右黨の警告に對して、彼は『國內の平和』を指示する事が、最大の無意義になりつゝあると短評して却けた。

黨の右翼はハーゼのこの鋭い非難を憂慮した。三月十八日内政に就て演説をしたシャイデマンはハーゼの影響を緩和させやうと努めた。彼は、政府が八月四日に約束した、内政上の新政策を、戦争の終りまで延期しさうに思はれると非難した。然し彼も、彼の黨派も、この事に關して政府と相

互挑戰的な立場に起たうとするものでなく、寧ろ他の諸黨と一緒に持久しやうとするものであると人心を緩和する様な言葉を發した。

社會黨の此の多數派に對して、少數反對派は、三月二十日、戰費案が採決される日の議會で、突然意外な逆手を試みた。始んど全員の猛烈な反抗の聲をうけながら、レーデブルは、自黨の委託もなく、政府の内政に就て、無遠慮な鋭い批評を下した。この日、彼は、フランス系のエルサス、ロートリンゲン人が、獨逸の虐待のために、以前のフランスの支配を憶れて居ると、主張さへした。彼は獨逸國內に住んで居るデンマーク人、ポーランド人等が、獨逸を憎惡するに到つたのは、獨逸人の罪であると云ひ、獨逸領の一村が、ロシア軍に焼き拂はれたその報復手段として、ロシアの三ヶ村を焼き拂へと命じたヒンデンブルグの指令を野蠻であると難じた。

社會民主黨内の此の紛擾を切迫させないために、多數派は少數派の挑戰に對して、黨はレーデブルの演説に責任を負はないと宣言したにとどまつた。採決の間際になつて、政府反對の議員が三拾人、議場を退いた。然しリーブクネヒトとリュールは、豫算に對して反對の投票をした。

こゝで戰費案賛否の争が、頂點に達した。八月二十日の四個の議案に對する採決は、別段重要な新らしい状態を示さなかつた。一九一五年十二月二十九日、第五次の議案採決に際して、一層の危

機が横はつた。四拾三名に達する政府反對の社會民主黨代議士のうちで、二拾名がリーブクネヒトに倣つて、公然と戰費案に反對の投票をした。一九一六年三月二十四日の緊急豫算案の會議で、社會民主黨代議士會内に、たうとう分裂が起つた。

一九一五年の春以來、これまで政争の焦點であつた戰費案賛否の代はりに、漸次領土併合及び戰争終局の際の條件が、重要な政争問題となつた。元來これらの問題が、『國內の平和』に禁物だつたと云ふのは、既に存在してをった政争的對立が、これに依つて極めて切迫した危機を齎らすのだからと容易に豫想された。然し政治的訓練の足りない獨逸人は、政黨政治をうまく活用できる此の方面で、これをなし得ないで『國內の平和』を持続する事に、辛捧が出来なかつた。

戰争終局の際の條件問題は、根本的の意義を有て居たが、これも平和の宣傳と密接に結付けられなければ、之だけでは斯くまで民衆に對して、宣傳的效果をあげる事が出来なかつたであらう。戰争當初の愛國的感激と勝利に對する不動の信仰がまだ消失しなかつた間は、勞働階級の大部分を含む國民の過半数は、領土獲得と賠償々金とに決して不賛成ではなかつたが、光榮ある戰争の終局が疑はれて來だして、困難や飢餓窮乏がだん／＼大きくなり、平和を求め心、あらゆる他の考へを押し退ける様になつた時、一樣に各階級の人たちの心に、領土獲得、損害賠償を思ふ興味は失は

れた。そこで過激派社會主義指導者の活動が、始まつたのである。既に一九一四年末から一五年を迎へた頃に、彼等は平和の宣傳を、國家主義思想に對する優秀な武器と認めた。この宣傳は、獨逸政府が形式上棄權の宣言をしさへすれば、戦争は終ると云ふ主張に依つて、一層力強くなつた。然し斯る宣言は、宰相の同意を得べくもなかつた。何故なれば彼には敵が公然、明瞭にエルサス、ロートリンゲンの合併計劃を宣言しての間は、かゝる棄權宣言は時宜に適しないと思はれたからであつた。又彼は戦争終局の條件を一定の方向に定めて了ふ事は、之まで骨折つて支へてきた國內の一致及平和を、根本から破壊する恐れがあると思つて居た。彼は國家主義者の『ある空想家及學理的征服家の誇張』を喜ばなかつたが、同時に崩壊した國際主義を回復しやうとする考への下に企圖された、社會民主黨の領土獲得、或は他の國民、國土の一部を獨逸國に併合しやうとする事に對しての反對宣傳は、又彼が喜ばなかつた所である。左右兩翼から迫まれて彼は中央の航路をとつた、五月二拾八日講和問題の議會に於ける第一回の大討論に於て彼は宣言した。『何れの敵も——單獨でも聯盟でも——再び戦を取行することが出来ない様に、あらゆる可能な眞實な、保證と安定とが設けられなければならない。』又シャイデマン、ハーゼと内密の意見交換をなした時に、彼は汎獨逸主義者の掲げる戦争終局條件を無意義であると斷言して、斯る條件目的を實現させ様とは思は

ない。むしろ彼はベルギーに對する産業的、軍事的性質の協約、エルサス、ロートリンゲンの國境規定だけで満足しやうと思ふと云つた。

彼の態度は、右翼の黨派でも社會民主黨でも、信任を收める事が出来なかつた。兩翼は共に一九一五年の夏以來、國內の平和に對する考へを棄て、講和及併合問題に關し、政府の指導を拒絶した。

多數派社會主義者と少數派のそれとは、政府に對する態度に於て、一致を見出さうと試みた。然し意見の相違は、兩者を再び結合させる事は不可能である事を明瞭にした。多數派は、獨逸宰相に對して決定的な闘争意志を持つて居なかつた、この派の人たちは、宰相を結局右翼諸黨派の考へる様な併合政治家とは考へず、寧ろ時がくれば、シャイデマンの掲げた條件に基づいた平和を、結ぶことに同意してくれると信じて居た。然し少數派にとつては、戦の終局條件などは意味あるものでなかつた。彼等はたゞ政府を弱める事に終始した。この考へから、彼等は平和の宣傳も、併合反對の宣傳も解釋して居た。彼等は、極めて無遠慮に、獨逸政府が誠意を缺いで居ると云ひ、又講和談判が成立しないのは主として獨逸政府が併合意思を持つて居るからだと主張した。少數派の彼等はまた多數派を、政府に對しては表面の戦をやつて居るが、實は政府を援助して、自らは併合主義の

『秘密の信仰者』であると非難した。

然し、少くとも表面上だけは、その後モウ一度、社会民主党が全黨一致で講和問題及戦争終局條件に關して、政府に反対の戰闘的態度をとる事ができた。一九一五年八月十六日、黨はその態度を綱領的に次の如くに定めた。『エルサス、ロートリンゲンを含む獨逸國の政治的獨立、その不可侵的保障、及獨逸の産業發展が制限されないこと、これを講和の根底にしなければならぬ。』更にオーストリー、ハンガリー及トルコの國土保全が、要求された。他方では、異國民の領域を併合する計劃は『近視的侵略政治家』のプランだとして却けられて、ベルギーの復興、國際仲裁裁判所の設立が同じく要求された。

黨内の、此の假面的平和は、間もなく崩れた。一九一五年から一六年に移る頃には、多數派と少數派とは再び激しい争ひをした。一九一六年の春からは、少數派は多數派を『併合主義者』と眞向からあぶせた。斯る耐へ難い緊張は、遂に黨の分裂をもたらし、それに依つて必然な解決を見出した。

自由産業組合の諸運動

自由産業組合は、社会黨の分離現象に觸れる所が、極めて少かつた。自由産業組合は、その存在のために、苦闘しなければならなかつた。一九一四年七月、諸産業組合の總會員數は、二百五十萬であつたが、一九一六年十二月には百萬に足らない數に減じた。従つて収入も之に準じて減少して會の組織も極めて縮小しなければならなかつた。戦争が永延いて、民衆の不平が大きくなるに従つて、八月二日の立場を固持するが益々困難となつた。それは産業組合が、本來の使命である經濟闘争を棄て、戰時社会救助に没頭することを困難ならしめた。

戰時社会救助では、産業組合は極めて手廣い、有效な活動をした。その第一は、失業者救助であつた。失業者の數は一九一四年八月には、男子人口の二・二七プロセントまでになつた。産業組合は、國家が失業者補助を引受けるやう努力したが、然しその結果はたゞ失業者救助が主として市町村の負擔になつたに過ぎなかつた。ところが數ヶ月の後には、この失業者問題の危機は通り越した、即ち戰時産業經營組織の巨大な要求が、間もなくあらん限りの勞働力を吸収したからである。

これが無くなつた代りに、産業組合は他の色々な世話をやらなければならなかつた。特に従軍者の家族の救助、戰病傷者の救助及食料缺乏の緩和等の仕事が、これであつた。また賃金關係を改良

することにも、組合は絶へず努力をして居つた。組合はこれらに對して、一部分は自家の費用から援助して、又他方では政府と交渉をする、その仲介者の勞をとつた。而して屢々大なる成功を収めたが、就中成功したものは、軍需品工場の賃金規定、家庭勞働の最小限賃金決定の時に於て、あつて、然し産業組合はこれらの活動と共に、政府の施政を批評する事を止めなかつた。色々な訴への寄合場所の様な産業組合は、専門職工の兵役免除、新兵教育、政治的理由に依る賜暇拒絶、汎獨逸主義の煽動、祖國黨に對する偏頗的好意等、あらゆる方面の事實上の或は單に噂の弊害を、絶えず當局官憲に注意した。軍隊の食料炊事問題に關する交渉は、ながい一章をつくつた。食物に關する下士卒と將校の差別、酒保業務の亂脈、食料買入れの際の偏頗な將校の特權、この種類の多くの不平は、産業組合に抗議の動機を與へた。少年團を組織して、將來少年を軍役に耐へ得る様に組織的に體育を實施しやうとする、プロシヤ政府の努力に對して、産業組合は好戰的思想の養成だとして之に反對した。

産業組合がした仕事の内、最も重大視すべきものは、使用人と被使用人との仲介的役目を行つた事である。組合は、既に戰爭の當初、この方面に互つて、熱心な働きをなしたのであるが、此の活動は、一九一六年以來、『祖國補助勤務令の發布』に依つて非常に高まつた。産業組合及び社會主義

黨は、補助役義務を有する者が、其の仕事、及其の場所を選ぶ個人的自由を、ある程度まで制限されて居る此の法令に就て論議して、何よりも先づ此等勞働者の權利を確保しなければならぬとした。そしてこの事は成功した。即ち強制的な機能を持つた勞働者委員會、使用人及び被使用人兩側から選出された委員から成立した、各員同等の權利を有する仲裁委員會が組織されて、軍用工場、國用工場、軍用免除の作業所及農業が、一切この委員會の支配をうけた。

この組織は、當時の事狀から云へば、産業組合的思想の勝利を意味するもので、事實上勝利として認められ祝賀された。産業組合はこの活動のために、遂に活躍の廣い範圍を見出した。今や彼等の地位は、法律で保障されてゐる故に力強いものとなつた。法律は、武器、軍用具の工場内に起るストライキを禁止しない。又最も鋭き闘争方法の適用を止めなかつたから、産業組合は行動の自由を有して居た。然し彼等が、闘争方法を、一般的に云つて適度に使用したと云ふ事は、大いに認めてやらなければならぬ。

産業組合は又政治的運動に對して、いつまでも棄權して居なかつた。然し彼等の政治的運動の範圍は、極めて地味な小範圍に限られて居た。内政では、彼等は戒嚴令で甚しく制限された結社、集會の權利、『同盟結束の權利』のために、熱心に戰つた。對外政策では、彼等は講和的運動を援助し

た。然し大體から云ふと、彼等は、政治を黨に一任した。たゞ八月四日の立場を援助する際に、強大な力を持ち出すだけで、彼等は満足した。

然し産業組合にも過激的潮流が強くなつて行く事は、早晚免れ難いことであつた。此過激的分子は、その政治的見解が獨立社會主義者の左翼に傾いて居たりヒヤルド・ミユラー、エルザイン・バルト、パウル・エツカルト等を、その有力な指導者に仰いだ。これらの人たちは、革命の發展に對して重大な意義を有した。

社會黨の紛争が、軍隊に與へた影響

戦争の初年、軍隊内には社會民主黨の影響がなかつた。この頃は、マルクス主義もまだ何等直接には實際的な影響を、軍隊に及ぼして居なかつた。社會主義のあらゆる分派に屬する主義者が、幾百千と軍隊内に這入つたが、然し是等社會民主主義捧持者も、大部分は戰場心理に眩惑され、マルクス主義の國際的、革命的の性質を其意識の裡から忘れて了つた。勿論國際主義固持者の少數も残つて居たことはいふ迄もない。一九一四年及一五年に、極左社會主義の連中に依つて、國際主義的

平和的革命宣傳が既に企てられたが、ハーゼ一派は當時尙差し控へた態度をとつて居た。宣傳は、口から口へ、或は小さい宣傳ビラ、煽動的な社會主義の書物等に依つて、塹壕内及後方の陣營に秘かに分布された。然し兵卒の大多數に、重大な影響を及ぼしたと云ふほどの證據は擧つて居ない。宣傳の影響は軍隊の巨大な組織の中に消失した。それは指導の位置にあつた軍隊當局の耳目に留らないで、大部分消えて了つた。が一九一六年の春夏、フアルケンハインの參謀長時代が終りに近づいた頃、軍事總統帥部は初めて軍隊内の經過に注意しだした。

斯う云ふ状態の戦争の初年に、マルクス主義の直接、實際的な問題でない事を、將校團及び指導當局たちが、根本的に研究すべきさし逼つた理由がなかつた。たゞ注意警戒して、怠らず軍隊の士氣を観察して居た。これだけで十分であると人々は考へた。マルクス主義の破壊的感化に對して、積極的に對抗しやうと云ふ考へは、一九一七年になつて始めて起つた。人々は、國家存亡に關係ある戦争を行つて居る國民の健全な精神には、たゞ緊急な問題として祖國守備の考へがあるだけだと信じて居た。數百人の次いで數千人の、後に至つて數萬人の獨逸國民が、後方で或は戰鬪部隊内で晝夜を分たず軍隊の力を破壊し、規律を攪亂しやうと企だて、居た恐ろしい事實は、革命の焰が血の如く赤く燃えた時になつて、初めて將校團の大部分に意識された。彼等は時折り、故郷に於ける

諍、政争、ストライキ、社會黨の會議等をいくらか聞いて居たが、然し彼等は戰士として斯る事に注意して居なかつた。それは政府、故郷に於ける軍事當局の處置すべき問題で、戦地にある將校達はたゞ部隊の世話だけすればよかつた。そして野戦軍の規律は整然として居て、軍隊はマルクス主義の免疫者である觀があつた。

軍事當局は斯る考への下に、大部分社會主義的労働者出の兵士から成立して居る軍隊を、マルクス主義の國際思想から感化されない、特別な策を講じないで、自然的成行きに一任して居た。當局は初めから人爲的手段を何等講じなかつた。この方法は、疑もなく最も健全な、最も自然に適つた醫療の方法であつた。然しこれだけで、何時までも事足りて居るか否かは、時が經過して將來がこれを解釋した。

獨逸社會民主黨の分裂

はしがき

事状から云へば、三つの新らしい黨が出来る内面的の理由が、十分存在して居ただけけれども、實際は、多數社會民主黨と獨立社會民主黨の少數派との二つに分裂した。過激派は戦争中まだ黨を形成するだけの力がなかつた。従つて彼等は、表面には獨立社會民主黨の黨員であつた。その原因は色々あるが、特に團體を組織する、黨略的才能を十分に持つた指導者に缺けて居たからである。リーブクネヒトは宣傳及び民衆の狂熱を煽動する方面では特異の才能を持つて居たが、團體の組織黨略的政治の方面から云へば零であつた。ロザ・ルクセンブルグも黨の首領としては、適任でなかつた。彼等は極めてよい頭の持主であつたが——過激派が極めて明快で熾烈な、そして進化した綱

領を立てることの出来たのは、主として彼等のおかげである——然し實際の方面では、彼等は指導的役目を演じた事はなかつた。

「獨逸獨立社會民主黨」、或は分裂前自ら公然叫んで居た「社會主義勞働總同盟」の建設者は、カウツキーとハーゼであつた。そして兩人の役目は、明瞭に分けられて居た。カウツキーは精神的指導者の大理論家であり、ハーゼはレーヂブールに依つて輔佐されて、實際家、黨略政治家、組織者として活動した。

カウツキー一派が、右翼から分れた意見の相違は、左翼が、右翼に對するそれより大きくはなかつた。がこの左翼の兩派が、右翼に連合するに到つたのは、單にその策戰的理由に依るのである。

然しこの兩者は唯一定の間ばかり、戰爭の繼續しての間ばかり、一時的に同盟して居るだけで、兩者の間には永遠の融合と云ふものはなかつた。彼等自身も、何時か終局の總勘定をする日が來ると覺悟して居た。が、當分意見の相違は、かの『國家社會主義的多數派の裏切』に對する戰が——これは左右兩派にとつて共同の主なる事であつた——極めて協同的に、同一方向に進展して居たから彼等は看過した。最も手近の最も重要な事は、右翼の一部分にある左右兩派の共同の大敵を滅ぼすにあつた。

黨代議士會の分裂

黨の瓦解は、議會内の黨代議士會の分裂から、その幕をあけた。これの近因は、一九一六年五月二十四日の緊急案の採決であつた。少數派の首領であるハーゼは、其前の代議士會で多數派の了解を得る事なしに、帝國議會に於て發言を求め、政府に對して極めて峻烈な攻撃の矢を發つた。多數派は斯る遣方は、たゞに黨の規律を破るばかりでなく、同時に約束を無視するものとして、少數派から、黨代議士會に所屬する事に依つて得られる權利を剝奪した。そこで少數派は『社會主義勞働總同盟』をつつて、新しい黨代議士會を形成した。

多數派が支配的勢力を持つて居た黨の諸裁判機關が、この出來事を審査した。そして黨の委員會は、少數派の態度を鋭い調子で否認した。それから黨の幹部に、黨の動搖分離が擴がらない様に、必要な方法を講ずる事を委任した。そこで幹部首領ハーゼはその任を辭した。これより先き一五一年十二月、彼は既に議會内の黨代議士會の座長を退いて居たのである。

一九一六年の夏は、陰鬱な、然し緊張した斯る状態で過ぎた。屢々激しい衝突があつた。黨の幹

部は益々激しくなつてくる少数派の宣傳を抑へやうと努力した。就中戦争當初から少数派の肩を特つたフォール・ウエルツ紙に、彼等の勢力を確實に植付けた。又地方の少数派的の機關紙を、出来るだけ抑制した。かゝる障害があつたに拘らず、少数派は黨から脱出する事を出来るだけ延ばして居た。それには重大な理由があつた。と云ふのは彼等は黨に所屬して居る事から生ずる、經濟的及び團體的利益を放棄する事が出来なかつたからである。黨が分裂した場合は、多数派が黨の組織を全部支配して、利益を取上げて了ふ事は自明であつた。これと反對に、多数派では、その結果に起る不利益、危険を顧みず、分離を主張するものが多くなつて來た。

一九一六年から一九一七年まで

黨の諸裁判機關は、如何に態度を定めるかに付て長い間迷つて居たが、遂に彼等は一つの血路を見つけた。『益々激しくなつてくる動搖を防ぎ』過去十年間苦戦に耐へてきた舊來の黨の組織を傷けずに、この大颶風の様な戦争のなかを、都合よく黨を導くためにといふ理由で、黨議會とはしないで、黨所屬機關の全國大會を招集する手筈にした。此大會は戦争中に開かれた四つの大會の一つ

で、是等の大會で社會民主黨内の論争は解決せられ、又同時に戦争の終るまで、黨内の三派の行くべき道が、明瞭にされたのである。大會は一九一六年九月二十一日から二十三日まで、三日間ベルリンで開かれた。

大會でシャイデマンは、戦時に於ける多数派の態度を辯護した。戦費案を是非拒否しなければならぬと云ふ黨大會、黨會議の決議は、今日迄何處にも見つけられないと云つて、彼は多数派が國土守備に賛成した事を辯明した。亦かゝる決議が存在して居たにしても、現在かゝる決議が實施されるかどうか、疑問であると彼は云つた。

シャイデマンは云つた。『場合を問はず、領土併合を難する事に於ては、多数派も亦他の黨派と同じである。此非難から生ずるあらゆる正當なる、道理ある攻撃に多数派が反抗して、ベートマンホルヴェヒの政府を後援する其の理由は、現在の政府が現下の状態では比較的缺點の少い收拾者であると思ふからである。』

エーベルトはシャイデマンに賛同附加して、『獨逸社會民主黨は、國際主義の破壊された團體組織を回復するために全力を盡した。この企圖が失敗したのは、外國の諸社會黨の拒否的態度に依る』と云つた。

社會主義勞働總同盟の立場は、ハーゼに依つて辯護された。彼は多數派に對して非難の聲をあげ彼等はプロレタリアの利害を根本的に閑却したものであると言ひ、在來の實行方法を全く捨てよと要求した。『今や戦争に對して主なる罪を負ふべきものは、獨逸政府である事は疑ふ余地がない。従つて戦費案を拒否して、我々はその政策を拒絶しなければならぬ』。ハーゼは更に云つた。『戦争終局の條件、戦争の結果に就て、社會主義勞働總同盟の立場は、獨逸の敗北をも亦他の一國の勝利をも望まないものである。總同盟は相互理解の道を開くべきを要求する。どんな講和が來るであらうとも、全く同じである。兎に角戦争を止めさせなければならぬ。とは勞働者の間に屢々聞く所であるが、然し我々は決してどんな價を拂つてもよいから、平和を欲すると云ふのでない。吾々の欲するのは、この戦争繼續のために如何なる價をも拂はないことである。』

カウツキー及ベルンシュタインは、戦争に對する獨逸の罪、尠くとも他國と同罪なることを指摘した。『獨逸政府は明瞭な、併合の危険、仲裁裁判及軍備制限に對して同意を發表しないから、講和が長びくのである、これに對しても第一に政府は責任を負ふべきである。』

シュトレーベルは宣言した。『獨逸の勝利に就ての多數派の空想が満されなかつた事は、嘗に獨逸ばかりでなく、全世界の勞働階級にとつてよいことであつた。』

黨の統一を危くすると云ふ非難に對して、ハーゼは、『我々は黨の統一を欲する。然し帝國主義に公然或は秘かに讓歩して初めて得られる黨の統一は、決して欲くない。吾々は階級闘争觀念が弱められる様な黨を欲しない。吾々は黨の統一を欲するが、それは社會民主的綱領を確實に保證した立場を持つ黨に就てである。吾々はインタナショナル社會主義者として、黨の統一を欲する。』と云つた。

インタナショナル集團(スバルタクス)の代表者ケーテ、ダウンカーは、ユニウス小冊子の意味に於て、過激派の立場を述べた。『八月四日、黨が降服した、かの國家主義の理想に對して、吾々は國際主義の理想を對立させるものである。戦費案を拒否せよ、——吾々の主張の基礎は、國際主義的思想及階級闘争の思想である。』

遂に多數派の意見通りに、その投票に依つて、一つの決議がなされた。この決議で、國家防備に對する賛成が言明された。他面、戒嚴令の適用に對して抗議され、また憲政及び行政を民衆化すること、特にプロシヤに普通選舉權が與へられることが要求された。かゝる討論や決議が、内部の平和を回復するに適當な策でなくて、寧ろ相和することの出來ない溝を、一層明瞭に表はしたことは疑ひもなく明らかである。従つて大會は全く失敗であつたと認めなければならぬ。

斯う云ふ状態で、今や反対派の諸派が、多数派に對し、闘争同盟をつくるのが適當ではあるまいか、また如何なる程度まで相互に信賴することが出来るか、これを確實にすることが必要であつた。一九一七年一月七日、反対派の代表者が、ベルリンに會合して、共同作戰を採ることが可能であるかどうかを相談した。その參會者百五十七人のうち、三十五名は過激派であつた。數ヶ月後に反対派がつくつた『獨逸獨立社會民主黨』の前奏とも見るべき、此の意義ある大會は、初めは順調に行くまいと豫想された。スバルタクスの連中は、人數が少かつたから、同盟に際して下まはりの役目を演じなければならぬと大いに憂慮して居た。だから彼等は初めから、あらゆる抑壓的な試みに對して、反抗する決心である事を高調した。スバルタクスの代表者エルンスト・マイヤーは、就中國家防備に關する見解の根深い相違を指摘して、『我々の態度を、戦局の如何に適應さすことは出来ない。吾々は帝國主義の戦争がある時代に於ては、國家を防備する義務を拒否する。これらの戦争は侵略を目的とするからである。これらの目的が貫徹されるかどうかは、吾々が賛成するかどうかの事を決定する問題でない。これに關して、社會主義労働總同盟は、一度も明瞭な態度をとらなかつた。總同盟は常にこれに關しては逃げ道を張つた』と云つた。

同じく過激派に屬して居るミニスターは、總同盟の目的に就て、精密な證明を求めた。『一體總

同盟は如何なる綱領を奉じて居るものであるか。何人もその目的を知る者はない。思ふに、總同盟は何等の目的をも持つて居ないからである。彼等は鉛の状態にある。たゞ多数派に對して、攻撃のまねばかりをして居る。だから彼等は、シャイデマンやエーベルトの代りに、レーデブルやデイトマンが表面に乗り出せば、満足するであらう。』ミニスターは斯く云つた。之れに對して、ハーゼは辯護した。『總同盟は極めて明瞭な綱領を持つて居る。舊獨逸社會民主黨及國際主義黨の綱領がそれだ。一體スバルタクスの連中は、何の權利があつて、吾々に斯る非難を加るのであるか。一體彼等がそれに依つて戦争を終らしめると信ずる業績が何處にあるか。戦地でこの業績を敢行したスバルタクスの團員を、まだ一度も見ない。我々は兵役を忌避したトルストイヤンを知つて居るけれども、かゝる事をしたスバルタクスの連中を知らない。』

バイエルンの獨立派の指導者であるアイスナーは、此の痛切な詰問の弓を一層強く張りしぼつて云つた。『スバルタクスの徒は、その目的とする所を明瞭に云ふべきである。軍隊のストライキを目的とするのであるか。或は従前通り兵役の強制義務と、黨が奉じてきた政策との差異を、其まゝ放置しやうとするのであるか。』

採決になつて、總同盟が提出した綱領が、總同盟の投票で採用された。この綱領は本質的には社

會民主黨の古い原則に立歸ることを要求し、その他の點では黨の多數派に真正面の戦を掲げた。

スバルタクスを壓迫して、否決された過激派の綱領も、矢張り黨内に留まることを表示した。その理由は、黨内に留まつて、『事毎に多數派の政策の裏をかき、之に反對するために……又プロレタリアの反國家主義的な、階級闘争を是認する新兵を、召集する場所に黨を利用するために、』と云ふにあつた。此綱領では、政府の外に議會も亦現狀に責任があるものとした。『民衆を單に政府にばかりでなく、帝國議會に對しても煽動しなければならぬ。これまで政府に親切に説き聞かせて、ブルジョア外交に訴へるよりしなかつた議會の平和的な行動は、之を放棄しなければならぬ。これらの代りに、政治活動の重點は、民主の自重的態度及活動に置かれねばならぬ。』

兩方の綱領には、大なる相違があり、その合同が不可能なるに拘らず、彼等は相互に密接に連絡を保つて、能ふ限りは共同的動作を採らうと決議した。カウツキーの宣言書にも、兩派はそろつて賛同した。この宣言書には、『全交戰國の社會主義諸黨派が、各自の政府に逼つて、その戰爭終局の目的を究明する時期が到來したと、吾々は信ずる。是等の戰爭終局の目的は、交戰國の何れなりとても、屈辱或は存在條件を傷害するものであつてはならない。社會主義者は、右の目的以外に戰爭を繼續するあらゆる黨派に挑戰する。社會主義の諸黨は、政府にこれらの事を示さなければなら

ない時がきたと思ふ、……吾々は、その他の住民の同意がない國土境界の、あらゆる變更を拒絶する。』

黨の分裂

『黨内に留まつて、事毎に多數派の政策の裏をかき、これに反對する』と云ふ少數反對派の企圖は成功しなかつた。多數派は直ちに逆襲を行つた。一九一七年一月十六日、反對派の全國大會を、黨に對する特殊團體の建設とみなすべきものであり、従つて分離の條件となるものであると黨の委員會は宣言した。『今や黨に對して忠實なる仕事は、この不正直な兩股的行動を終滅せしむるにある』とまで云はれた。この宣言に依つて、到る處反對派は悉く、『黨外の者』と宣告された。反對派が過半數であつた所は、多數派に依つて新しい團體組織が企てられた。

一九一七年夏の獨逸獨立社會民主黨の結黨

反對派は困惑を避けるために、直ちに對策を講じなければならなかつた。彼等は全力を傾倒して反對派の新團體を組織し、發展さそうと企てた。しかし最も重大な事は、新しい黨を建設することのやうに思はれた。この結黨の基礎は、一九一七年四月六日、ゴータに開かれた大會で定められた。

此の獨逸獨立社會民主黨の建設の際に、社會主義勞働總同盟とスバルタクスとは、重大な論争を交はした。スバルタクスの徒は、彼等に對して多數である獨立派の不信任を、憶面もなく言ひ表した。彼等はどんなことがあつても、その綱領及宣傳を放棄する事は出来ないと宣言した。

ハーゼは之に答へた。『新黨の、最後の決定的綱領は、戰爭の經驗が終つた後、また黨の同志が戦地から歸つてきた後、これを定めることが出来る。當分は暫く現在の實際的状況に適合すればよい。従つて黨内の如何なる團體も、最早や獨立行動をとることを許されない。』

如何なる作戦をとるべきか、之に就てレーデプーは、總同盟の立場を明らかにした。『戦は大衆運動に依つて、又議會の演壇をかりてもなさなければならぬ。但し大衆運動は細心の態度を以て取扱はなければならぬ。之は人爲的には出来ない。かゝる大衆運動は必然な時代の惱みから生まれ出るものであつて、場合に依つてはその指導者さへ無視して進展するものである。現在の獨逸は

それである、準備時代では議會的活動は政治的鬭争の極めて重大な一で、否その最も重要な手段である。議會政治は、現在では議員自らの罪に依つて、甚しく不信用に陥つて居るが、それにしても右の事は尙必要である。』

國家防備、戦費案拒否の問題で、レーデプーは、インターナショナル集團が代表する『無抵抗主義』は、全く社會民主主義的でないと指摘した。此無抵抗主義は、原始キリスト教から起つたもので、近頃ではトルストイに依つて説かれたのである。革命的社會民主主義にも亦戦費案を賛成しなければならぬ時があり得る即ちそれは、眞實の防備戦の場合で、政府と國民とが全く同一意見の時であると説いた。

スバルタクスのヘツケルトは之に反對した。『一九一四年八月四日前の舊黨の古い綱領や決議は最早や今後の活動の基礎となすことは出来ない。エルフルトの綱領は社會主義時代以前にできたもので、その後多くの事が明瞭になり、従つて綱領は時代遅れの非難は免れない。吾々はもはや生成の時代に彷徨しては居ない。吾々は新らしい能力ある黨派とならなければならぬ。何時までも批評ばかりして居るべきでない。須らくエンゲルスの言つたやうに、世界歴史を變化させなければならぬ。』更に論じて、『同じ目的を持つて居る、たゞ二つの異つた立場から物を觀察して居るのであ

るから、容易に或る所まで一緒に行けるとカウツキーは云ふが、恠る考に我々は落ち付いてゐられない。帝國主義、國家防備、議會政治、民衆運動と云ふ様な大問題は、獨立派とスバルタクス團とは、見解が甚しく異なるから、一致は極めて困難であらう。カカツキーは實に間違つた見解の代表者である。彼の罪はシャイデマンと同じである。國家防備に關する彼の理論は、全く役に立たないことを表はした。彼のマルクス、エンゲルスの説の解釋は間違ひである。」と云つた。

議會主義の問題に就て、ヘツケルトは更に言葉を續けた。「勞働運動は子供部屋の様なもので、代議士は其處で襍母の役目を演ずるものであると考へられるのは吾々の欲しない所だ。吾々は議會内でも大衆運動を實現しやうと望んで居る。従つて従來の様な國內の革命思想を防過する様な事は止めねばならぬ。」

こゝにも相反する二派の根本的相違が、明瞭に言ひ表された。然し、結局多數派社會黨に對して共に戦ふと云ふ實際的利害が、あらゆる思想の相違を除外させた。スバルタクス團は、時がたつにつれて、獨立派を過激化する事が出来るであらうと期待して居た。これに反して、獨立派では此の危険な隣人を、多少疎遠な關係でも、聯絡して置いて、それが獨立に發展する事を能ふかぎり妨止することが、此場合最も採るべき處置であると考へた。かくてカウツキーの起草した宣言書は

極左少數派に依つても亦賛成された。この宣言書には内政の改革の外に、相互理解ある講和、國際的軍備制限、義務的仲裁々判に對するカウツキー、ハーゼ等の要求が高唱されて居た。これだけの事で當分満足され、これ以上の事は、相肖ない兄弟の同盟は、引受けることを欲しなかつた。即ちその他の事は、その時その時に應じて、交渉、相談することゝして保留された。

時が過ぎて、過激派の内部に又分裂がきた。右翼の『インターナショナル集團』は、スバルタクス團と同意義で、リーブクネヒト、ローザ・ルクセンブルグ、メーリング、ヨギツセスが其の指導者であつた。左翼に屬する『獨逸國際社會主義者』及『ブレイメン左翼過激派』は、ラデツクとエリアン・ボルハルトとが、夫々その指導者であつた。スバルタクス團はプロレタリア階級の執行權能を、選舉に依るプロレタリアの國民的代表機關の手に委ねやうと欲したが、ブレイメン左翼過激派は、かゝる事すらも放棄できると考へた。彼等の意見では、プロレタリアの意思は全く直接に、何等の仲介なしに民衆から發露するもので、民衆運動に依つて貫徹されるものであるとなした。

一九一七年三月及四月、全部の左翼過激派から一政黨を設けて、獨立派の優勢な地位を壓倒しやうと欲したが、その企ては失敗であつた。ブレイメン派はウー・エス・ペー・デーとの同盟に加はることを拒絶して、獨立の一小黨として留まつた。

既に以前から期待されて居た事であり、到底避けることが出来なくなつた在來の黨の組織の破滅が、いよ／＼事實となつて來た。多數派内部では、彼等が戦争中採つた作戦を社會に對して辯明し外面いかに一致した様に見へても、尙免れなかつた意見の相違からくる緊張を解決しやうとする要求が、彼等のうちに起つた。

この目的のために、一九一七年十月十四日から二十日に亘る一週間ウルツブルグで、多數派社會黨の總會が開かれた。討論の中心となつたものは、多數派の左翼に屬して居た代議士ホツホの動議であつた。ホツホは、『當代議士會は現在の政府に對しても、或は將來の如何なる政府に對しても、それが若し多數派社會主義者の講和條件及び必要な憲法改正に同意しない場合、又はその行動が宣言と一致しない場合は、何等の議案にも賛成しない。』と云ふ提議をした。『吾々は熟慮の結果八月四日の戦費案に同意した。然し吾々は、全戦争中、常に戦争に賛成しなければならぬと云ふ義務を有しない。今や國土安全の目的が既に達成せられて、講和は可能でないかと云ふ事が反省される時がきた、何れの國もまだこれ以上侵略をする企圖を有して居ない。戦争は行き詰まつた。刻下なすべき事は、この戦争を、何の益も何の目的もないものとして終局させる事である。』と續けた。

多數派の左翼の人々は、ホツホに反抗して宣言した。『祖國に味方するか、或はそれに反對するか、この二つの明瞭な態度しかこの場合あり得ない。吾々は民衆間の氣勢を顧慮して、前後たへず動搖する政策を採つてはならない。今は戦費案を結局拒否すべき時ではない、祖國は依然として最大の危機に瀕して居る。』レンシュは、勉めて以前の平和時代の戦術を退けた。彼は、『事實、以前の戦術と現在の戦時政策との間には、解くことの出来ない矛盾が、存して居る。吾々は實際、平和時代に言明した事を実現しなかつた。今や吾々は意識的に、既に始めた新しい方策を、徹底的に究めなければならぬ』と云つた。シャイデマンは、之れに附加して、『吾々は、都合のよい政府反對派の地位に留まる贅澤を、戦争後でも最早や實行することは許されない。』と述べた。

是等の意見の發表は、主なる黨の指導者が、實際の政策を行ふに就て、何等特別の影響を及ぼさなかつた。黨總會は、議會内の黨代議士の多數が採つた政策を是認した。黨總會は代議士會が従前の如く、今後も戦費案賛成に關する態度を、それが國土防備に必要であるか否かに依つて、決定する義務があると決議した。これで將來戦費案賛否如何が、何等の原則上の拘束をうける事がなくなつた。黨は依然として事狀に應じて此の行動の自由を保留する事となつた。

獨逸國外の國際社會主義の發展

勞働國際社會主義黨

八月四日、難破した國際社會主義の船は、異境の空で波に任せて漂つた。甲板では、喧嘩、爭論が絶へなかつた。メイン・マストの赤い旗は、無數の旗の切れに代つて、風に吹かれて居た。

獨逸國外には、二つの主なる派ができた。一つは國家社會主義とも云ふべき、各自國と行動を共にするもの、他はマルクス主義の國際的敎説を固守するもの。交戰國の何れ側に於ても、愛國者に早變りした社會主義者は、勞働國際社會主義黨を骨抜きにした。それにも拘らず、彼等は現在をそのまま維持しやうとした。

ブラッセルにあつた社會主義事務局は、戰爭になつて間もなく、アムステルダムに移つた。この

事務局が、既に舊國際社會主義黨の事務を、引續いて取扱つて居ると發表した。ベルギーの陸軍大臣であるヴァンダー・ヴェルデは、開戦後も矢張り事務局長の椅子に居たが、彼れがどんな役目を國際的に行つたか、それは獨逸及獨逸社會民主黨に對する敵意にみちた宣言、偏頗な國家主義からの協商諸國に對する好意ある態度が、明瞭に説明して居る。一九一五年二月の、ロンドンで開かれた大會では、協商諸國の社會主義者は、事務局の援助の下で、獨逸を歐洲の自由を害するものと叫んだ。戰爭の目的は、獨逸及オーストリー・ハンガリーから併合された諸國民を解放するにあると云つた。この言葉に依つて、この派の人たちが、エルサス、ロートリンゲン問題にどんな態度を持つた居たか、明瞭になつた。獨逸の少數派社會主義者は、各國民の自決權から、無併合、無賠償の平和を提議した。エルサス、ロートリンゲン問題に就ても、獨逸側になるか、フランスの國籍にいかるか、その住民の意思に依つて決定する自決權を要求した。然し彼等は少數派と違つて、エルサス、ロートリンゲン問題に關して、フランスの要求は、併合でなくて、單なる復歸であると解釋した。この様な偏頗な態度を以て、八月四日の疎隔は、仲直りする見込が絶たれた。

國際社會主義黨の態度に對して、國家主義の立場を採つて居る獨逸、オーストリーの社會黨は、堅く結合した。彼等は比較的穩和であつたが、かゝる穩和な態度は、獨逸軍に侵入され、狂熱的

興奮状態にあるフランス、ベルギーの人たちには、到底理解されるものでなかつた。

ストックホルムの大會

相互反対せる兩團體の間が、既早や結合の見込なしと見られた時、スエーデン人ブランディング及びオランダ人トレンストラが、結合の橋渡しをしようとした。ブランディングは、初めから偏頗に、協商側に味方し、其仲介は極めて有害であつた。橋渡しは失敗に終つた。協商側社會主義者の主張が、『獨逸社會主義者は、其政府と手を切つて悔悟し、獨逸の罪を引受けると言明するまで』彼等とは共に語らないと云ふからであつた。一九一七年春のロシア革命は、各國の社會運動に大きな影響を與へ、初めて共同的な大會の開かれる豫想がついた。そこでブランディングは國際社會主義黨事務局の援助に依つて、コッペンハーゲンに大會を招集した。緊張と期待のうちに、大會は同年夏に開かれた。然し協商諸國の代表者たちが出席しなかつたから、大會は手足のないものとなつた。協商諸國の政府は、その代表者たちに、旅券の下附を拒絶したのである。かゝる譯で、戦ひをしてゐる國と國との社會主義者は、遂に直接意見を交換することが出来なかつた。

仕方がないので、諮問表を廻附して、協商側社會主義者に、その意見を求めてみた。こんな風にして、各國の社會主義者の意見を募つた。諮問表は、講和に對する平等な諸條件、講和談判に當つて如何に國際主義黨及社會主義諸黨は活動すべきか、世界戦争の如き事を再び繰返さない様な國際的協定をつくること、等から成立して居た。

既に第一點で、兩派の橋渡しの不可能が、實證された。獨逸、オーストリーの社會主義者たちが主張した無併合無賠償の平和は、協商諸國社會主義者の理論上の賛成を得たが、實際上は鋭く反對された。彼等は、戦争の責任は單獨に負ふべきもので、従つて獨逸に十分な賠償の負擔を要求した民族自決に基づいて、オーストリー、ハンガリーの民族自決を希望し、また獨逸から邊境諸國を獨立させようと主張した。彼等にとつて、同じ事を彼等各自の國に適用さす事は、勿論大の不賛成であつた。

ストックホルム大會には、國家主義的立場をとつて居ない社會主義者も亦招待されて居た。然し彼等の参加は、たゞ混亂を一層大きくするだけであつた。獨逸の少數派社會主義者（國家主義の立場を採つて居ない派）は、カウツキーの思想から出た要求を、悉く並べた。彼等はオーストリー、ハンガリー王國を極度に危険に落ちいらしめ、獨逸の國家的利益を無視する、協商諸國の社會主義

者の主張する併合的要求には、彼等としては餘程な程度にまで、同意を表したのである。その宣言書には、『……我々は、ポーランド國民の獨立を要求する事に、非常な理解を有して居る。ポーランドの獨立を戦局で決定し、露領ポーランド人には自決を許し、反對にプロシヤ、オーストリー領ポーランド人には拒絶する、この態度は民族自決の原則に矛盾するものである。若しこの手段のためには戦争を繼續するならば、吾々は戦争を拒否する。エルサス、ロートリンゲン問題に對して、この手段を用ひる事も同じく非難する。……然し千八百九十二年、即ちフランクフルトの平和後二十年も過ぎた後、エンゲルスは既に考へて居たのであるが、吾々は今日に於てこそ、一層エルサス、ロートリンゲンの住民が、千八百七十一年その意志に反して併合されたもので、彼等が直接、何等外部からの干渉がない投票に依つて、何れの國に所屬するか自ら云ひ出すまでは、安んずることの出来ない』と云ふ見解に達せざるを得ない。……かくなつて初めて、惡魔の様な重荷が、全ヨーロッパから取除かれるであらう。また獨逸自身からも取除かれるであらう。若し自決權の決定が、豫想通りに行かないと假定しても、獨逸國民は經濟的に、政治的に、道徳的に失ふよりも遙かに多くのものを獲るであらう。』

チンマーワールド及びキーンタールの大會

マルクスの説を忠實に遵守して居た少數派にとつては、ストックホルムの大會は、世界プロレタリア階級の再結合を宣傳する本來の演壇でなかつた。早くから彼等は既に他の道を見出して居た。開戦して數ヶ月後に、既に彼等は相互に連絡を求めた。一九一五年春に起草された指命書に依ると彼等の團體は、『國內の平和に反對して立ち、プロレタリアの階級闘争に基礎を置いて、諸國の社會主義者の戦争反對の同時的行動に参加しやうと云ふ、あらゆる分子を包括して居た。』

一九一五年九月五日から八日まで、四日間、スイツツルの一小村チンマーワールドで第一回の大會が開かれた。イギリス人を除いて、全交戦諸國の代表者が出席して居た。イギリスの代表者は旅券を得ることが出来なかつたのである。この大會では、穩和派の勢力が優れて居て、レーニンの指導する過激派は、まだ後に差控へて居た。先づ獨逸人とフランス人とを共同の卓に著かせると云ふ困難を除かねばならなかつた。國家主義的戦争に對して抗議し、國際社會主義黨の勝利を援助するために集つてきた、此等の人々の間でさへ、交戦諸國民間に横はつて居る憎惡が見られた。獨逸の代表者アドルフ・ホフマン及びゲオルグ・レーデブールが、ベルギーの中立侵害を非難して、ベルギー

の復興を要求する獨佛共同の宣言書を公表することに同意した時に、初めてフランス人は獨逸人と席を同じくした。

チンマーワールドに於ける要求は、大體に於て獨逸のハーゼ、カウツキー團體の綱領に對應するものであつた。即ちその他の問題の外に、先づ戦費案の不賛成、愛國主義者に早變りした社會主義者に對する峻烈な闘争、塹壕内での國際社會主義に關する宣傳、ストライキ運動、國內平和の代りに内亂の奨励、最後にフランス、ベルギー、英國の内閣から社會主義諸黨出の大臣が辭職すること等が要求された。

然し彼等は愛國主義に早變りした社會主義者との連絡は絶たなかつた。即ちこの大會では、汎ゆる方向のプロレタリア階級が、國際的に同體である事を主張して、大會が恰も分離を引起して、ロザ・ルクセンブルグがユニウス小冊子で既に勸めて居る様な、一つの新しい國際社會主義黨を建設するものであるが如き疑惑を受ける事を悉く却けた。

スイツルのベルン在の一小村キーンタールで、一九一六年四月末開かれた第二大會では、過激派が優勢になつた。即ち露人レーニン、トロツキー、ラデツク、ジノエフ等が、正面に現はれた。革命的思想は、是迄よりも一層強く高潮された。愛國主義に早變りした社會主義者と全く分離して

過去と絶縁するために、一つの新しい國際社會主義黨を建設する事が、最早避け難い事となつた。チンマーワールド大會で決議された要求である、交戦諸國で同時に國際的行動を初めると云ふ條項が除かれ、之に代ふるに、先づ第一に自國政府と戦ふために、リーブクネヒトの掲げた綱領を以てした。

この大會は、戦争中に於ける最後の國際的大會であつた。キーンタールから一路は直ちにモスコに向つたのである。それから一年後、ロシア革命の星は、國際社會主義の空に昇つた。即ちレーニン及トロツキーは世界プロレタリア階級の過激分子の指導を引受けた。非常な力と未曾有の大膽を以て、彼等は國際社會主義黨の舵を握つて、その船を荒れ狂ふ海洋に引出した。國際的指導は、こゝに其の第一回の光輝ある勝利を得た。マストには新しい旗章であるソビエトの星印が風に靡いてゐた。

ロシアの革命

見透しのつかない、世界歴史的意義を有するロシア革命は、既に戦争中西歐の國際社會主義の發

展に強いシヨツクを與へた。モスコを根源地として、戦争の最後の二年間、精神的にも物質的にも西歐諸國の革命運動が育成された。革命を奉ずる首領たちは、レーニンの卓越した人格の感化をうけ、また外的にはロシア革命を模範として、かなり忠實に模倣した。この意味で、ロシア革命の経過を理解する事は、西、中歐諸國の後年の出来事に就ての理解を深めるに役立つものである。

ロシアでは開戦後間もなく、内政上の状態が危険の方向に進んだ。他國と比べて一層早く戦争に對する倦怠、國民の緊張力の弛みがきた。不満足な軍事上の成績、軍需品製造及び食料品の分配の困難が、益々増加した。これが精神的危機を益々大にした。社會主義の諸黨派は、間もなく戦争に對する感興を失ひ、メンセビキの徒及び初めは國家主義の立場をとつて、政府を援助した社會革命主義者は、一九一五年から同一六年の間に、戦争の反對論者と變つて了つた。

民主的な、中間派も亦變つた。彼等は戰意こそ失はなかつたが、軍事上の失敗や、國內の混亂に對し、責任者として政府を峻烈に攻撃した。かくして、極右翼を除いて、あらゆるブルジョアの諸黨派は、「進歩主義連盟」と云ふものをつくつた。進歩主義連盟は、内治の徹底的改革、極めて擴張された議會の權利を要求し、たゞ事物の根本的革新に依つてのみ、内外に對する國家の破滅が避けられると云ふ確信を表明した。

成程右翼の諸黨派は、外部に向つて依然として戦争意志の代表者であるやうな態度を示して居たが、然し戦争が勝つか敗けるか判らない疑ひがあつたし、その上に革命が近づきつゝあると云ふことが益々明瞭なるにつれて、彼等は一九一六年獨逸と竊かに單獨講和を結ぼうとした。

この三つの勢力は、互に相對立して、高く頭をもち上げてゐた。彼等の間に、その古い獨裁的地位を主張しやうとした政府の企圖は、全然失敗に終つた。

一九一六年から同一七年に互る冬、事態は益々切迫した。一九一七年の初め、社會主義の諸黨派は、ツアール政府を顛覆すべき時期が到來したと信じて、彼等は進歩主義連盟に事を共にすべき事を勧めた。ペテルスブルグの工場、特にブテイロフ工場の労働者は、議會の議長の椅子にその代表者を送つて、若し政府と衝突するやうな場合には、彼等は武器をとつて議會を援助すべきことを約束した。

ツアール・ニコライ帝は、今度も手綱を引締めて、來らうとする不幸を防がうとした。新政府の指導者の地位に居た内務大臣プロトポポフは、革命を武力で抑壓しやうと準備した。その間にも、獨逸との講和は熱心に企劃されたが、然しこれらの事がまだ本當に有効にならない内に、一九一七年三月一日ペテルスブルグに於て食糧分配問題に關する暴動が起り、幾日もたない内に、この暴

動は革命に移つて行つた。そして三月十二日には、ペテルスブルグの補充諸隊が、革命の味方をした。

新しく出来た假政府は、戦地の軍司令官たちに、電報で假政府に服従する事を要求したが、誰れもこれに對して抵抗する者はなかつた。ツアールはモヒレフの大本營から、北軍司令官のルスキー將軍の下に走つた。然しルスキーはツアールを捕へて、革命政府に引渡した。(かゝる行爲があつたにも拘らず、ルスキーは一九一八年ボルシェヴィキのために死刑に處せられた。) これから數日後、ニコライ二世はその退位宣言書に署名した。

數百年間、鞏固を誇つたツアールの獨裁は、如斯一朝にして没落した。鈍感、無關心のうちに國民は、僅かばかりの革命家が斷行し、大膽な行爲を見て居た。軍隊も亦到る處で、靜かな態度をとつてゐた、ブルシロフはルスキーと同じく、新政府に對して服従する旨を、繰返し宣言した。新政府に對して曖昧である多數の將官は、免職されたり、或は逮捕され、又無數の海軍士官が殺戮された。到る處に兵卒から出来上つた委員が興つて、第一に將校の命令權を制限し、また部隊内の軍隊的規律を破壊することに努めた。この最初の數週間で、軍隊は恐ろしい麻痺の状態に陥つた。而も新ロシアにとつて幸ひな事は、獨逸軍にとつてこの乗すべき好機會が、獨逸側から認められなかつ

た事である。

ロシアの三月革命は、社會主義者と共に進歩主義諸黨派のした仕事である。従つて初めは兩派とも政府に於ける權能に參與した。立法權は、進歩主義聯盟及び社會主義者から成る、議會の委員會の手中にあつた。此委員會と相並んで、否寧ろその上に労働者委員、兵卒委員から成立してゐる實行委員會があつて、社會革命黨及びメンセビキの徒が、多數を占めてゐた。この委員會は、議會委員の立てたあらゆる施政に對して、至上監督の權能を握つてゐた。

斯様にして、議會と労働者委員、兵卒委員との間に、政權を分割する事は、到底永續すべき性質のものでなかつた。即ち間もなく露國は同盟諸國の戰爭目的に同意すべきか、或は又原則的に侵略賠償を却けて、之を根底として獨逸と平和を結ぶべきかの問題に關して、激しい衝突が起るに到つて既に五月中に事狀は危険にさし迫つた。

その間に軍隊の混亂はだん／＼甚しくなつた。多數の戦地及び兵站勤務の兵卒は勝手に歸郷して政府が彼等に復歸するやうにと云ふ數願的宣言も、何等効果がなかつた。塹壕内では、ロシアの兵卒は敵の獨逸兵に和解交歡の手を延ばした。

巨大な帝國の組立てがぐらつき始めた。無數の異民族間には、到る處で分離運動が行はれた。民

族自決と云ふ事が高く響き渡つた。その國民的特殊性の殆んど認められない諸部族まで、もはや大ロシアと何等關係がないと自ら宣言した。

ボルシェヴィキは、革命のこれ迄の経過に關しては、全く後方に差し控へてゐたが、四月十六日レーニン及び彼の友人ルナチヤルスキー、アツプヘルバウム(シノフエフ)、チエダーバウム(マルトフ)、ゾーベルゾーン(ラデツク)、フィンケルシュタイン(リトヴィノフ)、ジルバーシュタイン及其他の連中が、ロシアへ歸つてきた。獨逸政府は是等の連中を封鎖列車で、スイツツルからロシアの國境まで輸送したのである。非常な大精力を傾倒してレーニンは、ボルシェヴィキ黨の諸力を動員し始めて、間もなく彼等は多數の地方的ソビエツト(勞農會)、就中クロンシュタツト、シユルツセルブルグ、ツアリチン、サマラ等で、優れた勢力を得るに到つた。

戦争を繼續すべきか否かに關しては、政府に參與して居た社會革命主義者及びメンセヴィキ主義者の間に、思想が變化した。彼等はこれ迄講和を主張してきたが、今や社會革命黨の首領であり、總理大臣であるケレンスキーが、真先きに獨逸征服の戦争を繼續することを主張したので、全く破壊状態に陥らうとした戦争機關が、再び運轉し始めて、南部戦線では露軍の攻撃がオーストリアの戦線を押し破つた。然し速かに集中された獨軍の豫備隊が逆襲したので、間もなく露軍の進撃は撃

退された。

獨逸政府及び陸軍の幹部は、これまでロシア軍隊が自然に潰滅する事を期待してゐたのであるが、こゝに到つて彼等は、もはや辛棒しきれず、破壊の経過を速かにする決心をした。即ち獨軍はリガ及びオエーゼル地方にあつて攻撃を開始した。

この事は、露軍の最後まで残された秩序を全く破壊した。革命主義者の戦争的感激の燃え上つた薬火は忽ちにして消え果てた。

この間に、レーニン及び彼の連中は、また新しい革命の準備をした。レーニンのみが、ロシア國民の戦争に對する倦怠をよく知つて居たので、如何なる價を拂つても講和を結ぶべしと云ふ彼れの標語に對して、民衆は流れの低きにつくが加く集まつた。既に七月十七日、彼は政權の奪取を試みた。之は暫く動搖せしめたゞけで、ブルジョア及右翼社會主義諸黨から成立してゐる、聯立政府を倒す事が出来なかつた。レーニンその他の連中は、フィンランドへ亡命して、その黨派は破壊された様に思はれたが、併しレーニンの異常な精力は、絶え間なく働いて居た。

然るに九月偶然の出来事がレーニンを助けた。それは兵卒委員制度に依つて、壓迫された若干の司令官たちが、反革命を企て、突如としてペテルスブルグに向つて進撃を始めた。この危急に備

へるため、社會革命主義者及びメンセヴキキは、應援をボルセヴキキに求めた。そして主に彼等の煽動的活動に依つて、革命主義者の迫撃は失敗に終つた。こゝで彼等は、遠慮會釋もなく昂然とした態度で、ブルジョア社會主義者聯立の政府を顛覆し、プロレタリア階級の獨裁政治を打ち立てる目的に突進した。彼等は既に無數の地方勞農會をその味方として率ゐて居た。ペテルスブルグはボルセヴキキ派勞働者から成る、大軍隊のために蹂躪された。斯様に準備を整へてレーニンは十一月六日、さきに七月に失敗した政權掠奪の企てを再び試みた。ペテルスブルグは二十四時間にして、彼の手に落ち、數日後すでにソビエツトの星旗は、ツァールの舊都モスコウのクレムル宮の上に翻つたのである。

一九一七年夏の佛國內の暴動

モスコウから流れ出た偉大な暗示的影響、革命的勢力は、先づフランスで強き反響を見出した。暫くの間は恰も革命の火花は、モスコウからパリに飛び行くかの様子を示した。五月及六月、無數のフランス軍の部隊内に、重大な軍隊暴動が起り、殆ど此の國は奈落の底に陥らうとした。

既に千九百十七年の初め以來フランス軍隊の指導當局者は憂慮の眼を以て、軍隊の士氣の益々急速に險惡になつて行くのを見て居た。これは戦地で活潑な宣傳をして居た、非戦論の、過激な社會主義者及サンヂカリズムの徒の罪であると看做されてゐた。特に歸休兵は停車場及汽車中で、かゝる宣傳の効果ある對照であつた。郵便物檢閲、其の他の監視法によつて、フランスの軍事統帥部は彼等の活動を可なり精密に知つて居り、政府に對して絶えず其の危険を警告して居た。千九百十七年二月二十八日フランス司令官ニベールは精密な報告をして、速に對策を講ずることを要求した。然し政府は、別段擧げて言ふ程の方法を講じなかつた。

此の怠慢の罪は忽ち結果が現れた。即ち五月末、エイヌの佛軍の大攻撃が失敗に終つた後、突然軍隊内に重大な一揆が起つた。ロシアの前例が明かにこれに影響したのである。

休息の爲戦線から歸つた多數の軍團は、再び塹壕に歸り行くことを拒んだ。彼等は列車及び自動車縱列を抑留して、パリに進軍し革命を宣言すると言明した。又多くの部隊では、ロシアの例に習つて兵卒委員會が組織された。彼等は直に戦争を終結すべきことを要求した、『故郷で勞働者は日に十五法^{フラン}から二十法を稼ぐのに、此處で無能な將官達に殺戮されてるのは無意義である。』と暴動は新募兵屯營から戰團部隊に擴がつて行つた。彼等は壘壁を作つて閉ぢ籠り、赤旗を掲げ、將校

に對して革命的要求を持ち出すまで状態は進んだ。彼等是一種の革命的施政を設けて、其の欲する物は押收し、或は購買券を發行した。

十六個軍團以上の部隊が此の運動に感化された。當時のフランスの陸軍大臣バートルヴェは後になつて「當時ソアツソンとパリとの間には、信頼してよい部隊は僅かに二個師團に過ぎない日があつた。若し獨逸が此れに乗じて大攻撃を開始したならば、極めて危険であつたに違ない」と云つてゐる。

註、バートルヴェ著『フォツシユ及ペタン登用の理由』及クルの『我等の敵の判斷に依る世界大戦』を参照。

ニペーユに代つて、五月十五日フランス軍の新司令官となつたペタンは、熟練と英斷とを以て暴動に對抗した。彼は特別な程度に軍的の信任を得てゐた。だから彼の個人的活動は到る處で鎮撫的效力を現した。彼は、暴動の師團を説廻つて、實際の亂脈弊害を矯正することを約束し、將校には在來より、一層軍隊の爲に心を用ひるやうに訓戒した。然し、同時に彼は非常な峻嚴を以て、假借する所なく暴動の首謀者達を處罰した。六月の終りになつて、暴動は漸次下火になつて來た。

註、バートルヴェによると約百五十人の死刑が宣告され、其の中二十三人は刑の執行を受け、その他はアフリカ或は佛領印度支那への流竄の恩典に浴した。

然し、軍隊の精神状態は、此の暴動の爲に重い打撃を受けた。士氣は徐に回復して來るに過ぎなかつた。英國は佛國に對して、四月に始められた攻撃を繼續するやうに迫つたけれど、効果はなかつた。七月七日フランスの陸軍大臣は議會で、軍隊は尙當分大きな軍事的行動をなす能力を有してゐないといふことを、告白せざるを得なかつた。秋になつて初めて軍隊は、再び積極的活動を始めかくてラツフォール及ヴェルダン攻撃の成功は、佛軍の自信を回復し、千九百十七年末、彼等は稍々以前の戦闘力に近い能力を回復するに至つた。

此の『悲しむべき年』が、若しイギリスに依つて確かりと支へられてゐなかつたならば、フランスには、恐らく非常な禍となつたであらう。英國民は、こゝにも其の特性を示したのである。英國民は其の國民性である耐久性を傾倒して、其の國家的目的を追及した。彼等は、其の指導者から、時局が極めて危険であること、及び國家の存在上に必要なことを指示されて、此の危険な夏の戦争の全重荷を、その双肩に荷つたのである。フランデルンの戦で流された、英人の血の川がなければ、フランス軍隊は、其の精神的重心を、手遅れしない中に、回復することが殆ど出来なかつたであらう。パリに於けるロイド・ジョージの毅然たる言明がなければ、戦争は多分全く異つた轉回をなしたであらう。

イギリスの國際社會主義

註、政治竝に歴史記録第二週年號に於けるデイークマンの『英國に於ける労働者運動及社會主義』を參照
 千九百十七年、大英國を指導した人々は、當時英國自身が労働階級者の平和主義的興奮及びストライキ運動に對して、戦はなければならなかつたことを考へると、彼等の功績を一層認めざるを得ない。

戦争の始め頃の政府の巧妙な政策によつて、社會主義の労働者が持つて居た反戦的的態度は、間もなく愛國的態度となつた。特に政府は、巧に産業組合の幹部連及び多數の社會主義の黨派の領袖連を、戦争政策に味方せしめるやうに方策を廻らした。かくて多數の大臣の椅子は、労働者の指導者達によつて占められた。

然し戦時の差迫つた事情は、一般國民と同様に、労働階級にも極度の精神緊張を要求した故に、平時から都合のよい労働條件になれて居た産業組合所屬労働者の間には、間もなく激しい不穩状態

が起つた。既に千九百十五年の春に、所もあらうに兵器工廠に於て、ストライキの傾向が現れて來た。此のストライキの傾向は、政府が戦時工業生産を組織立てて、益々産業組合所屬労働者の權利を、迫害するにつれて擴大して來た。千九百十五年七月三日、戦時軍需法案によつて、軍需大臣の地位が設けられ、極めて廣汎な權限が與へられ、軍需品の製造に従事してゐた一切の作業所が、國家の監督の下に置かれた。最大作業能力の發揮を徹底させる爲に、必要と考へられた此の施設は、使用人、被傭人に對する廣い範圍の權限、及び峻嚴な罰則によつて保證されてゐた。是等の規定に依つて、産業組合所屬労働者は、戦争前數十年間の闘争で、獲得した權利が迫害されると信じて、盛に反對の聲を擧げた。擴大して來るストライキを、ストライキ禁止法によつて、抑へようとした政府の試みは全く無効となつた。ストライキ一揆運動は、千九百十七年に至つて、非常な範圍に擴大した。即ち此の年だけでも、總體で約百萬の労働者が、ストライキに参加した、戦時品製造工業の爲の労働延日數六百萬日が失はれたわけである。

註、就中軍需大臣は必要と思はれる汎ゆる作業上竝に労働方法の變更を要求する權利を有してゐた。彼は作業を停止し、或は繼續する爲の強制方法を執行することを得、又代價を規定し、労働者を任意の箇所より他に移し、又ストライキを禁止することを得たのである。

この危険が、一層憂慮すべきものとなつたのは、同時にロシア革命、イギリス、フランスの春の總攻撃の失敗、並に其れに引續くフランスの軍隊暴動、及潜水艦戦によつて、協商側の事態が、極めて緊張したからである。

ストライキ運動と併行して、獨立労働黨から出た平和主義運動が進行した。千九百十七年六月、ロシアの例に倣つて労働及兵卒委員會がリーヅに起された。此の勞兵委員會は、産業組合並に政治的黨派に屬する、英國プロレタリア階級の汎ゆる過激分子を包括してゐた。全戦争中其れは平和主義的態度を保持してゐたが、別に政府の戦争政策に對して積極的に反抗もしなかつた、夫のマクドナルドも此れに屬してゐた。そして此の勞兵委員會の目的は、決して革命的なものではなくて、極めて穩健な範圍に止まつてゐた。彼等は、即時に『無併合、無賠償』の平和を結ぶことを要求し、同時に労働者の經濟的、政治的自由の回復及兵士の政治的並に市民的自由を要求した。

註、原書四十頁及七十二頁を見よ。

政府は、ストライキ並に平和運動を、権力で抑壓することの出來ないことを知つて、其の方法を變へた。そこで戦時軍需法案の規定の一部は緩和された、政府はストライキ團體の公正なる交渉に應じ、使用人と被傭人との利害の均衡を計る目的の爲めに、操業委員會の一種を工場内に設け、亦

以前の産業組合の權利を大部分復興させた。

これがために、ストライキ運動は全く停止されたとは言へないけれども、然し先づ我慢の出來る程度にまで減ぜられた。就中、革命運動の汎ゆる機縁は、其の萌芽に於て斷絶された。結局革命的傾向を保有して居たのは、獨立労働黨の一小部分である所の、嚴格なマルクス主義の英國社會主義黨のみであつた。全體から見てもマルクス主義の國際的思想は、戦争中英國労働者階級には、何等の感化を與へなかつた。又縦ひ經濟的、社會的の權利主張の爲になされた、英國労働者の争闘が、其の政府を屢々非常な困難に陥入れたとは云へ、單に此の事は英國内部の事件であつて、マルクス主義の國際的目的とは全然關係のないもの、或は唯僅かな關係しかないものであつた。

インターナショナルの思想に對する獨逸政府の態度

國民、軍隊の愛國精神

若し、戦争初年の國民、竝に軍隊内の氣分を、單に諸政黨間の争の狀態によつて、或は又政府部内の主なる見解に依つてのみ判斷するならば、間違つた結論に達し易い。

職業的政治家が互に争ふた政治問題に對する興味は、世界一般には僅少であつた。戦争の實際的方面が、汎ゆる注意を引付けたからである。此の戦争では、結局事は極めて簡單である。即、獨逸は、數に於て遙に優つた敵に攻撃されて、彼の權利を防禦してをるのである、又獨逸は戦つて、自らを防禦するより外、仕方がない地位にあるのである。かういふ感じが、何物に對する感じよりも強かつた。

國民と政府との間は弛んで來た。千九百十四年八月には、國民は政府に對して歡呼の聲を擧げた。政府は、當時眞實に、國民的意思の代表者であつた。それから灰色の氣分が全國を蔽ひ襲ふに至つた。國民は、國內の困厄を切り抜けやうとする、行政官憲の努力を勿論認めた。然し次々に現れる法規や、食料竝に原料經營の大仕掛な機關や、刑法の寛大な運用だけでは、戦争勃發當時、政府と國民との間に成立つた内的關係を保有するには十分でなかつた。かゝるもの竝に新聞が日々うるさい程にふり撒く好意的な訓戒、それらに對して國民は最早一向感じなくなつた。彼等は、それだけでなく、よく義務を意識してをつた。政府からも亦、その義務の監督をすることを要求しなかつた。是等の人々には、政府が、斯く紙上の規定によつて政治する代りに、反對に、一層峻嚴に、一層無遠慮に戦時暴利者の疫病神や、義務の回避者や、食料品の隠匿者を取締つた方が、蓋し一層よく腑に落ちたであらう。然しながら、此の政府には、その方策を講ずるだけの、理解を缺いてゐた。政府は、在來の軌道を走つて行つた。機關の運用や、老練な、そして有效な組織によつて、安寧秩序を維持して行くことは、政府の得意とした所であるが、然し政府は國民から、最後の精神的なものを取出すのに失敗した。

然し國民は、政府の施設でも除くことが出来なかつた色々な不平な事、忌々しいことをも、戦争

の避け難い随伴現象として、好意的に我慢した。勿論、時がたつにつれて、此の抵抗力も、弛み始めた。教育、人世観、境遇と云ふものが、あまりに様々であつた。戦争を肯定した國民のうちでも、終局的全勝を信じて、國家の望みが満されるといふ多大な期待を持つて居た連中と、他方不安の氣分に襲はれて、國家安全の保證の最少限度で満足し、速に平和の來ることを唯一の救済の道であると考へてゐた連中との間には、かけはなれた距離があつた。前者にとつては國家の繁榮、勝利ある自己主張は、同時に彼等自身の生涯の目的であり内容であつた。後者にとつては、是等のものゝ外に尙他の是と相並ぶ或はこれよりも一層高價な理想があつた。或はその中には物質的、利己的見地から事を判断してゐたものもある。

是等のことに加へて、不十分な食料、汎ゆる種類の窮乏が、國民の肉體、心的状態に、不幸な影響を及ぼし始めた。人間は激し易く、感じ易くなつた。彼等の神経は、絶えず興奮状態にあつた。戦場の犠牲よりも、日々の生活の爲に、神経を疲らせて、その苦闘が氣分を一層重く壓迫した。足を棒にして駆け廻つたり、立ちながら待つてゐたり、或は其の必要を理解することの出來ない、行政上、警察法上の無数の規定に對して絶えず苛立つたり、急速に富裕になつた或る會社の人々の良い暮し向きや、勞しないで得た富を、これ見よがしにする成金の無遠慮な態度やに對する忌々し

さや、食料の減少にも拘らず却て増加した勞働の重荷や、總て是等に、追ひ廻された状態にある男女に、不斷の緊張を興へた。結局、彼等は、慣習的に職業的に政府の施政や國民の行動を批評して居る人々の煽動に耳を傾けた。

野戦軍の氣分は、故郷に於けるよりも、一層確固で、統一的であつた。其處へは、黨争の騒や、所謂『戦争結末問題』の争闘は、唯極めて遠方からのやうに聞えてゐた。兵士達には、そんな事を問題にする時間もなかつた。彼等の力は、極度まで戦争のために要求されてゐた。彼等は、或は進撃し或は塹壕に立ち、或は數多の戦場で、無言の儘に血を流し、戦死した。彼等は、もう戦争に倦怠してゐた。彼等は、燃えるやうな憧れを以て、故郷の空を眺めてゐた。然し、若し平和の委が彼等の心に現れると、その平和は、敵から講和條件を強制的にうける平和ではなかつた。彼等にとつては、獨逸が此の戦争から名譽を擔はなければならなかつた。是等の人々は、悉く此の爲に忍耐してゐた。此の一事は、彼等が保守黨の代議士に投票したにしろ、社會民主黨の代議士に投票したにしろ、變らなかつた。ベルギー或はクールランドが、獨逸國に所屬するに至るかは、彼等にとつて重大な問題ではなかつた。然しエルサス・ロートリンゲンが抛棄されなければならぬといふことになる、彼等は必死を以て争つた。彼等の心を動かしたものは、決して内政上の改革の問題では

なかつた。義務の忌避や、不法な戦役勤務免除や、歸郷賜暇、勳章功勞章の下附、昇級等の問題の不公平や、不正當な食料の分配や、暴利者や、過度な、郷里に於ける勞働賃金等の事が、彼等を激さした。其の他の問題は、彼等にとつて、戦後まで差し置くべきものとされた。

然し軍隊も、國民自身の一部であつた。軍隊には、男性的、武人的國民の諸徳のみが、集中してゐたわけでない。軍隊には、心底からの戦争反對者もゐた。然しながら、彼等は、勝利の確信ある大衆によつて、戦争の初年は引ずられて行つた。當時は反戦的宣傳は、行ふ餘地がなかつた。軍隊には、當時故郷にあるやうに、手廣い、引締つた團體組織を作つた過激社會主義者の巢窟は、まだ出来なかつた。將校達と密接に共同生活をしてゐること、各司令部の嚴格な監督、檢閲、文通の監視及び部隊内の絶えざる人員の變動、戰場から戰場への移動等は、革命的秘密結社の發生を困難ならしめた。勿論、これだけで軍隊が革命的宣傳に對して、斯くも長く抵抗力を持つてゐたといふことを悉く説明することは出来ない。殆ど戦争の終りに至るまで尙效果を示してゐたものは軍人精神の養成、軍隊を内政の争ひ場ではなく、純粹な戦争機關であると見る習慣であつた。ホーヘンツォルレン家の後年の創造である海軍は、此の幾百年來の教育を持つてゐなかつた。彼等の抵抗力は早く萎靡してしまつた。

政治當局と軍隊當局との間の不調和

國家主義の思想が、戦争の晩年に當つて弱められたのは、單に國民の肉體的、或は心的過勞やインターナショナルの思想の激發ばかりから來たものではなかつた。此の國家思想の衰退は、其指導の不十分によつて、著しく早められたのである。此の點で、特に不幸な影響を及ぼしたものは、開戦の當初から漸次はげしくなつて來た、政治當局と軍事當局との不調和であつた。

戦争の、汎ゆる事件について、最後の決定をなすものは皇帝であつた。彼は至上の責任を帯びてゐた。彼の最高の補佐としては、政治方面では宰相、軍事方面では參謀總長があつた、是等三人の完全な精神的一致、並に責任の正當な分配は、決定的意義を有するものであつた。伯爵フホン・シユリーフェンは、プロシヤドイツで歴史的に發達して來た『將帥』を、既に世界大戦以前に、重大なるものと認めてゐた。彼は、『三人の人々の、誰もが、一人の將帥としての條件を満すことは出来ない。三人の各々がかかる將帥の持つべき諸要素の多少を所有して、他の二人の要素を補充することは可能である。……』將帥を、三頭政治として表示することは、千八百六十六年と千八百七十

年には、成功したが、然し何時も成功するものとは限らない。現在、將帥の代りとなる委員會員の少くとも一人は、サムエルの聖膏油のいくらかを受けたものでなくてはならない』と云つた。

註、『ゲネラル・フホン・アルテノ發行の海陸軍便覽に於けるフホン・シュリーヘン伯爵の『將帥』なる論文
参照

三頭政治は、世界大戦でも存在してゐた。宰相は、外交上の方針を定め、敵國との交渉をする務めを持つてゐた。内政に關しても、彼は、軍事當局、即ち陸軍大臣、留守軍團司令部の實施命令權に依つて、宰相の責任外とせられて居る以外は、責任を負うてゐた。狹義に於て戦争に對する責任は、各々直接に皇帝に從屬してゐる參謀總長、及海軍軍令部長、陸軍大臣、及び帝國海軍郷が、形式上、分擔してゐた。參謀總長は、戰地に於ける諸軍の作戰行動を支配して、陸軍大臣は、陸軍の戦争指導に關する全體、及國內の治安維持について、責任を持つてゐた。海軍軍令部長、及び海軍卿は、海軍に對して類似の仕事を持つてゐた。實際は、明かに重心が參謀總長にあつた。軍事行動の、汎ゆる重大な問題に就て、彼の言葉は、常に裁決を與へた。

註一、千九百十六年三月以來陸軍大臣は同時に國內軍總司令官であつた。それ迄は留守軍團長が内政上の事に關して直接皇帝に對し責任を帯びてゐたのである。

註二、政治的、軍事的責任の複雑な問題に關して此の方面の事情に通じた休職大佐シュウエルトフェーガー

氏が極めて詳しく考證してゐる。千九百二十五年ベルリンのライマール・ホツピング社發行の『滅滅の原因』
参照

其の他に就ては政治家と軍隊首領との間に截然たる責任の限界はなかつた。軍事と政治は直接に相混淆してゐたのである。相接近した範圍にあつて實際的に協同して働き、少くとも精神的には責任を共にすると云ふことは、現在の組織にあつては避け難いことであつた。參謀總長が内治外交並に産業經濟上の問題に關係しないことは、宰相の勢力を本來軍事的である戦争指導の仕事から遠ざけることが出来なかつたと同様に、共に不可能の事であつた。故に兩面の責任者が衝突なく協力して働くことの能きる、能きないは、兩者が相互に順應し合ふ意志及素質、並に兩者共同の頭首である皇帝の權威と實力如何にかゝつてゐた。

同様に熱心な愛國心に導かれて、戦争中皇帝に依つて國民の運命の指導者として呼出された人々は、互に必要な内的連絡を保たうと努めたのだが、老ウイルヘルム皇帝の下に、千八百六十六年並千八百七十年に成立つてゐたやうな、完全な調和は遂に求められなかつた。フアルケンハインが參謀總長であつた間は、わだかまりはあつたにしても少くとも外部には出て來なかつた。フアルケンハインは本來軍事的範圍外にある事に對しては、わざときはめて控え目にしてゐたのである。特に

宰相並に國內軍事當局の内政に關する權能に干渉するやうな事は、少くとも外面は極めて細心に避けて居た。

軍事總統帥部が、ヒンデンブルグ並にルーデンドルフの手に渡るに及んで、事情は一變した。成程、ヒンデンブルグは嫌々ながら内治外交に干渉したのだが、これに反して、ルーデンドルフは、深い個人的責任感から、又政治軍事の問題は密接に關係してゐるものであるといふ確信からでもあるが、それより特に彼は政治當事者が無能であるといふことを、深く感じてゐた爲に、彼の全能力及び彼の天性の熱狂的性質を盡して、自分の政治的見解を採用させようと試みた。戦争指導と政治の關係に關する彼の見解は、同じ題目の彼の著書に次の如くに記されてゐる。「宰相は獨逸國民の協同の力を、戦争と云ふ事に導いて戰場に於ける勝利を獲る使命と義務とを持つてゐる。戦争指導者は政治當局に對して、換言すれば宰相に對して、勝利を得るに何が必要であるかを教へなければならぬ。政治當局は是迄のやうに、常に平時に於て軍隊を用意しておくといふことだけでなく、謂はゞ其の専門技術の方面に於ても、戦争指導の補助者となるのである。政府の仕事と行動は軍事總統帥部の仕事及行動と等しく、戦争にとつて決定的の意義を得るに至つた。戦争指導の力は國民間にあるのだ、唯力の發現が、對敵戦線にあるに過ぎない。但し、慧眼の士は、既に平時に於て斯

様に考へてゐたのだが、今や事實が此の事を力強い言葉で宣言してゐるのであつて、聾者と雖これを聞くことが出来るだらう」と。

政府によつて遂行された政策が、正當であるかどうかには、ルーデンドルフは極めて強い疑惑を持つてゐた。彼は屢々狂熱的態度で政府の政策に反對した。彼は斯かる態度をとる權利を持つてゐると信じてゐた。何故なれば、今國家が直面してゐるやうな状態にあつて、根本的に二つの差異ある見解が、相並んで同時に責任ある地位を占めてをるべきでないかと考へたからである。政治當局は、中庸の政策をとつて、外交問題にあつても、内治問題にあつても、均等中和の道を求めたのだが、ルーデンドルフに取つては、勝利を得るか、滅亡するかの二つに一つの道しかなかつた。彼は獨逸國民の道義的並に國家的力に對して、不動の信仰を持つてゐた。彼は軍隊の能力によつて信念を強くし、また同様な能力を國民から要求した居た。彼には、若し國內の官憲が、彼等の力を即ち國民の中に潜んでゐる諸精力を覺醒し、國民の總ての力を集注し、汎ゆる抵抗を打破る事に力めるならば、勝利は確實であると思はれたのである。だから彼は、政治指導者に對して、その缺乏してゐる實行力を注ぎ込むことは、彼の義務だと考へた。ルーデンドルフが事毎に政府に要求したことは、常に極端なもので、彼の提議した解決策は、時には暴行的な方法だつた。宰相ベートマン・

ホルウエヒの反對に遇つた時など、彼は宰相に對して戦を開始し、遂に彼を退かした位である。ヘルトリング伯に對する關係も亦すこぶる險しかつた。

然し此の強い性格にも限界があつた。即ちルーデンドルフは、遂にプロシヤ將校團の見識の範圍を出ることは出来なかつた。又此の見解から離れようと試みたことは一度もない。國王の權威は彼にとつては絶對絶命の場合にあつても、犯すべからざるものであつた。政府の内治外交政策に對して戦つて居る時でも、プロシヤの將官である彼にとつては、最後のせつばつまつた手段としては、國王に對して自ら骸骨を乞ふより外に道がなかつた。彼は戰爭中に於ても、實際これより外に道があるとは考へなかつた。

内治外交にしる、産業經濟にしる、彼が口を出さぬ問題は殆んどなかつた。彼の巨大の意志は大抵の事を貫徹させたが、また失敗した事もある。併し大體から見れば彼の望み通りに、彼の闘士的熱火に満ちた精神の刻印を、獨逸國民に捺すところまでにはゆかなかつた。

意見の相違は宰相と參謀總長との間に止まらなかつた。も一つの衝突面は一方宰相及彼に従屬する官憲と、他方國內に於ける軍事官憲との關係に現はれて來た。戒嚴令布告によつて、動員の初期國內に於ける安寧秩序を維持する仕事は、留守軍團司令官の手に移つた。彼等は此の方面の活

動に關して陸軍大臣に對しても、宰相に對しても、亦議會に對しても、責任を有たなかつた。つまり彼等は大綱についての指令は受けてゐたけれど、一々の事については命令によつて束縛されてはゐなかつた。即ち皇帝が彼等にとつて唯一の上長であつた。然し實際に皇帝の裁きを求めるのは、唯例外的の場合だけで、君主は此の極めて廣い範圍にあつて、個々の事に關する處理については煩はされるべきものでないとされてゐた。

宰相並に彼の諸機關の、内治に對する勢力は、此の規定によつて、著しく減少されてゐた。内治生活に斯くも深く喰ひ入つてを戒嚴令の規定に關しては、留守軍團司令官達の實際權能が一體何處で始まつて、何處で終るべきかは殆ど明瞭でなかつた、兎に角國內に於ける士氣、並に指導的官憲の態度は、主として是等司令官達の措置に關係してゐた。他面にあつては内政の總方針を定めること、並に其の中央的指導は宰相の仕事とされなければならなかつた。斯様に二つの結局相獨立した、しかも其の本質に於て根本的に異つた官憲が、同一利害の範圍にあつて相並んで働いてゐたのだから、その衝突は到底避けることが出来なかつた。

事態を一層困難ならしめたのは留守軍團司令官達が、内治上の活動にあつて、屢々明かに到底彼等の力の及ばない問題に出くわしたことだ。彼等には屢々内治上必要な知識が缺けて居り、時には

在來は全く彼等の活動範圍外にあつたやうな事が、彼等の仕事として要求された。

（以下は非常に薄い文字で印刷された、ほとんど不可読な文章が続く）

獨逸國內に於ける争亂

ストライキ

國內に於ける安寧秩序を維持するといふ彼等の活動の一部分を、國內軍事當局は特別の困難もなく全うすることが出来た。此の點に關しては、大して難かしいことは彼等に要求されなかつた。彼等の耐久力に對する唯一の重大な試練は、一部分は經濟的理由により、一部分は政治的理由に起因して起つた千九百十六年から千九百十八年迄引續いたストライキであつた。

千九百十六年の秋以來、國內軍の司令官として、ストライキ防衛に對し形式上の責任を帯びてゐた陸軍大臣は留守軍團司令部に對し此の點に關する大體の方針を示した。即ち豫防的方法として、何より主謀者をいち早く逮捕すること、又賣國罪として審判に附すること及煽動的分子を軍隊に召

集し、兵役に就かせる事等が大體の方針として示してあつた。労働への復歸は戒嚴令に依る罰則によつて強制することが出来た(労働強制)。此れが成功しなかつた場合には、工場は所謂「軍隊化」された。即ち当該工場は、軍隊の監督の下に置かれる、斯かる場合には、労働者は兵役に召集されたものとして、軍隊に於ける兵士の賃銀を受け、戦時法の支配を受けるべきものであつた。彼等の居中調停を求める爲に、労働組合並に多數社會民主黨の指導者達と、機を逸せないやうに、連絡をとらなければならなかつた。

註 賣國罪の故に裁判に附することは、千九百十七年十月十九日、戦時に於けるストライキを明瞭に賣國罪と定めた大審院の判決によつて容易に出来ることだ。判決を、容易にすることは、ストライキの起つた地方に緊急戒嚴令を布き、従つて訴訟事件を通常裁判から軍事裁判に移すことによつて其の目的が達せられた。

煽動的分子を兵役に就かしめるといふ手段は、多くの場合に適用された。これは極めて有效な遺方であつた。政治的生活をやつて居る人達が軍隊或は其の他の戦争に關する仕事に従事させられると云ふ傾向は、極めて少なかつた。即ち彼等の行動を左右したことは屢々告白された。就中、千九百十七年に於ける社會主義の諸大會に於て、此の事が告白されて居る。

併しながら是等の施政の外面的利益は、其の非常に重大な缺點によつて再び消されてしまつた。

不平分子を軍隊に引入れることによつて、醗酵素がそこにも亦分布された。更に國民間にあつても、此の事によつて甚しき觀念の混亂を引起した。即ち軍隊に引入れることが、罰として嚇かされ、又實際罰として實行された。即ち兵役に服することが、此の遣方の爲に賣國犯の故を以て裁判に附せられるのと同じことに見られた。然るに他面にあつては、同時に雄辯に兵役が名譽であると稱へられてゐるのである。かの兵役忌避といふことが、戦争の進むにつれて、多くの國民間に殆ど道徳的汚點であるとは、考へられなくなつたことは、主として此處から説明することが出来る。但し兵器工廠の軍隊化は、極めて稀に行はれたことで、此の場合に於ても此の事は、常に罷業者に對して強い影響を與へた。實際此の方法の適用は、即ち工場内に軍隊的強制執行をする事は、十分なる警察隊を有する場合に於てのみ可能の事なのだから、實際は極めて困難であつた。而して、十分な警察隊を得ることは屢々困難であつた。

註、ベルリンに於ては、千九百十七年四月の大ストライキには一工廠、千九百十八年一月のストライキに際しては七つの工廠が一時軍隊化された。

161
總統帥部はストライキの問題に關し、國內官憲よりも尙一層峻嚴な意見を持つてゐた。宰相に宛てたヒンデンブルグの一書簡には、「……………然し誤解を避ける爲に云ふが、私は政治的要求にして

も、經濟的要求にしても、罷業者の願ひには一切耳を傾けたくない、といふ意見であるといふことを附加へたい。私は少したりとも労働者に對して讓歩する結果は、縦ひ夫によつて一時ストライキが片付けられるにしても、夫は一切のストライキの要求を拒絶した爲に、假りに事實大ストライキが起り、それによつて起つて来る兵器工廠に於ける製作の中止、其他の損害の齎すべき結果よりも、一層重大だと考へるといふことを、こゝに言明しなければならぬと信する」と。更に總統帥部は、政府は、労働組合の幹部並に社會民主黨の代議士に對して、彼等が戰爭中ストライキを絶対に忌避するか、否かに關して、明瞭なる答を要求しなければならぬと迫つた、更に總統帥部の意見では、若し彼等が事實戰爭中ストライキを絶対に忌避するのならば、彼等は汎ゆる手段を盡してこれを防止しなければならぬ筈で、夫れでもストライキが破裂した場合には彼等の無力が示される譯である。若し又彼等がストライキを原則的に忌避することを拒絶するならば、彼等は賣國奴と見られなければならない。此の事實を明瞭に刻印することは、彼等の同志を減少させるばかりでなく、過激派社會民主黨の、國家を破壊するやうな思想に關して、國民の大多數を啓蒙することゝなるであらう、以上が總統帥部の意見であつた。

汎ゆる豫防的手段、防衛的手段も、然し大小のストライキ運動の破裂を防ぐことは出来なかつ

た。

是等のストライキは決して何時も上の方から、即ち黨より煽動し指導されてゐたのではない。多くの場合に於て、之は別に團體組織も準備もなく、民衆間に益々加はつて来る不平醗酵から、自發的に現れて來たのである。是等のストライキは屢々一般の不平が餘りに高壓に達した時、突然に發した瓣であつて、極度の壓力が弛むや否や、又迅速に再び閉ぢられた。

就中ストライキが、經濟上の原因や、或は食料問題の困難や、賃銀問題などの原因で起つて來た時は、殊に右の通りであつた。かゝる場合には、ストライキは一部に限られてをり、大抵速に鎮壓されたから、戰時産業經營に對しての損害は餘り重大でなかつた。然し其の精神的意義は極めて重大であつた。何故なれば恠るストライキは、企業家と労働者との間に益々増大して来る、争鬭氣分を養成し、且つ其の上に、賃銀をせり上げる競争が、斯かるストライキに參與することの出来なかつた者共、或は遅れて殿りになつた者共の間に、深い不利を醸したからである。

ストライキが政治的性質を帯びた場合には、それは勿論いつも政治的指導者の煽動によつて起つたものであつた。亦政治的分子が外部からして、本來經濟的であるストライキの中に、附加的に、後から持ち込まれたことも屢々あつた。

多數社會民主黨は、千九百十四年八月八日に於ける彼等の態度表明により、ストライキを政治的經濟的争闘手段とすることを棄權した。彼等は此の道義的義務を、汎ゆる其の他の意見に於ける、又實際の作戦に於ける態度變更にも拘らず、千九百十八年一月迄一回の例外もなく、堅く守つてゐた。彼等が一般ストライキ運動を、甚しきに至らぬ限界に止め、又戰時産業上に有害な影響を防ぐ様に非常に努力したといふことは、こゝに彼等の功績として認めなければならぬ。然し千九百十八年一月の終りに於ける、殆ど革命的性質を帯びた軍需品工場の大ストライキには、彼等は、濫々ながらではあるが、遂に之に參與した多くの實際目的上の理由が、彼等をして此の態度に出でしめたのであらうが、然しこれは極めて危ない決断である。即ち此の決行は、過激的な黨の諸集團に對して、多數派社會民主黨の弱點を明瞭に示したものであつた。

自由労働組合は、實際一般にストライキに反對して來たのであるが、千九百十八年一月のストライキに對しては、彼等も反對することが出来なかつた。然し彼等は少くとも中立を宣言したのである。

獨立社會民主黨は、ストライキ問題に付ては極めて曖昧な態度をとつた。實際にとるべき作戦に關しては、黨内にあつてさへ意見まち／＼であつた。千九百十六年九月二十一日から二十三日の社

會民主黨の全國大會に於て、ハーゼはストライキに對する賛成を宣言した。然し實地に於ては、其の場合に應じて様々の態度がとられた。レーデブルを中心にする左翼は、常に此の一揆に次いで最も鋭利なる、プロレタリアの武器を、戰爭中にあつても引續いて使用する方針であつた。ハーゼの指導下に在る右翼は、多く用心して控へ目の態度をとつた。過激的見解は、益々多くの賛成者を見出すに至つたけれども、公けな黨の幹部は、ストライキ問題に於て、指導を引受けることを最後まで拒んで居た。

過激團は遂に、機會がある毎に、ストライキを宣傳し、又組織するに至つた。

第一回の純粹な政治的ストライキは、千九百十六年五月一日に起つた。此のストライキは、實にカール・リーブクネヒト一人の事業であつたのである、此の時にも彼の性急な、突貫的な性分にとつては、革命的運動はあまりに緩慢に進んでゐると思はれたのだ。こゝに於て彼は、宣傳ビラやチラシによつて、國際社會主義的祝日である五月一日に、示威運動的ストライキを起す様に煽動して革命運動に新しい刺戟を與へようと決心した。然し彼は明瞭に失敗した。多數派社會主義者並に労働組合は、彼に對して峻烈な拒絶の言葉を與へた。又ハーゼを中心とする反對黨の團體も彼に附隨することを拒んだ。其結果はあはれなものであつた。リーブクネヒト自らもベルリンのポツダム廣

場に於て、革命演説をしようとして居る所を、逮捕されるといふ屁間をやつた。それに引續く裁判に於て、彼は多年の懲役、並に六年間の公権剝奪に處せられた。

カール・リープクネヒトの社會主義者間に於ける卓越した地位から見ても、彼に對する司法當局の態度が、強い激昂を引起したことは不思議ではない。此の激昂は公判開廷の日に於ける抗議的大示威運動として現れた。此の示威運動は、單にベルリンのみに限らず、數多き他の都市就中ブラウンシュワイグ、シュトゥットガルト、ブレーメン、キール、ミュンヘン、ライプチヒ迄にも及んだ。團體の幹部が、ストライキ反對を言明したにも拘らず、ベルリンだけでも約五萬の労働者が罷業した。其の中には軍需品工場所屬の労働者も澤山ゐた。

此の戦争反對の示威運動であり、且つ同時にリープクネヒトの國際的努力に對する賛成として現はれた、戦争中初めての政治的示威運動の意義を、當時の政府は十分其の重大さを理解しなかつたようである。ストライキが、只一日間で終り、何等産業上に重大な結果を残さなかつた爲に、別に引續いて意義あるものとして考へる必要はないと思はれたのである。更に八月來、リープクネヒトの控訴裁判の際に、抗議的示威運動を繰り返す企てが、軍事官憲から峻嚴な取締を以て威嚇され、中止になつたのを見て、尙一層人々は安心し満足した。しかし官憲の此の成功は、政府によつて餘

りに大きく見られすぎた。過激派の連中は意氣揚々として、今や束縛は遂に破られ、プロレタリア階級は、指導者なくとも、行動能力を有するものだ、といふことが確められたと叫んだ。これは全く意味のない言葉ではなかつた。

然し獨逸内に於て益々増し加つて來る鬱積緊張の状態が、遂に新しい爆發をなすに至るまでは、尙餘程の時日を費した。千九百十六年の秋に於ける重大な軍事上の經過、それに引續く所謂『玉蕪菁の冬』^{ルイベンウインダ}の間に於ける國民の食料に關する哀れな状態、アメリカの戦争参加、甚だ面白からざる内政上の時局、過激な連中の益々盛んな活動、就中ロシア革命等の影響によつて、初めて労働者階級の或る部分が、再びストライキ思想に感染し易くなつた。

此度はストライキは、一定の政治的目的をもつては起らなかつた。亦統一的な目的を意識してゐる指導者も、確實な政治的綱領もなかつた。むしろストライキは、左翼社會主義者及過激派の連中によつて煽動され、傳布されて、食料問題に對する一般の不平から、又ロシア革命の引き起した興奮から、起つて來たものである。これは實に初めての眞の民衆運動であり、深みから響いてくる、初めてのまだ呂律も整はない、半ば革命的な喧騒であつたのである。

ストライキの參與者は、大部分獨立社會民主黨の連中、及過激主義に傾いてゐた團體から驅り集

められたものであつた。自由労働組合の總委員、並に多數派社會黨の幹部は、汎ゆる意味に於て、之に參與することを拒絶した。

註 クリスト教産業組合、ヒルシ・ドゥンカー産業組合、黄色産業組合等は、ストライキに反對するものであるといふことは、彼等の政治的立場から見ても、殆どこゝに言及するを要しないであらう。

シヤイデマンは黨會議に於て、此のストライキを『構和にとつて最も重大なる』危険であると云つた。多數派社會黨の諸新聞は、一様に同じやうな調子でこれを非難した。これ等の新聞は、我等も實に構和の速かに來らんが爲に健闘してゐるのである。然しストライキは、此の目的を速に達する爲に、何等有效な手段ではなく、従つて社會民主黨は構和招致の行動を只攪亂するのみであると書いた。それに反して、獨立社會黨は全く公然に罷業者に同情を表した。然し彼等も亦或る程度迄、用心深い態度を取ることを忘れなかつた。黨の中央諸機關は、出来るだけ控え目にして、實際の方面をば地方團體に委してしまつた。

註 獨立社會黨の代議士コーンは千九百十七年五月五日の議會に於て宣言して言ふ、彼の黨派は、此のストライキ運動の起りについては少しも知らない。これは寧ろ民衆の全體の氣分から自發的に起つたものである。彼は更に言葉を續けて言ふ、『然し、ストライキに参加する労働者が、ストライキの始まつた後に、我黨にたよつて來る場合には、我等は彼等の事件を代表してやる。此の事は我等にとつては、政治上の名譽であ

リ、政治上の義務である』と、

ストライキは、四月六日即ちイギリスの攻撃が始まつてから八日後、亦フランスの春の總攻撃の始まつたと同じ日に、始まつた。一、三の示威運動が行はれたが、然し治安はこれによつて亂されなかつた。ライプチヒに於ては、過激派が指導的役目を演ずるに至つた。即ち彼處にあつては、初めてロシヤの例に従つて、一つの労働委員會が選ばれ、此の委員會は、あわただしく廣汎な政治的要求項目を掲げた。

註 プラーガーの『獨逸獨立社會民主黨史』を見よ。

國內に於ける秩序を保つ責任を持つてゐる留守軍司令部は、ストライキに對して準備してをり、其の蔓延を防ぐ爲に、時を移さず方策を施した。畿内に於ける司令部は其の監督區内に於て、軍需品工場に於ける罷業を禁止した。マルティニケンフェルデに於ける獨逸武器軍需品工場は、暫時軍隊工廠となされた。ダンチヒの留守軍司令部も、類似な方法をとつた。然し適當であると思はれた場合には、亦ストライキ労働者とも交渉を開始し、彼等に對して讓歩した。就中ストライキが始まる二日前、主謀者として逮捕されたリハルド・ミュラーを解放せよといふ要求に應じたのである。運動は數日の後に既に衰へて、遂に消えてしまつた。

此の結果は外部から見ても、どうしても罷業者にとつて成功ではなかつた。然しこゝには、労働者間にあつて、暴力手段の歸依者の勢力が、大股な進歩をなしたことを考慮しなければならぬ、獨立社會黨は、彼等の用心深い政策に依つて、自ら危険に陥ることなく、ストライキに際して政府が如何なる方策をとるかといふことを確かめることが出来た。彼等は公然とストライキの指導を引受け、ることなく、労働者階級に於ける不平連中と密接な接觸をなすことが出来、又多數派社會黨から、其の歸依者の著しい割合を切離すことが出来ると云ふ期待を持つた。彼等は、國內の平和、不平和にとりて最大の意義を有する武器を、黨の權威を以て神聖なるものと宣した。

形勢が何れに向つて進んで居るかを示すものは、千九百十七年五月一日に、中絶したストライキを新しい政治的衣装をつけて復活させようとした獨立社會黨の首領達の努力である。即ち帝國議會内黨の代議士會、並にプロシヤ議會の黨の代議士會は、一つの宣言書を出した。此の宣言書は直接ストライキを勧めるものではないが、その中に明瞭に言つてゐることは、労働者は「出来る限り常に彼等の衷心から感じてをる要求、即ち八時間労働、世界平和、萬國民の兄弟的友誼の爲に、彼等の聲を大にしなければならぬ」と言つてゐる。

此の企ては失敗に終つた。労働民衆にあつては、初めから最早政治的ストライキ運動に向ふべき

何等の傾向がなかつた。ハーゼの様な、極めて巧みな術策家を戴いてをる獨立社會黨は、直に一歩行きすぎたことを認め、従つて彼等の在來の用心深い、時機を待つ態度に立歸つたのである。

政治的性質を帯び、大なる連絡のとれた大ストライキは、その後千九百十七年内には最早起らなかつた。只一地方に限られた經濟上の部分的ストライキが、彼方此方に起つた。但是等のストライキにあつては、益々政治的要求が中心に持出されるに至つた。

さて此の間に、國民の身體的、心的疲勞と平和に對する憧憬とは、恐ろしく益々大きくなつて來た、生活状態は益々耐へられないやうな状態になつて來た。官憲の汎ゆる努力にも拘らず、食料品分配に於ける不公平は、依然として存在し、此の事に關する町と田舎との區別が益々劇しく表はるゝに至り、暴利業や隱蔽密賣業は、思ひもよらなかつた程盛んになつて來た。武器工場の労働者は無制限に増加される戦時収益に關して、企業者を非難した。然し彼等も同様に、金錢の惠に浴する爲に、極端に彼等の賃金の螺旋を捲き上げることを怠らなかつた。此の状態は更に、主として飢餓窮乏に悩んでゐる階級、即ち中流社會や、貧しい手工職人や、戦時工場に働いてゐない労働者の嫉妬を惹き起した。赤裸々なる生存競争の爲に、利己主義が、國民協同一致や、運命を共にすると云ふ様な、汎ゆる感情を蔽つてはびこるに至つた。政府の不確實な政策は、今や擡頭しつゝある道德

的混沌状態を一層甚しくした。千九百十七年の希望及約束に満ちた『復活祭の詔勅』にも拘らず、かの不幸なプロシヤの選挙権問題は、未解決のままになつた。戦争目的及媾和結末問題に於ける態度の動搖、竝にソビエトロシアとの講和の遅延は、政府に對する不平を益々大きくし、斯うした素地の上に、千九百十八年一月末に『總ストライキ』が起つた。

此の總ストライキの準備は、急激派からと、竝に獨立社會黨の左翼即ちレーデプールの翼に近い労働組合團體所屬のリハルド、ミュラー、パウエル、エツカルト、エルヴイン・バルトの連中により始められたのである。此の準備は、熱心な口傳的宣傳、竝に一味の信任委員の人々によつて、ストライキの標語を全國に蔓延さすことであつた。かく強大な運動を引起すのに、僅にこれだけの影響感化で十分であつたといふことは、當時獨逸の労働者の大部分が如何なる心的状態にあつたかを明瞭に示すものである。どの程度まで既にロシアの宣傳が影響を及ぼしてゐたかといふことは、確かと知ることは出来ない。然し何れにしても、此の一月のストライキを、革命的國際的思想の獨逸領内に於ける第一回の突撃であると考へるのは、殆ど誤らない推定であらう。

統一せる政治的指導が、此のストライキには缺けてゐた。労働組合、竝に多數派社會民主黨の領袖達は、當初彼等從來のストライキ否定的立場を守つてゐた。獨立社會黨も、少くとも其の中の主

なハーゼを中心とする連中は、此のストライキの指導を引受けることを餘り喜んでゐなかつた。然し彼等は、結局彼等の急激派分子に及ぼす勢力を、スパルタクス團體に奪はれることを恐れ、これ等の人々と事を共にするやうになつた。

註 二月二十二日の議會に於て、ハーゼは述べていふ、政治的ストライキはプロレタリア階級の有する奪ふことの出来ない一つの武器である。獨立社會黨の代議士會は、こゝに罷業する労働者と密接に連絡をとつてゐたこと、竝にこれらの労働者をして、ストライキに走らしめた思想感情を、共に分つものであることを宣言すると。

併しながら一定の政治的要求も掲げられなければ、亦とるべき作戦についての一致も見出されなかつた。

ストライキの範圍が極めて大きくなつたのを見て、労働組合竝に多數黨社會主義者の連中は、在來とり來つたストライキ否定的態度を、尙固守してゆくことが出来るかについて、疑惑を懷くに至つた。

註 罷業者の数は一月二十八日から三十日の間にベルリンだけでも、數千人に達し武器工業の澤山な作業所は大抵ストライキの渦中に引込まれた。

こゝに於て労働組合の幹部は、結局一つの血路を見出した。即ち彼等は、労働組合純經濟的性質